



下田歌子賞20周年記念

# 下田歌子賞受賞作品集



夢

ゆめ



- Ⅰ 第20回下田歌子賞受賞作品
- Ⅱ 第10～19回  
受賞者からのメッセージ
- Ⅲ 下田歌子賞について

下田歌子賞20周年記念

下田歌子賞受賞作品集「夢」



主催 ● 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会  
岐阜県恵那市 恵那市教育委員会 学校法人実践女子学園  
共催 ● 株式会社PHP研究所  
後援 ● 岐阜県教育委員会 多治見市教育委員会 土岐市教育委員会  
瑞浪市教育委員会 中津川市教育委員会 東京都日野市 日野市教育委員会  
嚶鳴協議会



# いあいさつ

惠那市長  
小坂 喬峰  
こさか たかね

惠那市のふるさとの先人の一人で、わが国近代女子教育の先駆者であり歌人としても有名な下田歌子先生の生誕百五十年を記念して、平成十五（二〇〇三）年から始まった下田歌子賞も、二十周年を迎えることができました。これもひとえに、全国からの応募者の皆様、第一回から共催いただいております実践女子学園とPHP研究所、選考委員の先生方や下田歌子賞実行委員会をはじめとする関係者の皆様のご尽力の賜物と深く感謝いたしております。

さて、第二十回となる本年度（令和四年度・二〇二二年度）は、「夢」をテーマに募集しました。

「綾錦 あやにしき 着てかへらずば みくにやま 三国山 あやにしき またふたたびは 越えじとぞ思ふ」（胸に抱いている夢と志を果たすまでは、故郷に通じる三国山を越えて帰郷しない）

江戸から明治へ、近世から近代へと世の中が大きく変わる時代に生まれ育った下田歌子先生は、明治四（一八七二）年四月、大きな夢と志を抱いて十六歳でふるさと岩村（今の岐阜県惠那市岩村町）を離れ、東京へと旅立ちました。以来、百五十余年、大きな時代変革の波の中で生きる私たちに下田歌子先生はなにを語りかけてくれているのか——そんな思いとともに「夢」をテーマに選んだところ、例年に倍する秀作が全国から寄せられました。

また、下田歌子賞十周年にあたる平成二十四（二〇一二）年度には、第一回から九回までの受賞者の皆様からいただいたメッセージをまとめた記念誌を発行しましたが、二十周年を迎えた本年度は、第十回から十九回のエッセイの部受賞者の皆様にメッセージを募集し、多くの方にお便りをいただきました。

そこで、本年度は、例年の受賞作品集ではなく、『下田歌子賞二十周年記念 下田歌子賞受賞作品集』と題して、第二十回の受賞作品、第十回から十九回までの受賞者の皆様からのメッセージ、下田歌子賞の歩みの三部構成で受賞作品集を制作させていただきました。受賞作品と受賞者の皆様の思い、そして下田歌子賞の歩みを紹介した本書を、事業の記録・記念誌に留めるのではなく、次の時代に向かっての生き方、考え方のヒントとしてお読みいただき、ご活用いただければ幸いです。

# 「下田歌子賞20周年記念」 下田歌子賞受賞作品集 目次

※小学生の部、中高生の部の住所は学校所在地です。

ごあいさつ ..... 恵那市長 小坂 喬峰 1

## I 第20回下田歌子賞受賞作品

選考経過 ..... 7

【講評】 きびしい現実をこえて、リンゴの木を植える作品を ..... 選考委員長・作家 童門 冬二 8

夢はより大きく、より高く、より深く ..... 東洋大学名誉教授 吉田 公平 10

ひらめき、トキメキ、きらめき溢れる人生に ..... 元宝塚歌劇団・恵那観光大使 初風 緑 11

脆く儚いけれど、力強く、鋭い言葉の力 ..... 実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長 難波 雅紀 12

他者に対する思いがいっぱい ..... 月刊誌「歴史街道」特別編集委員 寺田 昭一 13

募集要項 ..... 14  
 14／受賞者一覧 ..... 15  
 15／学校賞受賞校、選考委員、主催・共催・後援 ..... 16

### 小学生の部

◆短歌の部 ..... 18

【最優秀賞】 愛知県東海市 堤 惺真 ..... 18

【優秀賞】 岐阜県恵那市 鵜澤 梨乃 ..... 18

【入選】 岐阜県恵那市 後藤 花菜／岐阜県恵那市 水野 悠希／神奈川県秦野市 諸田 和真 ..... 19

◆エッセイの部 ..... 20

【最優秀賞】 私の夢 ..... 岐阜県恵那市 志布志市 鹿兒島県志布志市 ..... 20

【優秀賞】 科学は魔法 ..... 岐阜県恵那市 ..... 20

子ども思いの小児科看護師へ ..... 岐阜県恵那市 ..... 21

大切な目標 ..... 岐阜県恵那市 ..... 22

泣き声 ..... 岐阜県恵那市 ..... 22

海洋学への夢 ..... 岐阜県恵那市 ..... 23

わたしのゆめは「しょうぼうし」 ..... 岐阜県恵那市 ..... 24

狛師になりたい ..... 岐阜県恵那市 ..... 25

今わたしができること ..... 岐阜県恵那市 ..... 25

パティシエ ..... 岐阜県恵那市 ..... 26

【囀鳴協議会賞】

今井 陽菜乃 ..... 26

## 中高生の部

### ◇短歌の部

【最優秀賞】

埼玉県さいたま市 北澤 愛花

【優秀賞】

兵庫県神戸市 佐藤 柊太

【入選】

岐阜県恵那市 伊藤 百音／岐阜県恵那市 栗下 星七／神奈川県小田原市 吉居 侑子

### ◇エッセイの部

【最優秀賞】

誰かの「生きる」を支える

【優秀賞】

紙とペンと消しゴム

夢のきっかけ

生きる

【佳作】

人との関わり

私の夢は

思いをつなぐ

自分らしさ

夢がくれたもの

## 一般の部

### ◇短歌の部

【最優秀賞】

愛知県東海市 加藤 久子

【優秀賞】

静岡県掛川市 加茂 杏奈

【入選】

神奈川県横浜 岡部 晋一／佐賀県唐津市 古賀 由美子／愛知県名古屋 米倉 彰一

### ◇エッセイの部

【最優秀賞】

戦争をなくすこと

【優秀賞】

夢を語った島四国

私の使命

お掃除と母とわたしの物語

夢、掌のひらほどの

夢、応援

共に持つ夢

ショートカットのプリンスを夢見て

ばあちゃんの夢

## Ⅱ 第10、19回受賞者からのメッセージ

はじめに

..... 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会会長

西尾 公男

小学生の部・受賞者からのメッセージ

中高生の部・受賞者からのメッセージ

一般の部・受賞者からのメッセージ

【コラム】下田歌子賞の朗読コンクール

..... 65／初風緑さんのトークショー

..... 71／コロナ禍での表彰式

92

72 66 60 59

## Ⅲ 下田歌子賞について

二十周年を迎えて

..... 実践女子学園理事長

山本 章正

下田歌子賞・二十年の歩み

..... 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会副会長

鈴木 隆一

【二十周年雑感】

歌子先生、どこにおられるの？

..... 選考委員長・作家

童門 冬二

視野を広げ、深く思索する機会

..... 選考委員・東洋大学名誉教授

吉田 公平

ひつまぶしと徳増省允さん

..... 月刊誌「歴史街道」特別編集委員

寺田 昭一

下田歌子先生のこと

..... 童門 冬二

【コラム】第1回受賞者からのメッセージ

..... 99／囀鳴協議会と囀鳴協議会賞

101

選考委員一覧

各回の募集テーマと応募数一覧

111 110

109 108 107 106

96 95





I  
第20回下田歌子賞受賞作品



## 選考経過

### 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会

第二十回下田歌子賞は「夢」をテーマに、エッセイと短歌を、それぞれ小学生の部、中学生の部、一般の部の三部門に分けて、令和四（二〇二二）年六月八日から九月八日までの三か月にわたり全国募集を行いました。

その結果、エッセイ部門は、「小学生の部」一九四作品、「中学生の部」一二五七作品、「一般の部」二八四作品、合計一六三五作品が、短歌は、「小学生の部」二二八四首、「中学生の部」九一四首、「一般の部」四二〇首、合計二六一八首の秀作が全国から寄せられました。

応募いただいたエッセイは、下田歌子賞実行委員会とPHP研究所での厳正な事前選考を経た後、作家の童門冬二氏を選考委員長に、東洋大学名誉教授の吉田公平氏、元宝塚歌劇団員で恵那観光大使の初風緑氏、月刊誌「歴史街道」特別編集委員の寺田昭一氏、難波雅紀実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長、小坂喬峰恵那市長の六名の選考委員により、最終選考を行ない、各部門それぞれ、最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作五作品を入賞作品として選びました。また、本年度から、最終選考で入賞外となったものの特に努力が認められる作品について嚶鳴協議会賞を授与することになり、本年度は小学生の部一作品が嚶鳴協議会賞に選ばれました。

短歌の部は、昨年度までは、実行委員会による事前選考を通過した作品を対象に、恵那市民および恵那市への来訪者の皆様の投票選考により、投票数の多い順に入選作品を決めていましたが、本年度からは、エッセイ部門と同様、事前選考の後、選考委員による最終選考を行ない、各部門、最優秀賞一作品、優秀賞一作品、入選三作品を選ぶことになりました。

表彰式は、令和五（二〇二三）年一月二十一日（土）に恵那文化センターで開催。入賞者・入選者には正賞・副賞が贈られました。短歌の部の入選者には、正賞・副賞の他に、恵那市在住の書家・神谷慎軒氏の書による入選作品の短冊が記念品として贈呈されました。



【講評】

きびしい現実をこえて、

リングの木を植える作品を

選考委員長・作家

どうもん  
童門 冬二  
ふゆじ



かつては、夢は実現不可能なものでありました。だからこそ夢なのだという逆説もなり立ちました。しかし今回の傾向は、夢の実現にすでに足を一歩踏みいれているというリアリティがあり、その切実さに胸をうたれることがたくさんありました。これは小学生から一般に及ぶ共通点です。

「身近な現実が夢をみさせてくれない」

というのが応募者のおかれた生活環境なのだ、と切実に感じました。

一番多い夢は「介護」をテーマにした作品です。それも作者が第三者ではなく、直接かわりあう立場におかれている例が多いことです。それも作者が対象とする患者が、

「他に例がない」

といていいような、特別な病例が多く、そのこと自体にも胸をうたれました。

「何とかしてあげたい」

という気持ちは湧いても、

（何もできない）

という無力感におそわれるのがしばしばでした。

しかし多くの役割は応募作品の中から、「賞」に値する作品を選ぶことです。現実のきびしさを越えて、ある基準を用意しなければなりません。

ばくがいまこういう場合に用意している基準は、ご承知の方が多いと思いますが、かつてルーマニアの作家コンスタンチン・

ゲオルギウが、世界に送ったメッセージです。

「たとえ世界の終末が明日であろうとも、私は今日（も）リンゴの木を植える」

というものです。今回の最終選考時にぼくが判断基準にしたのは、この言葉です。

作品的にはほとんど差はありません。ただ「そのきびしい現実をこえて、さらにリンゴの木を植えようとしている」と感じられた作品を選入・入賞作に選びました。「私も植えてますよ」と、洩れた方のご不満も十分承知の上での苦汁の選択です。ご了解を。

## 童門 冬二

作家。昭和二（一九二七）年、東京生まれ。東京都広報室長、企画調整局長、政策室長など要職を歴任後、退職し作家活動に専念。在職中に培った人間管理と組織の実学を歴史と重ね合わせ、小説、ノンフィクションの世界に新境地を拓く。『小説 上杉鷹山』『小説 佐藤一斎』『家庭こそ最良の学校です』下田歌子先生の生き方・考え方（恵那市ふるさと学習読本）など、著書は六百冊以上。

【講評】

夢はより大きく、

より高く、より深く

東洋大学名誉教授

よしだ こうへい  
吉田 公平



夢とか理想とはちょっと努力すれば実現できるものではない。それは現実の延長に過ぎない。実現できないかも知れないが、そうあってほしい、そのようにできればともうれしい、というほどのものである。個人としての夢もあれば、日本社会に関する願い、世界人類にとつての理想というものもある。その実現に向けて全力で立ち向かうことができなかつたとか、夢の半分も実現できなかったからと、責任を問われることはない。それは、念願だつたのだから。だからこそ、その夢はより大きく、より高く、より深いものであつた方が、我々を励ましてくれる。あの夢に一步でも近づくために、今日の一日を大事に生きようと促してくれる。

一日一日の生き方はささやかなものである。しかし、そのささやかな一日のふるまいがより大きく、より高く、より深い夢の実現を目指したものであるなら、そのささやかな生活が喜びに満ちた豊かなものになるのではないだろうか。釣り鐘は大きくたたけば大きく鳴る。小さくたたけば小さく鳴る。小さい鐘の音もそれなりに快いものだが、大きい鐘の音は多くの人々に聞こえるに違いない。皆さんが記された夢は慎ましやかなものが多かった。日常性に跼まる（かがんで背を丸くする）のではなく、より高く、より大きく、より深い夢を描いてみてはいかがであらうか。就寝中の夢は破天荒である。皆さんは目覚めの中で夢を語られた。それだけになおのこと、大きく高く深い夢をみていただきたい。

吉田 公平

昭和十七（一九四二）年、宮城県岩沼市生まれ。東洋大学名誉教授。中国哲学・日本近世思想史専攻。「陽明学」を中心に西洋思想と比較、今日的な意義を探索する。現在は、岩沼を拠点に中国思想、日本思想の研究・啓蒙活動を展開。「陸象山と王陽明」「日本における陽明学」など著書多数。



【講評】

ひらめき、トキメキ、

きらめき溢れる人生に

元宝塚歌劇団・恵那観光大使

初風 緑



第二十回下田歌子賞、短歌の部二六一八首、エッセイの部一六三五作品どの作品も『夢』と向き合う心に変え感動いたしました。下田歌子先生も大変お喜びの事と思います。

選考委員唯一の女性目線での評価。

私の心と向き合いながら、自身の夢と重ねながら採点いたしました。個人的には、令和四（二〇二二）年六月に大きな頸動脈瘤がみつかり、七月に開頭手術を致しました。

『夢』夢に向かい日々自身自身を高めてまいりましたが……。

退院後、この半年間過ごしなが、人生こそが夢のなか……。

生きていることが夢の中なのかもしれない……。

そんなことを感じてしまいました。

心で生きている悦びに満ち溢れ、生涯、周りの方々、ご縁のある方々に愛される人でいたい！

わたしの夢も再確認する一年になりました。これからも、皆様がひらめきと、トキメキと、きらめき溢れる人生になりますようにお祈りしています。

初風 緑

実践女子学園中学校・高等学校を卒業後、昭和六十三（一九八八）年、宝塚歌劇団に入団し男役スターとして活躍。確かな演技力と伸びやかなダンスで観客を魅了。平成十七（二〇〇五）年に退団した後、テレビや舞台で活躍。ストレッチ・バレエスタジオ「上野毛 G1 Studio」を主宰する他、実践女子大学の講師等も務める。令和二（二〇二〇）年より恵那観光大使。

【講評】

脆く儂いけれど、

## 力強く、鋭い言葉の力

実践女子大学・  
実践女子大学短期大学部学長

難波 雅紀  
なんば まさのり



「夢」をテーマに書かれた、いろいろなエッセイと短歌を読ませていただきました。まずはエッセイの部ですが、小学生の作品からは、抽象的であれ、具体的であれ、自分の「夢」を真っ直ぐに語る言葉から、語り手の熱意と強い意志を知ることができました。中高校生のエッセイは、他者との係わりの中で自分の「夢」を捉えるものが多かったのですが、「夢」の実現のための努力を惜しまない気概が感じられました。一般の部では、「夢」を叶えた成功物語は、読み手を晴れ晴れとした気分させてくれましたし、夢追いに挑戦し続けている冒険譚は、語り手の湧き出るエネルギーでいっぱいでした。また、他者の「夢」の実現を後押しするエッセイには、人を愛おしみ包み込む優しさがありました。短歌の部の審査は初めてでしたが、想いを託した三十一音の語が、色々な「夢」をありありと描き出していて、読み手を「夢」の世界にいるような、ワクワクした気分になさしてくれました。

今回、読ませていただいた作品も、どれもみな個性的で、素敵なものばかりでした。読む機会を与えていただいたことに心から感謝しています。言葉は脆く儂いけれど、力強いし、鋭くもあります。その言葉の力を信じ、自分の「夢」を伝えようとする語り手の真摯な姿勢に、とても心打たれました。そのことを最後に書き留めておきたいと思います。

### 難波 雅紀

昭和六十三（一九八八）年、上智大学大学院文学研究科英米文学専攻博士前期課程修了。平成九（一九九七）年に実践女子大学文学部英文学科助教として着任。平成十五（二〇〇三）年から実践女子大学文学部英文学科教授、平成二十九（二〇一七）年から副学長、令和三（二〇二一）年より学長および副理事長を務めている。専門はアメリカ文学・文化。「アメリカの嘆き——米文学史の中のピューリタニズム」「英米文学のリヴァーヴ——境界を超える意志」「アメリカ文学案内」などの共著がある。

【講評】

## 他者に対する思いがいっぱい

月刊誌「歴史街道」特別編集委員

寺田 昭一  
てらだ しょういち



応募作品を拝読しながら、ふと気になって、夢と志（昨年度まで五回続いたテーマ）の意味を国語辞書で引いてみました。「夢」は将来実現させたいと思っている願い。

「志」は心に決めた目標に向けて、進もうとする気持ち。また心に決めた目標。

とありました。また、夢には「現実から離れた空想。はかないもの。たよりにならないもの」、志には「相手のことを思う親切な気持ち」という意味もありました。

なるほど、と思いました。エッセイの応募数が昨年までより大幅に増えたこと、昨年までと違って、作品のタッチがどこか軽やかに感じたこと……「志」から「夢」へとテーマが変わることにより、どこか肩の力が抜けて、軽やかに作品が書けたのかな、というのが、最初の印象でした。

エッセイ、短歌を含めて、今回応募いただいた作品には、軽やかな中にも現実（今自分がいる場所や置かれている立場）に即して、自分自身や社会を見つめた作品がたくさんありました。明るく夢を語りながら、自分の中にある目標や志（しかも、「みんなを笑顔にできるように」「人を喜ばせるために」「みんな元気で過ごせるように」と他者に対する思いがいっぱいつまった）に向かって着実に歩んでおられる姿が目に見えてくる作品ばかりで、感動で胸がいっぱいになりました。不安いっぱいの世の中で、生きる元氣と勇氣を与えてくれた応募者の皆さんに感謝します。

### 寺田 昭一

昭和三十一年（一九五七年）、大阪生まれ。大阪外国語大学（現…大阪大学）ロシア語科卒業後、PHP研究所に入社。文芸書、教養新書等の一般単行本編集の後、昭和六十二年（一九八七年）、月刊誌「歴史街道」創刊メンバー。その後、同誌編集長、PHP総研シニア・コンサルタント（歴史まちづくり担当）を経て、令和三年（二〇二一年）、PHP研究所を退職。現在、フリーランスとして月刊誌「歴史街道」特別編集委員、嚶鳴協議会スーパバイザー等を務めている。

## 第20回 下田歌子賞 募集要項

### ■テーマ 夢

「綾錦<sup>あやにしき</sup> 着てかへらずば 三国山<sup>みくにやま</sup> またふたたびは 越えじとぞ思ふ」(胸に抱いている夢と志を果たすまでは、故郷に通じる三国山を越えて帰郷しない)——わが国近代女子教育の先駆者と言われる下田歌子先生は、大きな夢と志を抱いて16歳でふるさと岩村(今の岐阜県恵那市岩村町)を離れ、東京へと旅立ちました。

あなたには、どんな「夢」がありますか? その夢に何を託し、どんな明日を思い描いていますか? 夢を実現するために、今、考えていること、行なっていることはありますか?

あなた自身のこと、家族や友人・知人のこと、明日の世界や日本、地球や人類のこと……「夢」をテーマに、あなたの想いを綴ったエッセイと短歌を募集します。

### 【エッセイの部】

募集テーマに沿って、具体的なエピソードを添えた作品をお寄せください。(1人1作品に限ります。)

◎原稿枚数 一般の部 ◇2,000字程度(400字詰原稿用紙5枚程度)

中高生の部 ◇1,200字程度(400字詰原稿用紙3枚程度)

小学生の部 ◇800字程度(400字詰原稿用紙2枚程度)

◎応募期間 令和4年(2022)年6月8日(水)～9月8日(木)(当日消印有効)

#### ◎各賞

##### <一般の部>

- ◆最優秀賞 1編  
正賞、副賞(賞金10万円)
- ◆優秀賞 3編  
正賞、副賞(賞金3万円)
- ◆佳作 5編  
正賞、副賞(賞金1万円)

##### <中高生の部>

- ◆最優秀賞 1編  
正賞、副賞(図書カード1万円分)
- ◆優秀賞 3編  
正賞、副賞(図書カード5千円分)
- ◆佳作 5編  
正賞、副賞(図書カード3千円分)

##### <小学生の部>

- ◆最優秀賞 1編  
正賞、副賞(図書カード5千円分)
- ◆優秀賞 3編  
正賞、副賞(図書カード3千円分)
- ◆佳作 5編  
正賞、副賞(図書カード2千円分)

※上記各賞以外で、とくに努力が認められる作品に「嚶鳴協議会賞」を授与

### 【短歌の部】

募集テーマに沿った短歌をお寄せ下さい。(1人1首に限ります。)

#### ◎各賞

##### <一般の部>

- ◆最優秀賞 1首  
正賞、副賞(賞金2万円、記念品)
- ◆優秀賞 1首  
正賞、副賞(賞金1万円、記念品)
- ◆入選 3首  
正賞、副賞(賞金5千円、記念品)

##### <中高生の部>

- ◆最優秀賞 1首  
正賞、副賞  
(図書カード5千円分、記念品)
- ◆優秀賞 1首  
正賞、副賞  
(図書カード3千円分、記念品)
- ◆入選 3首  
正賞、副賞  
(図書カード2千円分、記念品)

##### <小学生の部>

- ◆最優秀賞 1首  
正賞、副賞  
(図書カード3千円分、記念品)
- ◆優秀賞 1首  
正賞、副賞  
(図書カード2千円分、記念品)
- ◆入選 3首  
正賞、副賞  
(図書カード千円分、記念品)

◎応募期間 令和4年(2022)年6月8日(水)～9月8日(木)(当日消印有効)

### 【学校賞】

エッセイの部、短歌の部いずれか、または両方に学校で取り組み応募作品が顕著に多い学校に、学校賞を贈呈。

### ■表彰式

令和5年(2023)1月21日(土) 岐阜県恵那市で表彰式

\*「一般の部」最優秀賞受賞者、「中高生の部」「小学生の部」最優秀賞・優秀賞受賞者と保護者1名を旅費主催者負担でご招待

\*録画映像配信



## 第20回 下田歌子賞 受賞者一覧

### エッセイの部 テーマ「夢」

#### ■小学生の部

(氏名50音順 応募総数：194作品)

| 賞      | 作品タイトル          | 氏名     | 学校名・学年             |
|--------|-----------------|--------|--------------------|
| 最優秀賞   | 私の夢             | 渡邊 喬香  | 鹿児島県志布志市立松山小学校 6年  |
| 優秀賞    | 科学は魔法           | 金子 和愛  | 岐阜県恵那市市立長島小学校 6年   |
|        | 子ども思いの小児科看護師へ   | 林 しずく  | 岐阜県恵那市市立大井第二小学校 6年 |
|        | 大切な目標           | 矢筈原 綺乃 | 岐阜県高山市市立東小学校 5年    |
| 佳 作    | 泣き声             | 秋山 紗祈  | 岐阜県恵那市市立岩田小学校 6年   |
|        | 海洋学への夢          | 可知 舜大  | 岐阜県恵那市市立大井第二小学校 6年 |
|        | わたしのゆめは「しょうぼうし」 | 可知 実穂子 | 岐阜県恵那市市立長島小学校 1年   |
|        | 猟師になりたい         | 瀬戸 輝馬  | 岐阜県恵那市市立岩田小学校 5年   |
|        | 今わたしができること      | 渡邊 夢心  | 岐阜県恵那市市立長島小学校 4年   |
| 囀鳴協議会賞 | パティシエ           | 今井 陽菜乃 | 岐阜県恵那市市立長島小学校 3年   |

#### ■中学生の部

(氏名50音順 応募総数：1,157作品)

| 賞    | 作品タイトル       | 氏名     | 学校名・学年             |
|------|--------------|--------|--------------------|
| 最優秀賞 | 誰かの「生きる」を支える | 西山 絢那  | 東京都・実践女子学園中学校 3年   |
| 優秀賞  | 紙とペンと消しゴム    | 岡田 信太郎 | 岐阜県恵那市市立恵那東中学校 2年  |
|      | 夢のきっかけ       | 小池 日万莉 | 東京都・実践女子学園中学校 1年   |
|      | 生きる          | 細貝 早希  | 東京都・駒澤大学高等学校 3年    |
| 佳 作  | 人との関わり       | 久世 結菜  | 東京都・実践女子学園中学校 2年   |
|      | 私の夢は         | 高橋 聖花  | 徳島県阿南市市立阿南第一中学校 3年 |
|      | 思いをつなぐ       | 原 心穂   | 岐阜県恵那市市立岩田中学校 3年   |
|      | 自分らしさ        | 東口 杏梨  | 東京都・実践女子学園中学校 2年   |
|      | 夢がくれたもの      | 平野 千怜  | 茨城県阿見町立朝日中学校 2年    |

#### ■一般の部

(氏名50音順 応募総数：284作品)

| 賞    | 作品タイトル            | 氏名      | 住所        |
|------|-------------------|---------|-----------|
| 最優秀賞 | 戦争をなくすこと          | 感王寺 美智子 | 福岡県朝倉市    |
| 優秀賞  | 夢を語った島四国          | 相野 正    | 大阪府堺市     |
|      | 私の使命              | 後藤 里奈   | 東京都杉並区    |
|      | お掃除と母とわたしの物語      | 鈴木 里梨   | 鹿児島県鹿児島市  |
| 佳 作  | 夢、掌のひらほどの         | 臼木 颯    | 愛知県武豊町    |
|      | 夢、応援              | 高田 外亀雄  | 北海道七飯町    |
|      | 共に持つ夢             | 伏見 浩之   | 東京都世田谷区   |
|      | ショートカットのプリンセスを夢見て | 藤本 ゆきな  | 愛知県名古屋市中区 |
|      | ばあちゃんの夢           | 見澤 富子   | 埼玉県所沢市    |

### 短歌の部 テーマ「夢」

#### ■小学生の部

(氏名50音順 応募総数：1,284作品)

| 賞    | 作 品                                                                      | 氏名    | 学校名・学年             |
|------|--------------------------------------------------------------------------|-------|--------------------|
| 最優秀賞 | ねたきりが ふわりすいすい そらをとぶ みらいのざいす おばあちゃんのせしあわせが とろりとろける チョコパンを わたしがつくる おおきなゆめだ | 堤 惺真  | 愛知県東海市市立横須賀小学校 1年  |
| 優秀賞  | 人生を 描くキャンパス まだ白く 染めゆく色に 思いを馳せる                                           | 鶴澤 梨乃 | 岐阜県恵那市市立大井第二小学校 1年 |
| 入 選  | マスクなし みんなのえがお あそぶこえ うたごえのせて せかいにとどけ                                      | 後藤 花菜 | 岐阜県恵那市市立岩田小学校 4年   |
|      | なりたないな ゆめのリニアの じょうむいん みんなをのせて えなを走るよ                                     | 水野 悠希 | 岐阜県恵那市市立岩田小学校 3年   |
|      | 作るんだ 病気に負けぬ ワクチンを ぼくが守るぞ 世界の健康                                           | 諸田 和真 | 神奈川県秦野市市立南小学校 5年   |

#### ■中学生の部

(氏名50音順 応募総数：914作品)

| 賞    | 作 品                                    | 氏名    | 学校名・学年           |
|------|----------------------------------------|-------|------------------|
| 最優秀賞 | 遠くても 夢は逃げない 走り出せ 追うのは自分 越えるも自分         | 北澤 愛花 | 埼玉県・栄東中学校 3年     |
| 優秀賞  | 夢を見る その身笑われ ぼんやりとも 見る者のみに 見える景色が       | 佐藤 柊太 | 兵庫県立長田高等学校 2年    |
| 入 選  | 人生を 描くキャンパス まだ白く 染めゆく色に 思いを馳せる         | 伊藤 百音 | 岐阜県恵那市市立明智中学校 2年 |
|      | 十七年 お世話になった 故郷(ふるさと)に 恩返しすると 決めた夏の夜(よ) | 栗下 星七 | 岐阜県立恵那南高等学校 2年   |
|      | 書き出しの 一行埋めた 原稿は 今や止まらぬ 夢のめざめに          | 吉居 侑子 | 神奈川県立小田原高等学校 3年  |

#### ■一般の部

(氏名50音順 応募総数：420作品)

| 賞    | 作 品                                    | 氏名     | 住所        |
|------|----------------------------------------|--------|-----------|
| 最優秀賞 | 学びたい 心の叫び 叶わずに 生きた来し方 今こそ夢を            | 加藤 久子  | 愛知県東海市    |
| 優秀賞  | 夢語る 生徒のまなこに 教へられ 吾もと先づは 窓開け放つ          | 加茂 杏奈  | 静岡県掛川市    |
| 入 選  | ミサイルを 撃つな撃たすな 青空は 子供が夢を 描く画用紙          | 岡部 晋一  | 神奈川県横浜市内  |
|      | しゃぼん玉 追いかけてまた 追いかけて 子らの瞳に 夢があふれる       | 古賀 由美子 | 佐賀県唐津市    |
|      | 幾年 (いくとせ) も 春めぐり来て 夢めぐり ももとせ学ば 死して朽ちずと | 米倉 彰一  | 愛知県名古屋市中区 |

## 第20回 下田歌子賞 学校賞受賞校

学校賞は、「エッセイの部」「短歌の部」いずれか、もしくは両方に、学校で取り組んでいた  
 だき、応募数が顕著に多かった学校に授与させていただく賞です。

|      | 学校名          | 所在地     | 受賞対象部門  |
|------|--------------|---------|---------|
| 小学校  | 恵那市立岩邑小学校    | 岐阜県恵那市  | エッセイ・短歌 |
|      | 恵那市立大井第二小学校  | 岐阜県恵那市  | エッセイ・短歌 |
|      | 恵那市立長島小学校    | 岐阜県恵那市  | エッセイ・短歌 |
|      | 恵那市立飯地小学校    | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 恵那市立恵那北小学校   | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 恵那市立大井小学校    | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 恵那市立串原小学校    | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 日野市立南平小学校    | 東京都日野市  | 短歌      |
| 中学校  | 恵那市立山岡中学校    | 岐阜県恵那市  | エッセイ・短歌 |
|      | 恵那市立岩邑中学校    | 岐阜県恵那市  | エッセイ    |
|      | 実践女子学園中学校    | 東京都渋谷区  | エッセイ    |
|      | 恵那市立明智中学校    | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 恵那市立恵那西中学校   | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 恵那市立恵那東中学校   | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 恵那市立上矢作中学校   | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 恵那市立串原中学校    | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
| 高等学校 | 多治見西高等学校     | 岐阜県多治見市 | エッセイ    |
|      | 岐阜県立恵那農業高等学校 | 岐阜県恵那市  | 短歌      |
|      | 岐阜県立恵那南高等学校  | 岐阜県恵那市  | 短歌      |

## 第20回 下田歌子賞 選考委員

童門 冬二 ◎作家（選考委員長）  
 吉田 公平 ◎東洋大学名誉教授  
 初風 緑 ◎元宝塚歌劇団・恵那観光大使  
 難波 雅紀 ◎実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長  
 寺田 昭一 ◎月刊誌「歴史街道」特別編集委員  
 小坂 喬峰 ◎岐阜県恵那市長

## 第20回 下田歌子賞 主催・共催・後援

【主催】 恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会

岐阜県恵那市・恵那市教育委員会

学校法人実践女子学園

【共催】 株式会社 PHP 研究所

【後援】 岐阜県教育委員会・多治見市教育委員会・土岐市教育委員会・瑞浪市教育委員会

中津川市教育委員会

東京都日野市・日野市教育委員会

嚶鳴協議会（大野町〈岐阜県〉、沖縄市〈沖縄県〉、小田原市〈神奈川県〉、釜石市〈岩手県〉、  
 木曽町〈長野県〉、高鍋町〈宮崎県〉、多久市〈佐賀県〉、東海市〈愛知県〉、長野市〈長  
 野県〉、日田市〈大分県〉、養父市〈兵庫県〉、米沢市〈山形県〉、恵那市）

第  
20  
回  
下  
田  
歌  
子  
賞  
受  
賞  
作  
品

# 小学生の部

「夢」の歌

最優秀賞

ねたきりがふわりすいすい そらをとぶ  
みらいのざいす おばあちゃんのせ 惺真詠



ねたきりが ふわりすいすい そらをとぶ  
みらいのざいす おばあちゃんのせ

愛知県東海市立横須賀小学校一年 堤惺真

つみぎま

優秀賞

しあわせがとろりとろける チョコパンを  
わたしがつくる おおきなゆめだ 梨乃詠



しあわせが とろりとろける チョコパンを  
わたしがつくる おおきなゆめだ

岐阜県恵那市立大井第二小学校一年 鵜澤梨乃

うざわりの



入 選

マスクなし みんなのえがお あそぶこえ  
うたごえのせて せかいにとどけ 花菜詠



マスクなし みんなのえがお あそぶこえ  
うたごえのせて せかいにとどけ

岐阜県恵那市立岩邑小学校四年

後藤 花菜

入 選

なりたいな ゆめのリニアのじょうむいん  
みんなをのせて えなを走るよ 悠希詠



なりたいな ゆめのリニアの じょうむいん  
みんなをのせて えなを走るよ

岐阜県恵那市立岩邑小学校三年

水野 悠希

入 選

作るんだ 病気に負けぬ ワクチンを  
ぼくが守るぞ 世界の健康 和真詠



作るんだ 病気に負けぬ ワクチンを  
ぼくが守るぞ 世界の健康

神奈川県秦野市立南小学校五年

諸田 和真

## 私の夢

鹿児島県志布志市立松山小学校六年 渡邊 喬香 わたなべ けいこう

私の夢は、日本一の米農家になることです。私の父は、地元で米を生産しています。そんな父に憧れて、私も大人になったら米農家になりたいです。

父は、朝早くから夜遅くまで、田んぼへ行きます。雨の日も、台風の日も、一日も欠かすことなく田んぼに行きます。そんな父の作る米は甘く、粒が大きくおいしいです。きっと、父の愛情がたっぷり詰まっているからだと思います。隣の田んぼで虫が発生したと聞けば薬を使って防虫し、病気が発生したと聞けば予防をするために農薬を計算して散布します。

父はよく、

「農家は算数ができないとおいしい作物は作れない」

と言います。なぜだろうかと考えてみると、農薬を使うときに水で薄めて使ったり、一反当りに使用できる薬の量を計算しなければならぬのです。「農薬をするのに勉強が大事なんだ」と感じました。「算数が苦手、国語も嫌い」なんて言っている場合ではありません。

ある年、大雨で地盤がゆるみ、田んぼが砂で埋まってしまったことがあります。父は誰よりも先に田んぼへ行き、被害を把握して周りの人たちと一緒に復旧作業を始めました。「おまえがおつ

たじ、早よ復旧ができたが」と年配の方に喜ばれていました。そんな父が「本当にすごいな」と思いました。私が父と同じ立場なら、きっと何もできずに他の人からの指示を待ち、自分から何かすることはできないと思います。

未来のために、今の私にできることは何か考えました。まずは、苦手な算数を頑張り、計算が早くできるように努力する、そして国語はたくさん本の読み、学校では習わない漢字を覚えたり、文章を読み解く力を付けたりすることだと思いました。

私もあと六年したら大人の仲間入りです。その時、父とかたを並べて日本一の米農家になれるように、これからも勉強、スポーツを頑張りたいです。

## 優秀賞

## 科学は魔法

岐阜県恵那市立長島小学校六年 金子 和愛 かねこの あい

私が魔法使いになりたいと思い始めたのは、小学校の低学年ぐらいだっただろうか。

どうして魔法使いになりたかったかというと、みんなを笑顔にしたかったからである。物語やアニメに出てくる、親切魔法使い、例えば、オズの魔法使いの南の場所、ライオンとかかし、それにブリキのきこりのねがいをかなえ、ドロシーに、家に戻る方法を教えてくれる、そんな姿にあこがれた。

けれど、そんな魔法使いはこの世に存在しない事にやがて気付

いてしまった。だから、「大きくなったら何になりたいの？」

と聞かれても何と答えて良いのか分からなかった。それに、かなりがっかりした。

ある時、私が、

「魔法が使えたらなあ……」

と言っていると、お母さんが言った。

「科学は魔法なんだよ」

私はこの事を聞いて少し考えた。例えばスマートフォン、こんな手鏡みたいな物で遠くにいる人と話せたり顔を見れたりする、お風呂だってボタンをおしただけですぐにお湯が入ったり、じゃぐちをひねるだけで温かいお湯や冷たいお湯が出る、冷蔵庫だって傷みやすい食べ物を何日も保存できたりする。昔の人にとってこれはこれを見るとビックリすると思った。正に魔法である。

これらは科学の力でできている。なので、科学は魔法なんだ!! と私も思った。

今、私が一番好きな教科は理科。科学の世界に近い勉強だから、とてもおもしろい。

「大きくなったら何になりたいの？」

この問いに対する答えはまだ出ていないけれど、科学⇨魔法の世界に近づけるように一步一步、進んで行きたい。みんなを笑顔にできるような人をめざして。

## 優秀賞

# 子ども思いの小児科看護師へ

岐阜県恵那市立大井第二小学校六年 林しずく<sup>はら</sup>

私のしょう来の夢は、子どもみんなが、元気で健康にすごせるサポートをする看護師になりたいです。看護師でも注射、点滴、採血などの補助や、患者さんの心のケアを行なう小児科の仕事につきたいです。私が小児科の看護師になりたいと思ったまでの話を紹介します。

最初の私の夢は、小さい子が好きだったので、保育士になりたいと思っていました。ある日病院にいった時、小さい子どもが注射をいやがっていて、看護師さんが工夫をして注射を終わらせて、しかも笑顔にさせていてすごいなと思いました。それからの私は、保育士になって子どもたちの面倒をみるよりも、それ以上に子どもたちのケアをしたり、子どもたちを笑顔にできるベテランの小児科看護師になりたいという気持ちが生まれました。夢をかなえるため、調べると小児科看護師は大体午前八時三十分から午後五時まで働きます。そんなに長い時間働くのは大変だなと思ったけれど、子どもたちが病院をたよってきているのを思うとがんばらないといけないなとも思いました。また看護師にとって、体力、強いメンタルはとても重要です。体力は、業務中に病院内を移動することが多いので、体力に自信があるエネルギーシユな人が重宝されるのです。強いメンタルは、患者さんに何かいわれたり、

先輩におかれてもへこまない心です。

夢の実現のためにこれからは、看護大学に通い小児科の看護師の基本的なことなどをたくさん学びたいと思います。たくさん知識を得ていれば、いろいろな子どもの手助けができと思うからです。でも私は、看護師にとって一番大事なのは、子どもを思う気持ちなんじゃないかなと思います。そのために今できることは、何事にもあきらめない、いろいろなことにチャレンジし、小児科看護師に向かって前向きにがんばることです。前向きにがんばれば小児科看護師になれると信じています。

#### 優秀賞

## 大切な目標

岐阜県高山市立東小学校五年 矢篴原<sup>やのばら</sup>綺乃<sup>きの</sup>

「ほんの一瞬でも、沢山の人達を感動させたい」これが、私の夢です。私は、スキー競技の中の「フリースタイル選手」になり、沢山の人が、一時でも楽しみ、喜びの感動が出来る様に、沢山の技を成功したいです。

人には、色々な感情があります。人の心を動かしたいと思う前に大切な事は、自分で自分の気持ち、良く理解する事です。その事を知っていると、自分の夢を実現する事が出来ます。夢に向かって決めた、一つ一つの目標を頑張っていると、それに気が付いた周りの人が応援してくれます。その力で、さらに頑張る事が出来ます。自分一人の夢に、応援エネルギーがびつたりと引つ付

くと『ありがとう』と思う感謝の気持ちが出てきて、それが、夢をかなえる道につながります。自分の心が、動いた時、次に体が動き、そして努力して、夢がかなうと思います。だから私は、大好きなスキー競技の中でも、最も技を見せられたり、色々な練習が出来る「フリースタイル」の選手になります。フリースタイルは、雪で作られた急な壁を使って技を競います。初めてテレビで見た時、「私もやりたい!!」と強く心が動きました。それが感動だと思います。その感動を今度は私が、多くの人達に伝えられる様にするための練習として、今年の夏から体操教室に通う事に決めました。まだ何も出来ないけれど、沢山練習と努力を重ねて、冬に向けて、自分の決めた目標に向かい、進んで行く事が、とても楽しみです。

地球で生活しているすべての生き物、一つ一つが、自分の夢に向かって、強く立ち向かい、小さな希望、夢をうみ出す。自分しかつくる事のできない世界を、多くの人が見て感動してもらえる様に、まずは、小さな目標を持って、そしてそれを、大きな夢につながる様に、今しか出来ない事を、精一杯努力して、つき進んでいき必ず夢をかなえます。

#### 佳作

## 泣き声

岐阜県恵那市立岩田小学校六年 秋山<sup>あきやま</sup>紗祈<sup>さき</sup>

「泣き声」は、時に、人をよろこばせることがあります。それは、

赤ちゃんが産まれるときにひびく泣き声です。その泣き声を守る人、助産師さんに私はなりたいたい。理由は、二つあります。

一つ目は、去年の先生です。去年の先生は、七月の終わりごろにんしんをして、と中でお別れをすることになりました。理科の授業で、自分の夢を先生に伝えました。お別れの日に手紙をもらいました。その手紙の内容は、「強さとあたたかさをもつ紗祈ちゃんにぴったりの職業だと思います」

という内容でした。他にも、先生が体験したことがかいてありました。そんな、やさしい先生のえいきょうで助産師さんにどうしてもなりたいたいと思いました。

二つ目は、友達です。その友達は、一時期つらい思いをしていたことがあります。それは、悪口やかげ口などを言われたという内容でした。そんな友達を救いたい、助けたいと思いました。言葉は、武器にもなる、こわいものだけどそんなことばを使って人をすくいたいと思いました。そこで私は、先生からもらった手紙を見ました。手紙には、助産師さんがあたたかいことばをかけてくれて安心した、とかいてありました。友達のおかげで、言葉の大切さに気づくことができました。

二人の人が気づかせてくれたことなどから自分が、助産師さんになるためにきづかいができるようになるのが今の自分の目標です。今の目標を一つずつ達成して助産師さんになって赤ちゃんを産むお手伝いをしたいです。

## 佳作

# 海洋学への夢

岐阜県恵那市立大井第二小学校六年 可知舜大

ぼくの将来の夢は、海洋学を学ぶことです。きっかけは、ぼくは海の生き物が好きです。そんな海の生き物は、ぼくたち人間の出すごみによって被害にあっていると知ったときです。特に、ふだんさりげなく使っているプラスチックごみが大きな被害を出していて、ビニール袋なんかは、海ガメが獲物のクラゲとまちがえて食べてしまう被害がでていることにおどろきました。ビニール袋は海で自然にとけるまでなんと、半年から数千年かかることもあるそうです。

そこで、ぼくは買い物をする時はマイバッグをほとんど持参するようにしました。忘れた時は、お店からダンボールをもらって、そのダンボールは資源回収に出すようになりました。こうすることで、ビニール袋削減だけでなく、環境にさらに良いことになっています。

海の生き物への影響と言ったら、地球温暖化も忘れてはいけません。冷たい海に関係ないと思ったら、大間違いです。地球が温まるということは、もちろん海も温まります。海が温まると、水温が高くなり、褐虫藻かつちゅうそうというサンゴとの運命共同体のようなもので、その褐虫藻がサンゴの体内から喪失します。そうなるとサンゴ自体の骨格が透けて白く見えるサンゴの白化現象が起こりま



す。さらにこの状態が続くとサンゴは褐虫藻から栄養を受け取ることができずやがて死滅してしまいます。このままサンゴが減り続けてしまうと、生物にとっては海の生き物の四分の一はサンゴを棲み家<sup>すか</sup>にしています。なので、海洋生物は大打撃をうけてしまうということなのです。さらに、観光業界にも大きなダメージになってしまふのです。

このようなことを防ぐために少しでも貢献しようと自分で工夫していることが、必要な時だけ冷房をつけるということです。そのためにもぼくがやっていることは、冷房をつける前にまず窓を開けてみて十分涼しかったら冷房をつけないということをやっています。

もし本当に海洋学を学べたら、そこからさらに得た知識で海の豊かさの大切さを多くの人に知ってもらおうとよびかけ運動を行いたいのです。

## 佳作

# わたしのゆめは「しょうぼうし」

岐阜県恵那市立長島小学校一年 可知実穂子<sup>かちみほこ</sup>

わたしのゆめは、二さいのときにはじめてしょうぼうしよにけんがくにいったときから「しょうぼうし」です。すごくかっこよくて、だいきなししょうぼうしやきゆうきゆうしやとしごができるからです。

わたしは、こどもえんのころ、まいにちてんけんをみにいきま

した。しょうぼうしやは、しゅつどうしないひもあるけれど、しょうぼうしさんたちはまいにちおなじてんけんをします。どうしてかきいたら、「いつしゅつどうになってもいいようにじゅんびしておくんだよ」とおしえてくれました。くんれんもたくさんします。なんどもなんどもくんれんをして、チームワークがもつとよくなるようにしているそうです。しゅつどうするところもなんどもみたことがあります。いつもはにこにこやさしいしょうぼうしさんだけど、ピシッとしんけんなかおになつて、ぜんりよくでいそいでじゅんびをします。みんなのためにがんばるしょうぼうしさんはすごいです。わたしもこんなふうになりたいとおもいました。

わたしはいま、ゆめをかなえるために四つがんばりたいことがあります。一つめは、ごはんをしっかりとべて、いっぱいからだをうごかしてつよいからだをつくることです。二つめは、にがてなことやはじめのこと、むずかしいことにもちようせんしてゆうきをもつことです。三つめは、いつなにをやるかかんがえるからをつけるためにすすんでべんきようすることです。そして四つめは、ともだちのきもちをかんがえて、なかまとちからをあわせることです。

わたしがおとなになるまでには、まだじかんがたくさんあります。だから、そのじかんをむだにしないように、がんばるといいとおもふことをがんばって、いつでもみんなをまもったり、たすけたりできるしょうぼうしになりたいです。

## 猟師になりたい

岐阜県恵那市立岩邑小学校五年

瀬戸<sup>せと</sup>輝馬<sup>てるま</sup>

みなさんは、猟師を知っていますか。猟師は、わなやじゅうなどをを使って動物をかる人のことです。

多くのしょう来の夢はその猟師になることです。その理由は、いろいろな動物の肉をさばいて、内ぞうを観察して、肉を売ってお金をかせいだり、動物の毛皮コレクションを作ってジビエ料理を作って食べてみたいと思ったからです。

ぼくが、猟師になるには、まず動物の生態や特ちょうを勉強することが大事だと思います。なぜなら、動物の生態を知っておくことで動物がどんな所に生息しているのか、この動物は何と言う種類かなどがすぐに分かると思ったからです。

そしてぼくは、射的の練習も必要だと思いました。なぜなら、射的の練習をしないと、動き回る動物をうまく撃てないかもしれないからです。僕は、動物をうつのは、かわいそうだけれど、人間は生きるためにも動物の肉が必要だと思いました。

ちなみに、猟師と関係あるかわかりませんが、食事の時に、「いただきます」と言うと思いますが、その「いただきます」には、どんな思いがこめられていると思いますか。「いただきます」には、作ってくれた人への感しゃや「命をいただきます」という思いがこめられています。なのでこれからも、感しゃの気持ちをこめて

食事をしたいです。

僕たち人間は生きるために命をいただいているということを忘れてはいけません。僕たちは、その命をいただいているからこそ今生きているのです。動物だけでなく、野菜や魚もそうです。僕たちは感しゃしながら生きていかなければいけません。

これからも猟師になるためにいろんなことをがんばっていきま

佳作

## 今わたしができること

岐阜県恵那市立長島小学校四年

渡邊<sup>わたなべ</sup>琴心<sup>ことみ</sup>

去年、父の会社のまわりを歩きながら、ゴミ拾いをするイベントがありました。最初はそんなにゴミも落ちていないようにみえたけれど、よく気をつけて歩いてみると空きカンやビニールのゴミがありました。一時間ほど歩くころには、ゴミぶくろはゴミでいっぱいになっていて、とてもびっくりにした事を覚えています。

四年生になって、社会科のじゅ業で、ゴミのしよりと利用について勉強しました。じゅ業の中で、最終処分場、リサイクルできる物を分別回収し、リユースショップもあるエコプラザ、ゴミはどのように運ばれるのかなどを学びました。その中でも、いんしようにのこったのは、最終処分場のことです。処分場は埋め立てたゴミでいっぱいになったら、また新しくつくって、そこにゴミを埋めるようになります。新しい処分場をつくらなければいけなく

なると、お金もかかるし、近くに住んでいる人がこまってしまうし、いずれ町が処分場だらけになってしまわないかと想ぞうしました。そして、処分場をつくらなくてもよくするには、どうしたらいいか考えました。

わたしは、そもそもゴミをふやさないようにすれば埋め立てるゴミもへるのではないかと思いました。だからわたしは、ムダなゴミをふやさないように、本当に必要か考えて、物を買ったり、ゴミを捨てる時に、パッケージについているリサイクルマークを意しきしたりしたいです。

きれいな町で、みんなが気持ちよくくらしつづけられるように自分ができていることを考えながら、コツコツとつづけていきたいです。

#### 嚶鳴協議会賞

## パティシエ

岐阜県恵那市立長島小学校三年 今井陽菜乃

わたしは、大人になったら、パティシエになりたいなと年中ぐらいからゆめでした。

きっかけは、はじめておかあさんとクッキーを作ったときに、弟たちが「おいしいまた作って」といつてくれたのがうれしかったので、大人になったら、パティシエになって、たくさんの人に「おいしい」といつてもらえるようなケーキやおかしを作りたいと思ったからです。

まい年家族にバレンタインにおかしを作っています。

おかし作りで気をつけることは、ぶんりょうをかならずはかること、じゅんじょをしつかりまもること、せつめい書のとおりに作ることだと思います。

たとえば、ケーキを作るときにつのがたつまでまぜると書いてあるのに、てきとうにまぜてしまったり、ふわつとあわをつぶさずにまぜると書いてあるのに、たくさんまぜたりすると、ケーキをやいたときに、しつかりふくらみません。チョコレートをゆせんでとかすとき、水が入ってしまうと、ぶんりして、ぼろぼろのチョコレートになってしまいました。

こんなふうには、ケーキを一つ作るのもたくさんの時間をかけて、気をつけながら作ります。

わたしのおばあちゃんの家近くにあるケーキやさんが、わたしは大すきで、まい年たん生日になると、そのケーキやさんでケーキをたのみます。そのケーキやさんは、たのんだクリームの色やかざりつけや味にかえてくれます。ならんである小さいケーキは、一つ一つこだわりがあり、とてもまがかかっているのが見てわかります。どのケーキを食べてもおいしいです。

わたしもしょうらいパティシエになって、ケーキやさんをひらいたら、まい年たん生日というときくべつな日にケーキをたのんでくれる人がいるとうれしいです。

第  
20  
回  
下  
田  
歌  
子  
賞  
受  
賞  
作  
品

# 中高生の部

「夢」の歌

最優秀賞

遠くても夢は逃げない 走り出せ  
追うのは自分 越えらるも自分 愛花詠

遠くても 夢は逃げない 走り出せ  
追うのは自分 越えらるも自分

埼玉県・栄東中学校三年

北澤 愛花

優秀賞

夢を見る その身笑われ 貶されとも  
見る者のみに 見える景色が 柊太詠

夢を見る その身笑われ 貶されとも  
見る者のみに 見える景色が

兵庫県立長田高等学校二年

佐藤 柊太



入 選

人生を描くキャンバス まだ白く  
染めゆく色に 思いを馳せらるる 百音詠



人生を 描くキャンバス まだ白く  
染めゆく色に 思いを馳せる

岐阜県恵那市立明智中学校二年

伊藤 百音

入 選

十七年 お世話になった 故郷に  
恩返しすると 決めた夏の夜 星七詠



十七年 お世話になった 故郷に  
恩返しすると 決めた夏の夜

岐阜県立恵那南高等学校二年

栗下 星七

入 選

書き出しの 一行埋めた 原稿は  
今や止まらぬ 夢のめざめに 侑子詠



書き出しの 一行埋めた 原稿は  
今や止まらぬ 夢のめざめに

神奈川県立小田原高等学校三年

吉居 侑子

# 誰かの「生きる」を支える

東京都・実践女子学園中学校三年 西山<sup>にしやま</sup> 緋那<sup>ひな</sup>

私には幼稚園のころからの夢があります。それは看護師になって病気や怪我を治す手伝いをするだけではなく、生きる事を支えられるような人になることです。小学生の私までは何故自分は看護師になりたいのかざっくりとした理由しかなかったけれど、理由がはっきりした出来事と一つの言葉がありました。

私の夢がはっきりした出来事とは新型コロナウイルス感染症でした。小学校の卒業式直前で感染者が急増し休校になったときに不安の気持ちでいっぱいでした。でも、そんなときテレビや新聞で医療従事者の方々が自分の身を危険にさらしてまでも患者さんの命を守るために一生懸命頑張ってくれているのを見て、医療従事者の方から勇気を貰<sup>もら</sup>ったと共に、私も誰かのために一生懸命になれるような人になりたいと同時に思いました。同じ時期に私にとって、心に響いた言葉にも出会いました。

「看護師は人を見る。ただ病気を治すだけではなくて、生きるということを支える」

この言葉はあるドラマの一つのセリフです。この言葉と出会ってから、看護師に対する考えが変わりました。今までは患者さんのことをサポートをしたりする仕事だと思っていたけれどサポートをするだけではなくて心までを、よく観察し体を元気にまた心

も一緒に元気にできてしまう、すごい職業だと改めて実感することができました。今ではこの言葉と出会うことができてよかったと思う大切な一つの言葉にもなりました。

生きることを支え、誰かのために一生懸命になれるような人に将来なるために必要、そして今からできることが沢山あると、この「夢」の作文を書きながら気づきました。自分で考え積極的に行動すること、家族や先生、友達に頼れるときは頼ること、周りをよく見ることに。主にこの三つが私に今からできることだと思います。今の私にはこの三つが十分にできていると正直思えませんでした。医療の現場では、いつ何が起るのか分からないからこそ、自分で考え周りをしっかりと見て行動しなければ患者さんを守ることはできません。そして自分で考え周りをしっかりと見ることは学校生活においても共通して言えることだと私は思います。しかし、ときには自分だけで考えてもうまくいかないことが、これから出て来たときには、一人で抱え込むのではなくて、周りにいてくれる信頼できる人に相談したり助けてもらうことも必要なことだと気づくことができました。

この先、夢に向かって歩いていく中、沢山の場面で壁にぶつかってしまふときがあるかもしれません。周りの人に助けを求めるときが沢山くるかもしれません。そんなときには手を差し伸べてくれた人に感謝の気持ちを忘れずに夢に向かって突き進んでいきたいです。一人の人としていつか誰かの「生きる」を支えられる日が来ることを楽しみに生きていきたいです。

## 紙とペンと消しゴム

岐阜県恵那市立恵那東中学校二年 岡田 信太郎

僕の夢は作家になることだ。

作家の夢をもったのは小学校六年生の時。その時は特別好きなことはなかったけれど、ただ、今よりは活発だった。活発だったけれども、それは本当の自分のような気がしなかった。本当の自分を覗くのが恥ずかしくて、本当はやりたくないことに逃げていたような気がする。それは虚しい気持ちを僕の心に残していたけれど、この虚しい思いがなかったら、作家になろうという夢ももたなかったかもしれない。

中学生になって、だんだんと大人になってくる中で、作家としてのテーマができあがってきた。それは自分が書く物語は「夢と美しさ」をテーマにするということだ。そこに自分の物語の特徴を出したいと考えている。その特徴を磨くために、毎日本を読み、また多くの人と様々な情報交換することに努力している。そういうことが多ければ多いほど、いい文が書けると思っている。

書きたいものは、自分の世界を創り出すことができる小説だ。夢を想像するとがぜん創作意欲がわいてくる。

夏休みに、長野県松本美術館の「草間彌生」さんの美術展に行ってきた。草間さんの作品は本当に独創性があって、自分の世界を絵で表現している。よく水玉模様の絵といわれるけれど、それだ

けではない。明暗を生かして立体感や鏡で作り出す幾重もの空間など、自分を表現している。その作品を鑑賞しながら、胸の奥底にある重い自分や色を繊細かつ大胆に引き出し、躍動感ある作品を生み出すことができれば、多くの人々に認められるのだと思うようになった。

表現の仕方が違うだけで、芸術として自分の色をおとしていくことは、どの創作でも同じだと考えている。自分の世界を創っていく、小説も同じだ。最高に自由な仕事だと確信している。その作家という仕事に憧れて、将来の夢としている。

文章を創作して生活していくことが難しいことはわかっていく。独創性、読みやすさ、どちらも欠けてはいけない。本当に難しいのは生活ができるかどうかよりも多くの人に読んでもらえるかどうかだ。

そのために僕は毎日学んでいる。自分の作品を書き、見直している。自分だけの独りよがりにならないように、客観的な意見、他人の意見を受け入れなければならぬと思っている。作品をみてもらうことは一番怖いことだし恥ずかしい気持ちにもなる。そういうことに苦しむけれども、それを越えてもっとおもしろくしていく。そう決めて毎日机に向かっていくのだ。

夢はかなわないかもしれない。その怖ろしさで一步踏み出すことに躊躇することもある。けれどそんな思いすら作品にしていくな。それしきのことで立ち止まるわけにはいかない、という気持ちになる。

あらゆる本を読み、多くの経験をし、人の考えを聞き取り、そして意見を言い、それらを通して生み出される自分の考えや思い

を作品に込めていく。そのために今日もまた紙とペンと消しゴムをもっている。

## 優秀賞

# 夢のきっかけ

東京都・実践女子学園中学校一年 小池 日万莉こいけ ひまり

私は、戦争のつらさや苦しさをより多くの人に知ってもらいたいです。

私が初めて、この思いを持つようになったきっかけは、一本の映画でした。それは昔から最近までの映画を放送する番組で、「この映画は見ていた方がいいよ」と親に言われて見ていました。その内容は、兵庫県を舞台にした物語で、空襲で親を亡くした浮浪児兄妹の栄養失調と餓死がしまでをえがいた映画でした。私はこの映画を見て泣いてしまいました。はじめは「かわいそう」という同情心でしたが何回も見るうちに必死になって妹を守る姿に感動しました。

そしてこの映画を見てから戦争について考え、調べるようになりました。昔、日本でも戦争をしていたこと。それでたくさん人が亡くなってしまったこと。今、他にも戦争をしている国があるということ。日本はもう戦争をしないといわれている国ですが、そうではない国はいつ戦争するかわからない状況でとても不安だと、ニュースで聞きました。

しかし、その中で戦争がどれだけつらいものなのかを後世に伝

えようとしている人たちがいることを知りました。夏休みの講座で、沖縄の歴史について調べました。そこで、先生が見せてくれた動画の中に、沖縄戦争のつらさや苦しさを泣きながらテレビの人たちに話していました。思いだけでもつらいのに、私たちにわかってほしいために話してくれている人だ。と思いますぐいいと感動しました。このことを知って、私も戦争がどれだけ苦しいのか、今戦争がないことでどれだけ幸せなのか。これから生まれてくる人たちに伝えていきたいと感じました。

そのために、戦争についてたくさん勉強しなくてはいけないなと思いました。戦争についての本を読んだり、それに関連したイベントにもたくさん行ったりして、今知っている以上にわかることをふやしていきたいです。また、戦争を体験した人からお話をきいたりしないといけないのですが、だんだんとそのような人たちが少なくなってきたいて、あまり話を聞くのも難しいかもしれないけれど、それ以外でも自分が今、できることを一生懸命やっていたいと思いました。

最近、戦争のことについてニュースにとりあげられることが多くなりました。日本の戦争時の様子、そのときの服装や、傷をおった子供や妊婦さんなどが写されていてとても悲しい気持ちになります。このような人たちを見たくはないと思います。このような人を少しでも減らすために、努力している人や守ってあげている人たちがいることを知れて本当によかったです。私もそのような人になるために募金活動をしたり、つかわないようなものを寄付してあげたりして、だれかのやくにたてるように、たくさんの人に戦争というものを知ってもらうために、すべての国が戦争をし



ない平和な国々になるように努力したいと思っています。

## 優秀賞

# 生きる

東京都・駒澤大学高等学校三年 細貝 早希ほそがい さき

私は、この世界に生まれてきた一人の人間です。私は、こう思います。生きていることが「夢」を実現していると。「夢」は時に人を苦しめ、時に人生という限られた時間を鼓舞させてくれます。私には将来になりたい姿があります。環境と共存していけるようなプロダクトデザイナーになることです。しかしこれは「夢」ではなく、人生の目標と捉えることにします。本当の「夢」は、この世に生まれてきた命を「生きる」ことです。

私は不安神経症と闘っています。急に襲われる不安と同時にパニックに陥ることがあります。気持ちとは正反対に体に反応が起ることもあります。一日を生きていることが辛く、当たり前ではなくなりました。この大きな壁にぶつかったのは、高校生の私が「夢」を背負っていたからかもしれません。中学校から始めた吹奏楽の世界で自分が輝くこと。全日本吹奏楽コンクールで金賞を取ることに。それが私の「夢」でした。しかし、新型コロナウイルス感染拡大の影響で、部活動が満足にできませんでした。そんな中、高校二年の夏でやっと「夢」を実現できるチャンスが訪れました。部内オーディションで選抜され、東京都吹奏楽コンクール予選を通過し、本選に向けて一丸となって練習していました。しかし、

選抜されなかった仲間や、新型コロナウイルスの後遺症で出場を断念した仲間もいました。そんな仲間の分まで頑張らないといけないと思っていた。私は、勝手に大きな責任を背負いすぎたのかもしれない。あるいは、自分が思い描いていた姿に対して、そこにいた自分が惨めだったのかもしれない。私は「夢」を背負う存在として捉えて、重荷になっていたのだと思います。「夢」がいつしか自身を苦しめるものになっていました。

そんな私は、今ある命を「生きる」という「夢」をもつことにしました。生き続けることそのものが、立派な「夢」だと思っています。人間は生きている限り、それぞれ形が違っていても何かと闘っています。その中で生きている、そのこと自体が立派だと思っています。「夢」は将来思い描く姿ではなく、この日々全てにおける存在であるべきだと思うのです。私は、プロダクトデザイナーという目標に向かって、大学という次のステージに進もうとしています。これは、命を「生きる」ための一つの目標です。毎日を生きていることは当たり前思えて、努力の積み重ねです。授かった命を生かすことだけでも、充分頑張っていると思います。世間から見たら、私は弱い人間に見えるかもしれませんが。しかし、周りの先生、友達、そして家族は、こんな私を認めて助けてくれます。「生きる」ことは、この温かい人達に感謝を伝える一番の方法だと思っています。これからは「生きる」という「夢」の中で、目標をもち、日々を積み重ねて生きたいです。

私は、一日一日を生きていきます。



## 人との関わり

東京都・実践女子学園中学校二年 久世<sup>くせ</sup>結菜<sup>ゆいな</sup>

「今年は富士神社のお祭りやるみたいだよ」。小学校の友人からの連絡に胸がおどった。私はイベントごとが好きだ。私の町内会では、春には豆まき、夏はお祭りとおみこし、秋はハロウィン、冬は餅つきと季節ごとにイベントがあり、友だちと参加するのが楽しみだった。小学校の登下校では、学校のそばの交差点に地域の見守り隊の方々が立っていて、毎朝誘導してくれた。朝や放課後の校庭開放はボランティアの方々が運営のお手伝いをしてくれていた。このように、私の町内会では、子育て世帯が多いこともあり、地域で子どもたちを見守り、日本の文化を体験させてくれる場所があった。

コロナ禍では、イベントのほとんどが中止となってしまった。子どもたちはもちろん残念がっていたが、イベントを企画、運営している町内会の大人たちも、開催できないことをとても残念がっていたのが印象的だった。町内会のイベントは、普段なかなか接点のない様々な年代の人たちが、一緒に楽しみを共有できる大切な時間だと実感した。そして、お祭りやおみこしなど、家庭では経験できない日本文化を教えてくれる教育の場でもあると思った。

町内会自体、日本独自の文化で、その歴史は江戸時代にさかの

ばることを今回初めて知った。昔から災害時の対応などで重要な役割を担ってきたが、近年では町内会に参加する若者は著しく低下している。特に都心部では核家族化が進み、共働き世帯も増えたこと、また少子化が進んでいることで、地域との関係が希薄になっていと言われている。地域との関係が希薄になると、例えば災害が起こった時に、安否確認などで問題が生じる。近年のコロナ禍でも、陽性のために買い物に行けないなどの場合、近所に頼れる人がいるのといないのでは、大きな差が生じる。防犯の面でも、普段から近所にどのような人が住んでいるか把握すること、不審者の判別など役に立つ。日本人の生活スタイルの変化により、町内会のあり方も大きく変わってきている。その中でも、地域のつながりは、よりよい社会にするために大きな役割を担っているのだ、絶やしてはいけない文化だと思う。

私の夢は、保育士になることだ。保育士になって子どもたちに、世の中にあふれる楽しいことをたくさん教えてあげたい。日本独自の文化も世界中のことも、様々なことに興味を持ち、挑戦する子どもになってほしい。そして、誰もが安心して子どもを産み、育てられる社会になるよう、私は保育士として活躍し、貢献したい。

そのためには、保育園だけでなく、地域や社会全体で子どもたちを見守り、育てる世の中になってほしい。そのような社会が実現するよう、私はこれからも地域のイベントに積極的に参加し、地域とのつながりを大切にしたい。そして、地域と子どもたちのつながりが途切れないようにするにはどうしたらよいか、引き続き考えていきたい。

## 私の夢は

徳島県阿南市立阿南第一中学校三年 高橋 聖花たかはし せいか

私が学芸員という夢を抱いたのは、小学三年生のときでした。それより前から、歴史小説に没頭していて実際に歴史を学ぶために、両親にわがままを言って城郭に連れて行ってもらったり、毎週図書館に通わせてもらったりしました。私の心には、じわじわと植物が根を張るように、歴史に関わる仕事をしてみたいという思いが育っていったのです。

それがついに、花開いたのが小学三年生の頃でした。『13歳のハローワーク』という本から、学芸員という職業を見つけました。私は、何かを確信しました。それから、学芸員という仕事について調べ上げました。元々、調査するのが好きなので一週間くらいで終わりました。学芸員とは、資料の収集や保存、調査、研究、展示、公開などを行う仕事です。その他にも、パンフレットの作成や企画展を計画することもあります。働き口は、とても少なく資格を持っても学芸員になれるのはほんの一握りだけです。とても、厳しい仕事だとわかると私は怖気おそづきました。私は、面倒なことが嫌いで、できるならずっと好きなことだけをしていきたいのです。

私は、悩みました。悩み続けて、現実逃避をしました。「せっかくなら、何もかも忘れられるような楽しいところへ行こう」そ

う思って、出かけました。たどり着いた先は、歴史博物館でした。やっぱり、私は歴史からも学芸員の夢からも離れられないことを悟りました。

博物館の中を進んでいくと、古文書を見つけました。古文書には、当時の様子を表す地図がありました。そこで、私は思いました。私たちの身の回りに存在するものすべてに、歴史があるのではないかと。例えば、地図の歴史は古代までさかのぼり、バビロニアでは粘土板。エジプトではパピルス。中国では絹に書かれたことが地図の始まりといわれています。他にも、テーブル、椅子、ガラス、バッグなど身の回りにある様々なものはすべて歴史があつて作られています。

その歴史には、必ず人がいました。歴史は、勝手に解明されるわけではありません。血のにじむ思いで、目の前の歴史に取り組んだ結果、私たちは本や教科書、インターネットなどで知ることができるのです。そうした歴史を、次の世代へとつないでいくのが学芸員の仕事なのだと気づきました。「私は、今とても偉大な仕事に就くことを夢に見ている。学芸の知識を使って仕事をするのだから、厳しい仕事なのは当たり前だ。それでも、選ばれるようにできる限り努力をしよう」。そう心に誓いました。帰る時には、来た時のような憂鬱ゆううつな感じはなく晴々とした気持ちで歴史博物館を出ました。

## 思いをつなぐ

岐阜県恵那市立岩田中学校三年 原心穩はらみずね飢餓きの人々を救い全員が幸せになる

これが私の大きな夢だ。この夢を叶えるためには膨大な時間が必要であり、私の残りの人生だけでは難しいかもしれない。だから私はこの思いをつないでいくことにした。

世界の飢餓人口は年々増加し二〇二一年には八億二千八百万人にのぼった。私が飢餓に苦しむ人々を知ったのはテレビのCMだった。このCMはユニセフによるもので、痩せ細ったアフリカの子供達の様子が流れていた。今にも折れてしまいそうな腕・皮膚から浮き出ている肋骨などいかにも栄養不良であるその子の目はどこか悲しそうだった。私はこのCMを見てとても悲しい気持ちになった。罪のない人々が十分にご飯を食べられず栄養失調や病気になるって苦しむなんて許せない。それに比べて私たち日本人はどうだろう？ 毎日三食栄養いっぱいのおいしいご飯を食べることができ環境にいる。それなのに好き嫌いをして食べ物を残す人がいる。これもまた許せない。

今の日本では、『食品ロス』の多さが問題となっている。皆さんは年間どれだけの食品ロスが出ているか分かりますか？ 農林水産省が発表している日本の一年間の食品ロス量は五百七十万ト

ンだ。この量は三トンの象・百九十頭分である。また、一人当たりの食品ロス量は一日で約百二十四グラム。およそ茶碗ちやわん一杯のご飯に近い量を毎日捨てていることになる。本来食べられるはずの大切な食料がこんなにも無駄にされているなんて信じられない。だから私は、小学五年生の頃から給食を絶対に残さないと決めた。そして、中学二年生から自分が食べられる量は積極的におかわりをしていく。また、給食の残量をゼロにするためにクラスの仲間達に食品ロス削減の大切さや飢餓で困っている子供達のことを伝えたりおかわりを推進したりすることもできた。その呼びかけに応えておかわりをしたり、残量を配りきったりしてくれる仲間達と一丸となって頑張っている。すぐ世界を動かすことは難しいけれど少しでも多くの人が意識していくことでこの問題は良い方向へと進んでいく。だから私はこれからも食品ロスについて呼びかけていきたい。

私は、飢餓を救うという夢のために何ができるかを考えた。ひとつは支援を行う組織に寄付をすることだ。また、日本でできるボランティアに参加することも夢のための一歩であると思う。そして私にはもう一つの夢がある。小学校の教師になることだ。未来の子供達に、教育という形で携わり、食品ロスや飢餓について理解してもらいたい。また、食べ物へのありがたみを伝えていきたい。こうすることで未来を担う子供達に私の思いをつなげていき、いつかこの夢を実現していつてほしい。そう願いながら私は今日も大好きなご飯を食べるのだ。

# 自分らしさ

東京都・実践女子学園中学校二年 東口杏梨<sup>ひがしぐちあんり</sup>

私の夢は本に関わる仕事をすることです。まだ具体的には決まっていないのですが、自分の趣味を仕事にしたいと思っています。私が主にやりたいのは、作家と読者をつなぐ、編集者のような立場の人です。編集者といっても、いろんな仕事がありますが、作家の思いを直接届けられる、そんな人になりたいです。

私が、本に関わりたと思ったのには、二つの理由があります。一つ目は、本が好きだからです。読書が好きで学生は、年々減っていると聞きますが、電車などでも、読書をしている同世代の子はよくいます。「本」のどこが好きかというと、数え切れないほどありますが、一番の魅力は「自由さ」だと思います。手帳にどこにでも持っていて、自分の世界に入れる、私にとって、人生最大の癒<sup>いや</sup>しです。「本好き」になったきっかけは、友達に本を貸してもらったことという、簡単な理由ですが、気がついたときには、一生離れられない、大切なものになっていました。

そして、二つ目の理由は、本の魅力を伝えたいからです。デジタルでも読めるようになった今だからこそ紙の本を読んでもほしいな、と思います。未来の小・中・高生に、少しでも落ち着く存在でありたいです。私は、物語をかくようなセンスはないけれど、そんな作家の方々を、裏で支えるような人になりたいです。今の

世の中にちょっとした貢献できたら、幸せなんだろうな、と思います。コロナ禍の今、いろんなことができなくて、辛い思いをしている人はたくさんいると思います。私もその内の一人です。でも、それでも、それ以上に私の前で輝いていたのは本でした。たくさんの刺激をもらって、影響を受けた私だからこそ、言えることがあると思います。本への愛は、だれにも負けない自信があります。その思いを、大人になった私が届けられたら、私は満足できると思います。ただ生きているだけじゃなくて、せっかくなら、だれかの力になりたい。それが、私の、今の夢です。

最後に、もう一つの、私の夢をかきたいと思っています。それは、「幸せだった」と言える人生にすることです。今まででも、辛いことはたくさんあったし、自分の思い通りにならないことだって、もちろんたくさんありました。でも、だからって、幸せじゃなかったわけじゃないんです。でも、後悔はあるから、これからの人生、楽しんで行けたらいいなって思います。何を言われても、自分の好きなことをして過ごしたいです。そのために、強くならなきゃ、変わらなきゃ、いつも思っています。でも、無理に焦<sup>あせ</sup>らなくていい、自分のペースで、自分らしく。私は楽しく、生きたいです。



# 夢がくれたもの

茨城県阿見町立朝日中学校二年 平野千怜<sup>ひらのちざと</sup>

あれは、忘れもしない小学五年生の夏。私は、衝撃と夢に出会った。

母との買い物帰り、「買いたい物があるから」と本屋に連れて行かれ、私は暇を持て余していた。文庫本や児童書のコーナーを一人で見て回り、ふと、雑誌のコーナーが目にとまった。いや、正しくは、雑誌のふろくに、だ。私は、母の影響で、一昔前の少年漫画をよく読んでいた。そのためか、漠然と漫画家になりたいと思っていて。そのため、その、「まんが家セット」というふろくに、目が止まったのだ。買いたい物がなかったと言う母に、その雑誌をねだり、買ってもらった。少女漫画を買うのは初めてだ。そのときの私は、何の根拠もなく、この雑誌は一度しか買わないのだろうと思っていた。

家に帰り、ふろくを開封し、すぐに絵を描き始めた。全ての道具を一通り使い終わった頃、買ったのに読まないのはもったいないと思い、その雑誌を読み始めた。ノベライズを読んだことのあつた作品はあったが、たいして面白くはないだろうとたかを括<sup>くく</sup>っていた。だが、読み始めると止まらなかった。私の想像する少女漫画より、ひと周りもふた周りも大人っぽく、すぐにその世界に魅了された。そして、こんな漫画を描きたい、この雑誌で漫画家に

なりたいたと、強く思ったのである。

まんが家セットがふろくだっただけあって、そのとき雑誌では多くのまんが賞が開催されていた。私は、毎月募集されている上に批評が細かく、投稿しやすいという賞を選び、道具を揃<sup>そろ</sup>え、毎日毎日自分の描いている漫画のことを考えながら過ごした。そして、投稿し、結果を待った。周りには絵が上手いと言われていたため、自信があり、いきなり上のクラスに入ってしまうかもしれない……などと期待に胸を膨らませながら待った。結果は、一番下のクラスだった。

結果を見た私は、初めは何かの間違いではないかと思った。そのときの私は、なぜか、雑誌に載っていてもおかしくないほどの画力を自分が持っていると思っていたからだ。だが、批評が送られてきて、現実を突きつけられて、これ以上ないほどショックを受けた。しかし、こんなことで折れる私ではないと、悔しさをバネにその後も投稿を続けた。

約二年後、六作目にして、やっと一番下のクラスを抜け出すことができた。そのときの喜びは、今でも忘れられない。そして、私は気づいた。好きで始めた、漫画を描くということが、私に何度も投稿する粘り強さや、作品を描くための集中力をもたらしていることに。好きで始めたことが、私に生きる上で大切になるであらうことを教えてくれるなんて、こんな幸せなことはない。これからも、好きなことをしながら、人生の教訓を学んでいきたいと思う。

そして、私はまた、初めてあの雑誌を読んだときの感動を糧に、漫画を描き始める。



第  
20  
回  
下  
田  
歌  
子  
賞  
受  
賞  
作  
品

# 一般の部

「夢」の歌

最優秀賞

学びたい心の叫び 叶わずに  
生きた来し方 今こそ夢を  
久子詠

学びたい 心の叫び 叶わずに  
生きた来し方 今こそ夢を

愛知県東海市  
加藤久子

優秀賞

夢語る 生徒のまなこに 教へられ  
吾もと先づは 窓開け放つ  
杏奈詠

夢語る 生徒のまなこに 教へられ  
吾もと先づは 窓開け放つ

静岡県掛川市  
加茂杏奈

入 選

ミサイルを撃つな撃たすな 青空は  
子供が夢を描く画用紙 晋一 詠

ミサイルを 撃つな撃たすな 青空は  
子供が夢を 描く画用紙

神奈川県横浜市 岡部 晋一

入 選

しゃぼん玉 追いかけてまた追いかけて  
子らの瞳に夢があふれる 由美子 詠

しゃぼん玉 追いかけてまた 追いかけて  
子らの瞳に 夢があふれる

佐賀県唐津市 古賀 由美子

入 選

幾年も 春めぐり来て 夢めぐり  
ももとせ 学ぶ 死して朽ちずと 第二 詠

幾年も 春めぐり来て 夢めぐり  
ももとせ学ぶ 死して朽ちずと

愛知県名古屋市中区 米倉 彰一

## 戦争をなくすこと

福岡県朝倉市 感王寺 美智子

私の夢は「戦争をなくすこと」です。

悲惨な歴史を、何度、繰り返しても未だ、実現せぬ夢。そんな果てない夢を、名も無き私が抱いてもと、笑われるかもしれない。しかし、戦争の犠牲になるのは、いつの時も、名も無き人々です。その数えきれない魂が、叫び続ける夢なのです。そしてそれは、私たち人間にしか、叶えることのできない夢なのです。

朝倉へ越して来たばかりのこと。住宅街の外れの公園に、千羽鶴があるのが見えました。何だろう？と入ってみると、幹が避けた木の横に「私達につづく戦争を知らない世代に」と書かれたボードがあり、そこには、昭和二十年三月二十七日、飛来したB29の爆弾が、ここに落とされ、三十一人の子供達が、亡くなったことが、記されていました。この地域に、太刀洗飛行場があったことは知っていました。しかし、幼い子供らが、誤爆により、命を落としたことは、知りませんでした。

呆然としてみると、花壇の手入れをしていた老人が、話かけて来ました。

「ここは、戦後しばらく、荒れたままだったんです。爆弾が落ち、子供らが亡くなったのが、集団下校中だったもんだけん、子が亡くなった家のもんも、助かった家のもんも、どこにいたとか、ど

うしてたかとか、話しづらかった。だけん、こん頓田の森の悲劇は、あまり知られるこつなかったんですわ」

老人は、木を見上げました。

「あの幹の裂け目は、爆弾の跡ばい。下には、伏せばしたまま即死した子たちが何人も。手足が吹っ飛んで、先生、先生と呼ぶ声……恐ろしか出来事ばい。思い出したくなかうも。ばってん、こん悲劇ば、風化したらあかん。伝えていかねばあかんたい。だけん、みんなで草ば刈って、平和公園として、整備しはじめたんです」

老人は流れる汗を、ポタリポタリと吊い涙のように土に落とし、また、手を動かし始めました。

私は、東日本大震災の津波を思い出しました。集団避難で、助かった子もいれば亡くなった子もいる、親が迎えに来て、亡くなった子も助かった子も。震災の教訓を、語り継がねばと思っても、複雑な思いで、口を開き辛い……震災後、暮らしていた気仙沼で、そんな眩きを何度も耳にしました。災害も戦争も、避難の瞬時の判断は、誰が正しかった、誰が間違っていた、などとは言えないでしょう。しかし、自然災害は誰のせいでもありませんが、戦争は紛れもなく私たち人間のせいです。自然災害は人間の力では防ぎませんが、戦争をなくすことができるのは、私たち人間しかいないのです。

私は、老人に、越して来たばかりだということ、復興支援で被災地を移り住んで来たこと、その前は役者をしていたことを、話しました。すると、老人が、顔を上げました。

「役者？ あんた、芝居に出てくれんか？」

翌週、私は、市民会館の稽古場で、朝倉の子供たちに囲まれていました。平和祭で上演される「頓田の森の悲劇」の芝居に、出ることになったのです。子供たちと共にする稽古は、楽しいものでした。駆け回る子、喧嘩する子、叱られて泣く子。その子らが演じる、頓田の森の子供たちも、共にいて、泣いて笑って、駆け回っているように感じました。戦争について、子供たちと、毎日、話しました。私は戦争体験世代ではありませんが、親や身近な人たちから聞いた話、書物などから知り得た話を、丁寧に話しました。話を聞く、子供たちの目は真剣でした。そして私は、その瞳の中に、戦争のない未来を、見たのです。

私たちは、この瞳を守らなければならない。戦争をなくす夢を、諦めず持ち続け、語り継いでいかねばならない。そう思い、私は再び、戦争について、学び始めました。聞けば聞くほど辛く、知れば知るほど怒りが込み上げ、悲しさと悔しさが入り混じり、苦しくなりました。耳を塞ぎたくなることも何度も。しかし、目を見開き、耳を傾け、平和への思いを重ね、戦争をなくそうと、声に出し続けていかねばならないと思いました。

劇中、幼い妹たちの亡骸を抱いた兄が、陸軍の野戦病院に駆けつけて言います。

「軍医殿。どうかお願いいたします。これは先ほど頓田の森で、千切れてしまった妹たちの手です。どうか繋いでやってください。手がないと、妹たちは極楽浄土で、長い髪の三つ組みが編めません。軍医殿、どうか、このとおりです」

誤爆を防ぐ唯一の方法、それは【戦争をしないこと】です。その為に、私たちは、どんなに辛く悲しい出来事であっても、その

史実を、語り継いでいかねばなりません。そして、どんな環境下におかれたとしても、怯まず、黙することのない勇気を、持ち続けなければなりません。

「戦争をなくすこと」その夢の実現の為に。

#### 優秀賞

### 夢を語った島四国

大阪府堺市 相野正

昭和三十年半ばの春三月。

中学二年生だった私は曾祖父に連れられ、瀬戸内海に浮かぶ小豆島で八十八カ所巡拝の遍路旅に来ていた。住んでいた四国側の村から船で海を渡り、「島四国」を一週間かけて歩く。「本四国」と呼ばれる四国遍路に比べて遥かにコンパクトだが急峻な山岳札所が多い。僧籍の私たちは白装束だ。

スタート地点の土庄港には、コロムビアローズのオリブの歌が流れ、有名な二十四の瞳の平和の群像前では団体遍路が賑やかに貸し切りバスを待っていた。

都会で生まれたが両親がいない私は、寒村で破れ寺の住職をしていた曾祖母に預けられて暮らしていたので、そのまま寺を継ぎ、両親の菩提を弔わねばならぬと教えられて育った。だが、それに少し反発する気持ちも湧いていた時期でもあった。

不意に銅像脇から男の子が出てきた。学生服で金剛杖、頭陀袋とリュック姿。背が高いが幼い顔つきだ。カメラで像の写真を撮



り始める。私は少年の持つカメラに見とれていると、突然声をかけられた。

「シャッター押してくれる？」「うん」

笑顔が憎めないK君に好感を持った。それが私たちの会話の始まりだった。徳島から祖母に連れられてやってきたらしい。二歳下だ。

出発が同じだと、後先になりながら札所を巡る可能性が高い。彼とは「じゃ」と別れたが、どうせこれから何度も会うはずだった。夕方、難所の七十二番札所の笠が滝に着いた。私たちの後ろから、同じように鎖にすがって崖を登ってくる二人の遍路が見える。K君たちだった。彼は休憩している私の横の岩に腰かけた。最近病死した母を弔うために来たという。生まれてすぐ両親を亡くした私より、むしろ辛い経験だが、それを感じさせない明るさが羨ましかった。

それから毎日、遍路宿や札所で会えばいつも一緒にいた。兄弟のいない私には楽しい数日間になった。K君は父親の影響で、将来はプロ野球選手になりたいと言う。だが私には、両親の顔も声も記憶はなく、置き去りにされたのに、なぜ自分の人生を捧げて弔わないといけないのか、という思いが消えなかった。

私が、そんな本音を口にしたのは行程の中ほど、醤油しょうゆの香りの村を抜け、岬の分教場を目指す松林の道を歩いているときだった。「ほんまは、ぼんさんになるのは嫌なんや。自由に生きてみたいんや」

「それなら、そう言うたら？ 僕は自分がやりたいからやるんや」と彼は言った。

でも私はどこで何をしたいのかと聞かれても答えられない。今まで考えたことがなかったからだ。K君は野球選手になる夢を熱く語った。私は自分が後悔しない道を選んで頑張る。そんな約束を交わした。だが、夢を持つことを許されなかった私に、弟のような彼から自分の意思を問われた日になったのだ。

結願けつがんのあと、港の船乗り場の伝言板に「また会おうな」と書いた。来年はわからないと彼は言ったが、もし来たら遍路宿の宿帳やこの伝言板に何かを書き残す約束をした。

やがて「伝言読んだよ。一緒に頑張ろう」というメモと写真が送られてきた。真っ黒になってボールを追いかけている姿だった。その後も島四国へは行ったが、彼の痕跡もなくいつからか手紙も途絶えた。

高校卒業を前に私は「普通の人生を生きてみたい」と泣きながら訴え、曾祖父は悲しんだが、なんとか還俗を許された。

高校を卒業した月、私はカバンをひとつ下げて、船で都会へ戻っていった。将来は普通の家庭を持ちたい、海外で仕事をしてみたいという小さな夢の第一歩だった。

彼と出会って数年後の夏、甲子園の高校野球大会をテレビで何気なく見ていて衝撃が走った。ある地方の代表高のマウンドで投げ続けているのは、あのK君だった。嬉しくて仕方なかった。精悍な顔の青年になっていた。試合後の彼の汗と涙を見て私も泣いた。

翌年曾祖父が亡くなり、その慰霊のために私は再び島四国を巡った。そして港の伝言板に「お互いに着実に夢に向かっていくな」と書いた。もう読んでくれるとは思わないので、それは自分

への伝言だったのかもしれない。

小さい頃、漁師の子は海へ、そして農家の子は畑を耕すものだ  
と思っていた。「おまえの夢はなんだ？」と聞いてくれる人もい  
ない。滅多にバスも来ない村には夢もやってこないのだろうと  
思っていた。だが彼に出会って夢を語られ、持っていない自分が  
恥ずかしくなった。しかも、自分の夢は自分で努力する以外に  
かなえる方法はないと彼に教えられた。その努力が嫌だから、自信  
がないから夢を持たなかったのかもしれない。

育ててくれた曾祖父をひとり置いて瀬戸の海を渡った私は、そ  
れから二十年後、夢を叶えるために、今度はひとり太平洋を越え  
た。

## 優秀賞

# 私の使命

東京都杉並区 後藤 里奈

彼女との出会いは、高校一年の春だった。内気で引込み思案  
だった私に、最初に声を掛けてくれたのが「えっちゃん」だった  
のだ。底抜けに明るく誰にでも優しい彼女は、まさに私とは正反  
対のタイプで、成績も優秀だった。そんな彼女と席が近くなった  
ことをきっかけに、私は勉強を教えてもらったり、相談に乗って  
もらったりするうち、いつしか私たちは良き友人になっていった。  
ただ楽しい時を共に過ごすだけではなく、お互いの欠点もはつき  
り言い合える友人というのは貴重なものだが、私にとってそんな

真の友人は彼女以外いない。

三年生になっても彼女とは同じクラスになり、それぞれ自分の  
進路を真剣に考える時期が来た。当時私は、小説や学園ドラマの  
影響から、中学か高校の教員になりたいと思うようになっていた。  
だが自分でも向いていないということは分かっていたため、誰に  
もその夢を話すことはなかった。しかし、ある時そのことを彼女  
に打ち明けると、「いつも冷静で責任感の強いところは、きっと  
先生に向いていると思う」と賛成してくれたのだ。一方、以前か  
ら児童施設でボランティアをしていた彼女は、小学校の教員を目  
指していた。こうして、私たちは同じ夢に向かって受験勉強に励  
み、その年の春、私たちはそれぞれの志望校に合格した。

大学生になり、お互い環境が変わっても、私たちは定期的に連  
絡を取り合い、近況を報告し合った。上京したばかりで心細い時  
も、「えっちゃんも頑張っているんだ」と思うと元気が湧いた。  
その後も教師になるという夢は変わらぬまま、四年後、彼女は見  
事採用試験に受かり、地元岩手の小学校に、私は都内の私立高校  
に就職が決まったのだ。

「ついに教壇に立てる日が来た」と期待に胸が膨らむなか、私の  
勤務校では新人研修が始まった。ちょうどその時である。突如今  
まで経験したこともないような激しい揺れに襲われた。訳が分か  
らぬまま近所の公園へ避難し、揺れが収まってから学校へ戻ら  
ると、テレビでは自分の生まれ育った町が津波に流されていく映像  
が写っている。この世の出来事とは思えぬ光景に呆然としなが  
ら、なんとか家族の無事は確認でき、安堵したのも束の間、私は  
えっちゃんのことを気がかりでならなかった。彼女の住む地域も

間違はなく津波の被害に遭っている。だがその日は結局彼女と連絡がつかず、心配で眠れぬ夜を過ごした。そして数日後、私は母からえっちゃんの訃報を聞いた――。

彼女はその日も、地元の小学校へボランティアに行っていた。校庭で子供達と遊んでいると、異変に気づいた。津波が迫っていると分かり、海に近いその学校ではすぐに高台へ避難するよう指示が出たが、彼女はその場にいた児童を守るため、繰り返しされる避難指示に耳も貸さず、最後まで子供達の誘導にあたっていたさうだ。そして無事に全員を避難させた直後、津波の犠牲になってしまった。常に自分のことより他人のことを第一に考え、行動していたえっちゃん。どんなに怖かっただろう。悔しかっただろう。無念だっただろう。共に同じ夢を追い、支え合ってきた親友を亡くしたショックと悲しみから、私はしばらく立ち直ることができなかった。

しかしある時、今まで彼女に貰った手紙やメールを読み返すうち、ふと気づいた。いつまでも悲しんでいたら、彼女も浮かばれないだろう。こうして命を与えられている以上、彼女の分も生きなければならぬ。そして、早く一人前の教師になれるよう努力しなくては行けない。前を向いて進んでいくしかないのだと、ようやく思えるようになった。

震災から間もなく、私たちの故郷である被災地には、津波の到達地点に桜の木を植える活動が始まった。二度と同じ被害を出さないようにとの教訓と、彼女のように津波の犠牲になった人々の鎮魂の意味が込められている。今では立派な桜並木となり、復興のシンボルにもなっている。

あれから約十一年。私はなんとか教師を続けてきたが、やはり自分には向いていないのではと悩み、辞めたくなることも多々あった。その度、「えっちゃんなら何と言うだろう」と考え、自分を奮い立たせてきた。いまだに失敗と反省の連続だが、それでも毎日奮闘する私の姿を、彼女は見守ってくれていると信じている。私にとって夢とは、叶えて終わるものではなく、その後も生涯かけて果たしていくべき使命である。友人の死は彼女の未来を奪ってしまったが、命を懸けて子供達を守り抜いた姿、その犠牲と奉仕の精神は、消えることなく私に大切なことを教えてくれる。彼女に恥じることはないよう、私はこれから出会った人との縁を生かしながら、夢だった教師としての人生を全うしていきたいと思う。

#### 優秀賞

### お掃除と母とわたしの物語

鹿児島県鹿児島市 鈴木里梨

私の将来の夢は大手の清掃会社に入職し、様々な場所へ行ってお掃除をすることだ。

私の夢は小学生のころはお花屋さん。中学生のころから司書を目指していた。そんな私が今の夢にたどり着いたのは、障害者の仕事についての本を読んでからである。

私は、昨年発達障害（アスペルガー症候群）と適応障害の診断を受けた。その後、障害者の仕事の本を読み、発達障害のある人

に適合するのが清掃員だと知った。

最初は発達障害がある人への適性から目指した清掃員の仕事だったが、思えば私は小中学校の時の掃除の時間が好きだったことを思い出した。

この二つの理由から、清掃員になることが自分の中で大きな夢となり、生きる目標となっている。

清掃員を目指すきっかけになったのは、母の存在だった。

掃除が好きな母は私に厳しく掃除の仕方を教えてくれた。発達障害というハンデを持つ私を、母は甘やかさなかった。そんな厳しい母を恨んだこともあったが、今では感謝している。

人は夢ができると努力するようになることを私は知った。私自身にも意外なことであったが、やるからには上を目指したいという気持ちも芽生えてきた。私にも上昇志向があるんだと思えたことは、自分自身の自信にもつながっている。

夢を叶えるために、日常の小さなことを積み重ねていくことが大事だと思う。昨年の夏、発達障害と適応障害の診断を受けたころ、私は自殺を考えることが増えていた。大学に行こうとすれば、胸が苦しくなる。生きること苦しかった。実際に多量の睡眠薬を飲み、病院へ運ばれたこともある。

しかし、夢が定まってからは、大学へ自分自身で登下校することから逃げないことにした。病気になる前は普通にできたことも困難になった私にとって、大学へ行くことが将来への第一歩だったのだ。

あまりにも低レベルの第一歩で笑う人もいるかもしれない。しかし私にとっては大きな一歩だった。

前を向いて歩くと、苦しさしかない大学が、様々な学びができる場所となった。例えば、レポート作成のように文章をまとめる課題だ。「書く」という技術は、清掃員として働く上でも必要なスキルだと思う。

大学生活とは、将来へつながる経験をさせてもらえる場所なんだと思えるようになったことは喜びの一つだ。

日々の生活で大切にしていることがある。それは、自宅での掃除や皿洗いなどの家事の手伝いだ。日々の手伝い程度で仕事の大変さは分からない。しかし、「継続は力なり」という言葉を私は信じ、ここ半年ほど毎日続けている。

私は以前よりも体調管理に気を配るようになった。朝起きたら一杯の水を飲み必ず飲む、一日一回は散歩をする……病気になる前には、年寄りのすることだと思っていた。しかし、私は実際に病気になる、心身ともに健康であることの大切さを学んだ。

最近前向きになっていった私だが、母に怒られた。

「清掃員はそんなに甘い仕事じゃないのよ」と。

自分は清掃員へ適性があるからと甘い考えを抱いていたのかも知らない。母に叱られたお陰で、前よりも一層清掃員を目指したいという気持ちが強くなっている。

「将来の夢が清掃員？」

笑う人もいるかもしれない。しかし、汚れが落ちた瞬間、自分の手で美しくできたという達成感を味わえる清掃の仕事は気持ちが良い。私にとって最高の瞬間だ。

何度も自殺未遂を図りどん底まで落ちた私の夢は、自分だけではなく様々な人を幸せにする清掃の仕事だ。



夢を叶え、日々自分を成長させるためにも、私が「わたし」であることに誇りを持てるよう生きていきたい。

## 佳作

# 夢、掌のひらほどの

愛知県武豊町 臼木 巍うすき たか

学校は冬休みに入った。安閑とする。勤めを終え商店街をゆったりと歩く。通学時にも通る道だ。商店街の中頃にある小さな中華料理店が、いつも誘惑する匂いで暖簾のれんを揺らめかせ道行く人を招いていた。気にしていた店だ。もしこの日、この店に入らなかったならばと、人との出会いの不思議さを覚える。

一杯三五円のラーメンは高価過ぎた。下宿で贅沢ぜいたくもできぬ身では飲食店に入ったこともない。しかし一度は憧れのラーメンを食べてみたい。意を決し入店して、気付けば震える声で「ラーメン下さい!」と、注文をしていた。一七歳、初めての外食体験だった。ラーメンは格別で、スープがからみ付いた味は、いつまでも心地良く舌に残る。極上の味に満足しつつ母を思った。母にも食べさせたかった。一滴のスープも残らなかった。

興奮して食べ終わる。この夕方の時間、他に客はいない。奥の厨房ちゅうぼうから三〇歳代の店主が出てきた。「どう、ラーメンの味は?」愛嬌あいぎょうのある顔で尋ねた。「美味しい、最高です!」と答えると、その顔がまた崩れた。「いつもこの時間、この道を通るね」店主の突然の言葉にびっくりした。私のくたびれた学生服姿を凝視し

て「学生?」と聞いた。「はい、夜学です」。しばらくの間、主人は黙って頷うなずくばかりだった。そして切り出した。

「そうか、オレも夜間部卒業だよ。大変だよなあ、生活。わかるよ」。まさかまさかの夜学の先輩だった。夜間部であることを平然と告白する人に出会うことはまずない。同じ体験者だ、その後の話は弾んだ。「いま何年生?」「二年生です」「それじゃ一番退学の多い頃だなあ。教室はガラガラだろう」。

僅かに二年間で半数以上の仲間が教室から消えた。悶々もんもんとした夜学生活に耐えきれないのだ。給料から仕送り、自活の生活費、下宿代、学費を払うと手元に残るお金はまるで無い。この繰り返し繰りかえしの連続が勤労学生の青春だ。三畳下宿の冷たい布団が頭に浮かぶ。

「とにかく卒業することだ、それが一番。他に夢など見ないことだよ!」先輩は断言した。「オレだって何度も退学を思った。しかし、夜学高校中退じゃ格好付かないからな、自分にネジ巻いたよ!」。卒業は大変なものだと、自分の体験を長い時間かけて披露した。聞きながら、手も届かぬ時間の先の卒業までたどり着けるのかと、そればかりを考えていた。

夜学は悪魔の巣窟だ。退学の理由付を簡単に造作してくれる。会社で残業拒否は難しく、周囲にはことのほか気遣いをする。学校会社の片方だけを優先することはできない。しかし給与は少しでも多く欲しい。職場ではこの中途半端が疎んじられる。待遇の将来への不安もある。勤労学生の解決できぬ要因に、抜け出せぬ闇が延々と続く。退学が誰の頭にも浮かぶ。悪魔の甘い囁ささやきが聞こえ始める。



夜学生の登校時、グラウンドでは昼間部生の部活で眩しく歓声がある。それを追う視線の疲れ果てた眼は、機械油がいつも体中から漂う夜学生。いたる所に断崖絶壁の落差を感じる夜学生生活は、並みの神経ではとても完遂出来ない。体力と心臓の三人分は必要だ。

先ず卒業だ、先輩の言葉は簡潔だ。卒業、小さな草のひらほどの夢の実現が困難過ぎる。悪魔は次々と巧妙狡猾に罠を仕掛けてくる。連中との決闘の場が、夜学の四年間だ。

三年生も終わる頃、やっと退学者が出なくなる。だがこれは終わりではない。鉄壁の関所が現れる。この関門を無傷で通過するのは格段に難しい。難しいどころか方策もない。

それが四年生の就職試験だ。覚悟はしていたが、見事に夜間部には無縁の行事。どこの会社の就職案内にも「夜間部生不可」の文字が鮮やかに記されてある。徹底して梯子が外される。この体験をすると生きている自信を失う。過酷だ。最後の目標も消える。これに耐え得る辛さは他にない。夜学生生活最大の山場だ。当然に退学者が出る。仲間は両手で数える程の人数しか残らない。勝ち誇った悪魔たちが手を叩き、罵詈雑言で嘲笑する。

丁度その時期、勤め先の会社が倒産した。悪運は重なる。放り出され全てが霧散した。命の仕舞いも退学も頭にちらつく。明日からメシの種がない。仕送りができない。母の顔が浮かぶ。悄然とする間もない。横浜港でカネになる沖仲仕の仕事に就いた。夢中だった。何度も倒れた。それでも金が必要とした。

無限の時間にも感じた四年間。安堵の時間は無かった。それもやっと終わった。与えられた青春で、わずかな夢を叶える難しさ

を知った。しかし、終わった。暗闇を脱出して鮮麗な朝日を見た。卒業、万感の思いだ。悪魔たちは白旗を巻いて逃走、全滅した。卒業の日、先輩は店を貸し切りで祝賀会を開いてくれた。先輩との邂逅で生き抜く術を学んだ。逞しさを見せつけられた。夜学生不可で、就職は出来なかった。これに懲りた。私も先輩同様に自力での道を選んだ。その一年半後に設計事務所の設立。そして、夜学高校卒業から三年目に大学二部（夜学部）の門を叩いた。今度こそ、夢を驚づかみにする勇壮な志を抱いて。今度こそ――。

## 【注記】

\*文中の価格は昭和三〇年中頃のものです。

\*「沖仲仕」の意味・港で「はしけ」と本船との間で、荷物の積み下ろしを行う人夫のこと（荷を肩でかついで）。

## 佳作

# 夢、応援

北海道七飯町 高田 外電雄

小学三年のS君は、筋ジス症で三学期から車椅子生活者になった。四年生になると、教室は二階で学習活動も校舎外へと広がる。さらに、病状もすすむので四年生からは、病院付設の学校への転校を紹介した。

しかし、S君は従来通り通常学校での勉強を強く望んだ。「僕、将来システムエンジニアになりたいんです。そのために皆と同じ

勉強をするんです」と訴えた。「システム……って何?」、初めて耳にする職業だった。「コンピュータを使つての仕事です」と教えてくれたが、全く想像できなかった。

かつてS君と同じ筋ジス症の子供を担当したり、近くで彼らを見てきた。また、この病気を治療する専門病院にも行って、そこに入院をしている人も目にした。

彼らは変に諦めたようで感情の起伏が少ない。喜怒哀楽を出さないのだ。「○○しようね」って誘うと、「ハイ」と素直に返事をするが、彼らの多くは自ら進んで『する』との意欲が感じられなかった。思うに少しずつ体が動かなくなるのを体感して、何も彼も諦めてしまうのか。彼らを見るのが切なくなり、かける言葉さえ浮かばなかったのだ。

そういう経験があったので、S君の前向きの生き方に驚いた。さらに、九歳の子が将来を見据えて生きようとしている。彼は既に体が動かなくなるのを自覚していた。それで意欲を無くして『ぼやっ』と生きるのではなく、逆に手が動けるうちに目的を達成しようとしている気がした。わずか九歳の子が人生の決断をしていたのだ。S君は自分には後がないことを知っていたに違いない。その気持ちを思うと胸が詰まった。

そこで彼を応援することにした。仕事を越えた決断であった。ただ通常学校の担任が、車椅子の子をトイレやグラウンド等に移動するのは無理であった。地震などで避難する非常事態の場合、担任は車椅子以外の子供の指導もする。担任だけでは絶対に無理であった。

色々な人の助言を受けて病弱学級を開設して、彼は新学級に入

る。そこで体育の授業を受け、他の教科は通常学級で学ぶ。病弱学級の担任は私で、トイレや通常学級での移動も私が行う。体育の学習内容は、機能訓練的な運動であったが、時には通常学級の体育の見学も体育授業としてカウントした。

例えばサッカー見学で、「○○君、シュートだ」と叫べば参加とみなす。また、誰かがゴールして、「ヤッタ」と拍手しても疑似的参加とする。体育を幅広く考えたのである。

体育の授業の機能訓練的内容は、彼の希望を取り入れて指や腕の運動をした。輪投げ、車椅子回し、箸はさみ、風船サッカーなどである。

風船サッカーは、縦と横一メートルに段ボールの箱の口を開いて積みゴールポストとし、その前に紙の人形のゴールキーパーを置いた。操作は、私がした。S君はゴールから一メートル離れた場所から風船を投げ入れるのである。当時Jリーグが発足して、彼はサッカーに熱中していた。S君のチーム名は『Sアントラーズ』で、私は『ガンバA』だという。

車椅子からゆっくりと手を下から上げて風船を放す。風船はゴールキーパー役の人形の上を通ってゴールに向かう。しかし、彼は腕の力が弱いので風船は床に落ちる。そこで人形のゴールキーパーが、足で風船をキックしてゴールを阻止する。

S君は「今度は弾丸シュートだ」って叫ぶ。「何度シュートしても、この鉄壁の守備を突破するのは、君には無理だね」と挑発する。「ぼく、先生に負けないぞ」と彼は車椅子をゴールの斜めに移動してシュートをした。

しかし、人形のゴールキーパーはヘッドリングで風船を飛ばす。

十回に一回ぐらいは、人形が転びゴールする。「ヤッター」って喜んだが、彼は家で祖母に言ったという。「先生が人形をわざと転ばしてゴールさせた」と。

その後、彼は中学卒業後、病院付設の高等養護学校へ進学した。祖母は「Sちゃん、頑張ってます。放送大学へ入る」を目指していると言った。さらに、エンジニアになると。

高等養護学校を終えると、彼は病院の仲間を誘って放送大学に入学し、その責任者になって皆を引っ張ったらしい。祖母は「Sちゃんが頑張るのは、先生が新学級の開設に尽力して下さり、風船サッカーなどしてくれたのが基礎になっています」と涙した。私は彼の夢・実現の基礎学習に少し携わっただけであったが。そして、振り返るとS君は「風船サッカーをしていた時が、『人生で一番生き生き』していた気がする」と祖母が言った。

現在、彼は人工呼吸器をつけて寝たきりである。夢は実現できなかったが、見舞うと「先生、お見舞いありがとうございます」と目が話す。そこには夢・実現に向かって、「ぼく、せいっぱい頑張った」との満足感に満ちていた。と思うのは、私の思い過ぎだろうか。

佳作

## 共に持つ夢

東京都世田谷区 伏見浩之<sup>ふしみ ひろゆき</sup>

日々の生活を懸命に過ごしているうちにいつの間にか今年還暦を迎えた。

十代の頃からおよそ世代ごとに、それなりに自分の夢らしきものはあった。ある時は得てみたい素晴らしい生活環境、またある時はなりたい職業など夢の形はその時々で変わった。しかしそれらを実現するためにはどうしたらいいのか具体的にわからないうちに時間は過ぎていった。そうして毎日の出来事に追われていた夢のことなど考えることすらなくなっていた。

やがて結婚をして家族が増えていくと、さらにその時々においてしなくてはいけないことに時間は費やされ、自分の夢の実現のために自分ひとりだけで動くことなど考えられなくなった。夢を具現化するには自由で十分な時間がないと難しいのではないかと、さらに夢をみるのができなくても、それが大人の生活というものだと思うようになった。そうしているうちに夢は若者だけの特権であるかのように考えるようになった。

そのような中で、妻が結婚前におこなっていた創作人形の製作を再開した。まだ子供は小さかったので製作にかけられる時間は限られたが、その熱心な姿を見ているうちになんとか応援したいと思うようになった。

当時はまだSNSが普及していなかった時期だったので、発表や販売の場を得るためには積極的な対面活動が必要だった。しかし妻は、創作活動は好きだが渉外活動はまるで不得手だった。そこで、それぞれができることをすれぱいいという程度の考えで、私が前に出てみようと思った。最初は私が展示会に出ているなどまったくの場違いで居場所すら無いと思うこともあったが、とにかく妻の創作活動を広めたい、軌道に乗せたいという思いから自分とは畑違いの人達と積極的に会っていった。そうするうちに成功するにはただ製作するだけでなくプロデューサー、アドバイザーそしてスポンサーが必要になることがわかり私がその役割を果たせればと考えるようになった。

そうしてとにかくがむしゃらに活動が続けていると、次第に応援したいという私の思いが様々な形で具現化していった。妻の創作活動が次第に世間に認められていったのである。単に作品が販売に至るだけでなく、取り扱っていただけの展示会やギャラリーが全国に増えていったのである。それは、妻はもちろん私にもとても嬉しい過程だった。

私には何もわからない分野のことだったが、とにかく自分にできることを探しそこから動き出した。まず何でもやってみるしかない。するとやっているとうちに新たに知り得ることがあるし、その先が開けていくことがある。また新しい人間関係が作られたり、そこからまた新しい企画が思わぬ形で生まれたりしていくこともある。成功するために必要なことだけでなく、ある意味無駄なことともかなりしたかもしれないがやがてそれらがひとつの形を作るようにつながっていくことを実感していった。

そしておもしろいことに、いろいろと新たな活動を積み重ねていくうちに妻の成功がいつの間にか自分の夢になっていたのである。何かに懸命に取り組んでいるうちにその成功が夢になっていく、夢が作られていくこともあるのだと思った。そして夢はひとりだけで実現するのは難しいということも身に染みてわかった。ひとりだけで頑張るのは限界があるし苦しい作業の連続になるが、誰かと一緒に多少の苦労があっても励まし合ったりそのすべてが楽しい経験になる。

そして現在、ふたりの子供も大きくなり、それぞれに漠然とした夢を話すようになった。まだ人に話すのは恥ずかしくなるような途方もない話ばかりだが、実現したらなかなか面白いと思うこともあるし、親としてはできればうまく行ってほしいとほのかに期待することもある。ただ性急に余計な口出しをしてその形を歪めてしまったり、自分の知識や経験を当てはめて安易な方向付けをしてしまったりしないように気をつけなくてはいけないと自らを戒めている。しかし妻の時のように、もし自分にも何か手伝えることがあれば、その時はその実現を助けるために少しでも動いてみたいと思う。

以前は、夢とは個々の大事な宝物だと考えてきた。でも案外ひとりだけのものにとどまらないのではないか。家族の誰かの夢でもそれを応援することでそれが自分の夢にもなる。それにもし家族という枠を広げて、友人や縁のある人と同じ夢を共有し一緒に努力できるとなればさらに大きな幸せを感じられるかもしれない。そんな可能性を期待するとこれからも年齢など関係なく夢を追えるのだと思った。



# ショートカットのプリンセスを夢見て

愛知県名古屋市長 藤本 ゆきな

「かかと一緒にプリンセスになりたい」

娘の描くお姫様の絵が、長い髪をなびかせなくなったのは、いつからだっただろう。

プチ、プチ、プチ、プチ。気づくとまた、私は毛を抜いている。抜毛の症状が出したのは、高校生の頃だった。初めは眉毛、続いてまつ毛、髪。禿<sup>は</sup>げてみずばらしくなった顔を鏡で見るたび、やめなければと心に誓うのに、気づけばまた、抜いている。面と向かつては何も言われないが、向けられる好奇の目。薄くなった部分を見るたび、自己嫌悪と情けなさで涙が止まらなかった。

禿<sup>は</sup>げを隠すため髪を伸ばしていた事もあった。しかし社会人二年目、ついに治療を始める事になり、それと同時に、腰まであった髪をバツサリ切った。通院する内、症状の根底に自身の障害や、そこから派生した二次障害がある事がわかった。ASD（自閉症スペクトラム）でうつ病。医師や心理士、看護師、作業療法士。多くの人の力を借りて、数年後には私の症状は、目立たない程度に抑えられるようになっていった。しかし、根底にある障害は一生もの。二次障害も寛解はしておらず、いつまたひどく抜毛しだすかと思うと髪を伸ばす気にはなれなかった。

「一緒に治していこう」

夫の言葉は嬉<sup>うれ</sup>しかったが、どこかしっくりこなかった。障害は治らないからだ。それでも、「治す」ために頑張ろうとしないことは、とてもいけないことのような気がして、私は必死に、普通であろう、元氣であろうとがき続けた。

「かかはどうして髪をのばさないの？」

女の子はみんなプリンセスなのに、と娘は不満そうだった。私が髪を切りに行くたびに口を尖<sup>とが</sup>らせ、一緒にのぼそうよとせがんだ。はじめは「短いのが好きだから」と誤魔化していたが、娘が年中組に上がった時、事件は起こった。「ちいちゃんのお母さんの髪、ぺったんこ。何かおばあちゃんみたい」と、お友達にからかわれたというのである。娘は何も言い返さず、じっと下を向いていたと、先生から聞いた。

「もしよかったら、話してみてもあげて貰<sup>もら</sup>えませんか、お母さんのこと。ちいちゃん自身もちゃんと知りたいんじゃないかと思います」

先生の言葉を受け、私は自身の障害や病氣、抜毛の症状について、娘に話してみることにした。なるべく簡単な言葉で、娘の質問にも正直に答えながら。恥ずかしい気持ちや情けない本心も話した。「なんで抜いちゃうの？」には、しつくりくる答えが出せず、長い時間自問自答し続けた。何日も、何週間も、何ヶ月も、私たちは私の障害について話した。納得も、理解も、中々できないように、娘の質問は小学生になった今でも続いている。しかし、その質問の内容は次第に前向きになっていった。「どうしてできないの？」ではなく「どうしたらできるの？」。娘と向き合うことを通して自身の障害と向き合い、私の考え方も変わっていった。



治すことがゴールではない。私らしく、どう生きるかだ。しつくりこなかった「治す」という夢に、良い意味で諦めがついた瞬間だった。それから、決意のショートカットは、本当に私の好きな髪型になった。

娘から冒頭の言葉が出たのは、今年の五月の事だった。絵の中の私は短い髪で微笑み、キラキラのドレスを着ていた。隣に描かれた娘も、本人そっくりのおかっぱ頭で、にっこりと笑っている。ありのままの姿で、真っ直ぐと前を見て、絵の中の二人は幸せそうだ。

「ねえ、ドレス、何で黒なの？」

と問えば、娘はいたずらっぽく笑った。このプリンスは、舞踏会には出ないらしい。

「髪が短くても、踊れなくても、カラフルなドレスじゃなくてもいいの。でも、やっぱり、輝いていなくちゃ」

娘は、自分が応募していた作文コンクールに私も挑戦するように言ってきた。「恥ずかしかったことも、嬉しかったことも、ぜんぶ隠さなくていいんだよ。自分の気持ちにじっくり向き合って、周りのこともよく見て、考えて、感じて、少しずつ形にしていけばいいんだよ」なんて、いつか私がかけた言葉とともに。そして夢を語った。いつか一緒に表彰式に出ようと。スポットライトと、家族が向けてくれるカメラのフラッシュ、誇らしげな笑顔。全部そろえばきっと舞踏会みたいにキラキラ輝くよ、と。

上手な文章はまだ書けない。向き合う時間も、まだまだ足りない。だけど、これからだ。私たちは一緒に、ありのままの自分を表現し続ける。新しい夢に向かって。

佳作

## ばあちゃんの夢

埼玉県所沢市 見澤 富子 みさわ とみこ

「お宅のお孫さん、ちょっと普通じゃないよね」

リビングに飾ってある入園式の写真を見て友人が言う。フリルのスカート。ピンクのカチューシャ。これでいて名前が『ゆうた』と言うから何も言わずにはいられない。

孫と同居して早五年。今は朝六時に起きてお弁当を作り、保育園に送り出すのが日課だ。

「普通はママがやるよね」

ここでもまた『普通』を突きつけられる。娘が乳がんで闘病中であることを伝えると相手は急にすまなさそうな顔をした。

あれは去年の学会。担任の先生からちよつと話があると言われた。

「どうしてもシンデレラをやりたいみたいで」

先生は言いくそうに話し始めた。どうやら孫がシンデレラに立候補したが、それを良く思わない子がいたらしい。「男の子なのにシンデレラはおかしいよ」と言われた孫は、案の定、その場で号泣した。

「申し訳ありません。でもこのままだと小学校に入ってからいじめに遭う可能性もあります。もしよかったら」

そう言って差し出された医療機関のパンフレット。見ればここ

ろの診療部とある。何だか急に虫の居所が悪くなって、そそくさと教室をあとにした。

帰宅後孫とおやつを食べていた時だった。

「ばあちゃん、しょうらいのゆめ、ある？」

突然の質問にドキッとした。だが「ゆうたはひこうきに乗ってる人になりたい」と続ける。

「パイロット？」

「ちがう。ジュースくぼるひと」

キャビンアテンダント。孫の言葉にピンときた。男の子はなれないよ。そう言おうとしてやめた。結局私も世間の『ふつう』にとらわれている一人だった。

だが日に日に孫の中で『実際の性』と『なりたいたい性』の乖離<sup>かいり</sup>が激しくなる。やがて孫は自分のことを「わたし」と言いはじめ、園服もスカートに。だがそうなるで一層強くなるのが世間の目。一歩外に出れば「男？ 女？」と後ろ指をさされることは数知れず。「おかしい」という言葉だつて「ヘン」や「普通じゃない」にカタチを変えて何度も私たちを苦しめた。

そんな中事件が起きる。孫がお友達にバカにされて、相手を強く突き飛ばした。

「指導が行き届かなくて申し訳ありません」

先生はひたすら謝った。私も居ても立っても居られず、慌てて先方に謝罪に行った。相手の母親は黙って謝罪を受け入れた。だが最後「そもそもお宅は普通じゃないって噂<sup>うわさ</sup>ですからね。お母様もいないようですし」と吐き捨てた。私も悔しさを握りこぶしに隠した。こんなところを娘が見たら。そう考えると胸が張り裂け

そうになった。

だが思いもよらぬ形で真実が明らかになる。それは初めて医療機関を受診した時だった。カウンセリングルームに入った孫は医師にこんな話をした。

「ハートのおにぎりをおかしいって言われたのがイヤだった」

ああ、そうか。私も思い当たる節があった。

「でも、お前のばあちゃんもおかしいって言われたのは、もっと、いやだった」

え。わ、わたし？ 思わず耳を疑った。孫が怒った理由。それは性のせいじゃない。やさしさのせいだった。

ばあちゃんをバカにするな。

おかしいなんていうな。

心の中で叫ぶ孫の声が伝わった気がした。

「本当にやさしい子ね。ばあちゃん、もうゆうたが幸せならそれでいい」

私は思わず孫を抱きしめた。嬉しさや感謝。色んな感情がこみ上げた。

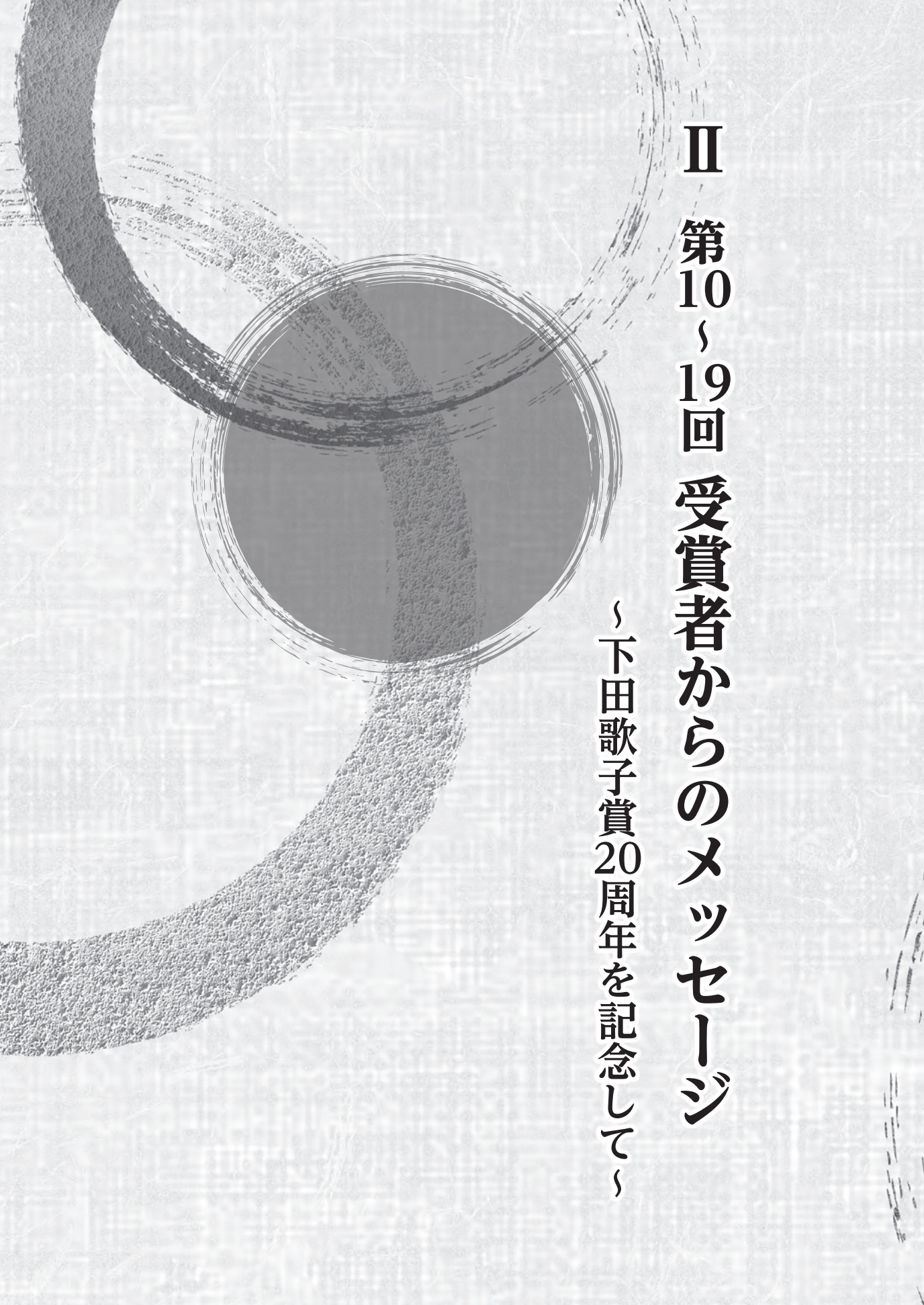
今回孫を通じて、改めて『普通』について考えた。極端な話、スィカひとつとっても、塩をかけるのが普通という人もいれば、砂糖をかけるのが普通という人もいる。だけどそこに正解はないし、むしろあつてはならない。味覚も嗜好<sup>しこう</sup>も人それぞれだから。同じことが生き方にも言える。人生のコースもゴールも一つじゃないように、考え方も幸せの種類も一つじゃない。それは人

「ことだよ」

募集チラシ  
(表面)

募集チラシ  
(裏面)





# Ⅱ 第10、19回 受賞者からのメッセージ

、下田歌子賞20周年を記念して、





# はじめに

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会会長

にしお きみお  
西尾 公男

平成十五（二〇〇三）年、旧岩村町の主催で始まった下田歌子賞も二十周年を迎えることができました。下田歌子賞は、旧岩村町が岐阜県の助成を得て「岐阜県郷土に輝く先人顕彰推進事業」として、平成十五年度より三年間の事業としてはじめた事業です。翌年の市町村合併により新制恵那市が誕生した後も、恵那市の文化・教育事業の一つとして本事業を継続していくことになり、平成二十（二〇〇八）年度の第六回からは、郷土に輝く先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会が企画・運営を行なっています。

さて、実行委員会では、十周年を迎えた平成二十四（二〇一二）年度に、第一回から第九回の受賞者からお寄せいただいた受賞の思い出をまとめた十周年記念誌『受賞の思い出 下田歌子賞十周年を記念して』を発刊しましたが、二十周年を迎えた本年度は、第十回から第十九回のエッセイの部受賞者全員にご案内を差し上げたところ、実に七十二名の方から素晴らしいお便りを頂戴し、ここにまとめさせていただきました。お寄せいただいたお便りの中には、下田歌子賞が人生を見つめ直す機会になり、新たな出発のきっかけになったというお便りや、下田歌子先生とそのふるさと恵那を、心のふるさととして人生を歩んでいきたいなどのうれしいお便りもあり、感謝と感動でいっぱいになりました。

下田歌子先生は実践する（学んだことを実行する）ことの大切さを説かれました。学んだことを自分だけの楽しみ、生きがいにと留めるのではなく、それぞれができる範囲で、世のため、人のために役立てよう。そして、みんなで手を取りあって、豊かで素晴らしい社会にしようというのが、その主旨だと思います。受賞者の皆さまからのメッセージには、そのお手本、ヒントが満載されています。第二十回下田歌子賞受賞作品とともに、メッセージを生き方・考え方の一助にいただければ幸いです。

最後に、この二十年間のご支援、ご尽力にお礼申し上げますとともに、今後とも、下田歌子賞事業にご支援、ご尽力いただきますようお願い申し上げます。

## 小学生の部

### 受賞者からのメッセージ

\*学年は受賞当時。複数回受賞者の場合は第10回以降で最初に受賞した時の学年です。

### 自分を見つめなおし、表現する機会に

兵庫県西宮市◎林部<sup>はしべ</sup>妃夏<sup>ひな</sup>（小6）  
第10回「母」ふるさと先人賞

下田歌子賞二十周年記念誌のご発刊、誠におめでとうございます。応募した時はまさか自分が選ばれるとは思っておらず、とても喜んだのを覚えています。実は自分の作文を一度も両親に見せずに応募したため、朗読で両親は初めて内容を知り、驚いていたのでもいい思い出です。この賞を通して、自分から多くの人が自分を見つめ直し、自分を表現する機会となることを願っております。

### 岩村町がわたしのふるさと

岐阜県恵那市◎細井<sup>ほそい</sup>真生<sup>まき</sup>（小6）  
第11回「ふるさと」ふるさと先人賞

小学六年生の時、「ふるさと」というテーマで書いたエッセイの朗読を受賞の記念イベントに向けて何度も練習したことを覚えていきます。岩村城跡がある岩村町は誇りで自慢のふるさとだという内容のものでした。私は現在、筑波大学で言語学を学んでいます。先日のゼミで「好きなふるさととの風景」をテーマに作文を書きました。そこでも岩村城跡からの景色と岩村城について書き、担当教員から「日本の心のふるさとと言われる地域がまさに自分のふるさとにあるですね」と評価を頂きました。改めて、岩村町が私のふるさとであることを誇りに思いました。

高校卒業と同時にふるさとを離れ、今年で三年目になります。あと一年半で大学は卒業しますが、下田歌子先生のように生涯向上心を持って学び続けたいと思っています。

### 成人となって

岐阜県恵那市◎横水<sup>よこみず</sup>希星<sup>きせいら</sup>（小6）  
第12回「ふるさと」ふるさと先人賞

受賞した時は、小学校六年生でした。あれから七年がたちました。今や成人となった自分。あの頃と比べて身長は四十センチ伸びました。

ふるさとを守りたいという想いは今ももちろんあります。けれど、それが簡単ではないとわかる年齢にもなりました。

今の自分はガンで苦しむ人たちの役にたきたいというもう一つの夢を実現するために勉強しています。その勉強を頑張ることで、いつかふるさとを（ふるさとにいる大切な人たちを）守ることができればいいなと考えています。

### 心の支えはやはり「ふるさと」

岐阜県恵那市◎鈴木<sup>すずき</sup>佑菜<sup>ゆな</sup>（小6）  
第12回「ふるさと」ふるさと先人特別賞

下田歌子賞が二十年の節目を迎えられるとのこと。おめでとうございます。私は「ふ

るさと」のテーマで当時小学六年の時に応募をさせていただきました。現在、私は親元、岩村を離れて、一人で学生生活を送っています。このコロナ禍で、家族や友人等になかなか会えない辛さを抱えています。学生の身分でありながらも、間近で尊い命と向き合う日々です。時には心が折れそうとなる事もあります。そんな私の心の支えとなっているのは、やはり「ふるさと」です。生まれ育った岩村での家族や友人と過ごしてきた大切な時間、様々な出会いと経験こそ、日々を生きていく糧となり、力となっています。

十二歳の私に伝えたい。あの頃にほんやりと感じて考えていたふるさととは、しっかりと私の中に確かなものとしてあることを……。

下田歌子賞を振り返りつつ、いつの日か、ふるさとの地で、多くの方々の命と心に向き合い、支えられる医療従事者となれるよう、夢に描いています。

## 受賞した息子を通して―受賞者の母より―

愛知県田原市◎大久保力(小6)  
第12回「ふるさと」嚶鳴協議会賞

下田歌子賞二十周年おめでとうございませす。

カイロが必要だったあの冬の日に息子を連れて恵那市へ行きました。まだ六年生の頃です。その時見た風景、会場での進行、童門先生のお話など、すぐ思い浮かんできます。下田先生の生い立ちを本で読み、女性教育の先駆者でいらっしやったことに感銘を受けました。その時代は若くして結婚したり、働き手になる女性が多かった頃です。今では女性も学ぶ自由があり、下田先生のお陰だなと思います。

今年息子は二十歳になります。家族でスキーが好きで岐阜県のゲレンデにも行きます。

思い出深い恵那市岩村に……もう一度訪れてあの日の想いをまた蘇よみがえらせたい。

## 家族であり続けたい―受賞者の母より―

岐阜県恵那市◎堀川颯汰(小6)  
第13回「家族」ふるさと先人大賞

下田歌子賞二十周年、おめでとうございませす。堀川颯汰はやたの母です。颯汰が受賞してから七年経ちますが、つい先日ひるの事のように思い出します。

今本人は、自分のやりたい事がありそれができる大学を目指して浪人生をしているため、私が代わりに寄稿させていただきました。

六年生の夏休み、下田歌子賞に応募した事も知らなかった私は「家族」をテーマにした颯汰の発表に感動し涙しました。そして大賞を受賞した時は大変驚きました。自己表現があまり得意ではなく、作文も上手うまくかけない子がこんな素敵な賞しかも大賞を頂いてもいいのかと思ってしまうました。

家族への思いもこんな風に思っていてくれたんだと嬉うれしく思いました。

家族から離れて頑張っている今も、心のどこかでは家族の大切さを感じながら日々を過ごしていると思います。私も家族も颯

汰が自分の夢を叶えるために頑張ってほしいと願ひ応援しています。

颯汰の思う「家族」。近くにいたら安心するけれど、いないと心配してしまう。

今は離れて暮らしているけれど、いつもお互いが心で感じてかけがえのない家族であり続けたいと思います。

## 当たり前が当たり前でなくなつて

岐阜県恵那市◎丸山晏菜（小6）  
第13回「家族」ふるさと先人賞

この賞を受賞したのは、もう六年ほども前で自分がどんなことを書いていたのかも明確にはわからなかったのですが、作品集を見返していたら自分が書いたことはもちろん、その時自分が家族に対してどのような思っていたかも改めて知ることが出来ました。また、この下田歌子賞という素敵な賞を受賞した時は、とても喜んでいたなど当時が蘇ってきました。私は今年の三月に高校を卒業し、四月から東京に上京しました。「家族はいつも近くにいて、隣にいます。」という、いままで当たり前すぎたことが今では当たり前ではなくなつてしまつ

ています。住み慣れていた大好きな町や家族の元から離れ、住み慣れていない地で一人で暮らしてみても改めて家族の大切さを知りました。「一緒にいると心が落ち着いてホッとする。なんでも話せて、おしゃべりしていると自然に笑いに包まれる」これがどれほど幸せなことだったのかを思い知らされました。年に数回しか帰ることが出来ないですが、帰った時は家族と一緒に過ごせる時間を今まで以上に大切に、家族のために、早く親孝行ができるように大好きな家族と離れていても頑張っていきたいと思います。

## 人との出会い

岐阜県恵那市◎遠山若夏菜（小6）  
第14回「家族」佳作  
第16回「志」中学生の部佳作  
第17回「志」中学生の部最優秀賞

下田歌子賞を受賞した当時、私は多くの人との出会いがあったように思います。岩村の偉人の一人である下田歌子先生の研究をするにあたって、岩村の地域の方々や実践女子学園の方々と出会ったこと。初風緑さんの『ことほぎ』を通して、下田歌子先

生のことを深く考えたこと。高校受験をするにあたって、たくさんの方の考えを聞き、今まで経験したことのないことを経験したこと。そして日常生活で何気なくしている家族との会話。今思えば私の受賞作品はこれらの人とのつながりがあってのものだと思っています。最後の受賞後、高校受験を経て高校生になりました。高校生になるとさらに多くの人と出会い新たな発見と驚きの毎日です。そんな高校生活も残り半年となりました。三年ぶりの受験生となり勉強に対してプレッシャーを感じながらも受験を経て大学で多くの人と出会い新しい環境で学びができるということを思うと自然とやる気が湧いてきます。

そんな今の私の夢は、大学で今まで触れたことのない分野の研究をすることです。私は小中高の学校生活で生物、化学、物理、社会などの様々な分野の研究をしてきました。その中でも、これからの時代に必要不可欠な情報分野の研究はしたことがありません。高校でも情報について詳しく勉強する機会はなく、今の自分には未知の世界です。

私が高校入学を迎えた四月は、新型コロナウイルス

ナ感染症拡大のため、約二か月学校に行けず自宅で過ごしました。しばらくすると、自宅にある機器を使いリモートでの授業が始まりました。学校の授業を自宅で受けるということは、コロナ前の生活からは考えられない学習スタイル。今年七月には、バーチャル空間で、高校生活で研究してきたことの成果を発表、他校の優れた研究を知る機会がありました。今まで考えもしなかったことを生み出す、そんな情報分野にとっても興味があります。私は大学で情報について学び、多くの人と出会い、日々成長できる大学生活を送りたいです。そして、歌子先生が未来を見通し女性の教育を進めてきたように、情報を通して、新たな未来の社会をつくる人になりたいと考えています。

## 言葉の力を信じて

東京都豊島区◎細貝<sup>ほまがい</sup>早希<sup>さき</sup>（小6）

第14回「家族」佳作

私は、下田歌子賞を受賞したことで、家族に本当の気持ちを伝えることができました。第十四回「下田歌子賞のテーマは「家族」でした。いつも一緒にいる家族に、日々の

生活ではなかなか素直に伝えられない「ありがとう」を、表彰授与式・記念イベントで、マイクを通して自分の声で伝えられました。小学六年生で反抗期の真っ最中だった私と家族をつなげてくれた受賞でした。また、本当の気持ちを声にして伝えるのが苦手な私にとって、言葉を文字で表すことは今でも大きな役割を果たしています。この受賞は、私の家族の今をつなげ、そして言葉を文字で表すことの魅力に気付かせてくれた大切な経験となりました。そして、これをきっかけに、自分の気持ちを素直に伝えることが少しはできるようになった気がします。下田歌子賞を受賞させていだけたこと、本当に感謝しています。ありがとうございました。

今高校三年生となった私は、また次の一歩を踏み出そうとしています。これからも言葉の力を信じ、前に進んでいきたいと思っています。

## 新たな夢

岐阜県恵那市◎熊崎<sup>くまさき</sup>優羽<sup>ゆう</sup>（小6）

第15回「志」佳作

高校二年生になった私には、新たな夢ができた。そんな私の夢は、「夢や未来を与えられる看護師」である。この夢を抱くことになったきっかけは小学校五年生の時。父が救急車で病院へ運ばれた時から始まった。その時は、まさか自分の父が。なんとと神様を運命を恨んだ。時間が経ち、父は病室へ運ばれた。あんなに元気な父がベッドの上でぐったりとくるしそうにしている姿を初めて見た。本当に怖かった。お見舞いに行っても、どんな顔をして、何を話したら良いのかも分からなかった。でもそんな時、ひとりの看護師さんが、不安な私を見て、「大丈夫。先生が絶対助けてくれるからね」と笑顔で私にそう言ってくれた。あれから五年。父は体調を取り戻し普段通りに生活を送れている。あの時、あの看護師さんを信じて良かったと心から思えた。私もそんな人達をひとりでも多く、元気に、夢を未来を持って欲しい。そう思い看護師という夢を持った。誰もが明るい未来へ。



いつかそんな看護師になりたい。

## 夢は持ち続けた方がいい

岐阜県恵那市◎伊藤<sup>いとう</sup>成華<sup>なりか</sup>（小5）

第16回「志」佳作

小学校五年生の時の私の夢は、保育士になることでした。夢の実現に向けて、エレクトーンの練習をしたり、折り紙でたくさん作品を作ったりしていました。

身近にいる人に憧れて、あんな人になりたいから頑張ろうと努力できるのはとても素敵なことだと思います。中学生になった今は環境が変わって視野も広がり、やってみたいことややりたいものは少し変わってきたけれど、それも自分が成長した証なのかなと思っています。

私が応募した時のテーマは「志」でした。夢の実現のために自分は今どんなことをするべきかエッセイに書きました。「夢」は変化し続けてもいいと思います。でも、常に向上心を持ち続けて成長するためには、やっぱり夢は持ち続けていたほうがいいと思います。私は、大人になっても常に夢に向かって努力する人でいたいのです。

## 東海大会出場を果たすために

愛知県田原市◎鈴木<sup>すずき</sup>温大<sup>はると</sup>（小6）

第17回「志」佳作

受賞してから二年半が経ちました。

今回お手紙をいただき、自分のエッセイを載せてもらった作品集を読み返しました。僕は中学三年生になりました。そして今でも陸上を続けています。中学に入ってからずっと目標にしていた東海大会出場の夢は叶い<sup>かな</sup>ませんでした。が、県の表彰台にこの三年間で三回上がることができました。そしてこの先の高校生活で、中学生生活で達成出来なかった東海大会出場の夢を果たすため、陸上の強い進学校に入学できるように、毎日勉強に励んでいます。

## こうかいをしないように

岐阜県恵那市◎西尾<sup>にしお</sup>流稀<sup>るき</sup>（小5）

第17回「志」佳作

「下田歌子賞」二十年おめでとうござい<sup>す</sup>ます。

作品を書いたときは、「これになりた<sup>い</sup>い！」というものが決まっていたけれど、

今は自分の夢をどうするか迷っています。受賞したことを聞いた時、初めての賞だったのでとてもうれしかったです。たくさん練習をして、完璧に暗記して、当日になった時とても緊張しました。でも、ミスなく読めて囀鳴協議会賞までいただくことが出来ました。今の夢はまだ決まっていませんが、こうかいをしないようにがんばりたいです。

## 最優秀賞を受賞して

岐阜県恵那市◎鈴木<sup>すずき</sup>空雅<sup>くうが</sup>（小6）

第18回「志」最優秀賞

最優秀賞を受賞して、たくさんの方の前で原稿を見ることができたことが、自分の自信となりました。その後、児童会執行部に挑戦することができました。今は中学生となり、また新しいことに挑戦していきたいです。

## 少し勉強をがんばっていた

岐阜県恵那市◎小林 誠之介（小5）  
第18回「志」優秀賞

文章を書くことが嫌いだった自分が、賞を取れる作文を書けるなんて思ってもみなかったで、とてもうれしかった。このことをきっかけに、作文のとりの自分になろうと少し勉強をがんばっていたことを思い出した。

## 参加できなかった授賞式

鹿児島県志布志市◎渡邊 喬香（小4）  
第18回「志」佳作

私が受賞した時の思い出は、ちょうど新型コロナが流行していて授賞式に参加できずとても残念でした。

お母さんのお腹にいた妹も元気に産まれてきて、一緒に遊べるくらい大きくなりました。

コロナが落ち着いたら、家族みんなで恵那市へ遊びに行つて、下田歌子さんについて学びたいです。楽しみにしています。

## 受賞作文を精神的な支えにして

鹿児島県南さつま市◎清水 怜咲（小6）  
第19回「志」最優秀賞

私がエッセイの部で最優秀賞をいただいた時、私の陸上に対する考えや思い、情熱が審査員の皆さんに伝わった事がとても嬉しかったです。そして、私のこれまでの努力とやってきた事が認められた気がしました。私の心が折れそうになった時、作文で書いた先輩の事を思い出しながら、「先輩に追いつきたい」と言う気持ちで頑張れています。そして、作文で書いた「日の丸を背負う選手になりたい」と言う夢を絶対に叶えるという気持ちが私の今の精神的支えになっています。こんなふうに私を奮立たせてくれる作文になりました。

また、私の兄が柔道で全国大会に出場しました。身近に努力して優勝を勝ち取った人がいる事でいつも刺激になっています。兄や先輩のように努力をして努力をして一位をとりたいです。次は、私が憧れられる人になりたいです。

## コラム

### 下田歌子賞の朗読コンクール

第七回から第十七回まで、表彰式後の記念イベントとしてエッセイの部に入選した小学生、中高生が、自ら作品を朗読する朗読コンクールを開催しました。七回から十三回までは、選考委員により、小学生の部、中高生の部それぞれ九作品を入選作として選考した後、朗読コンクールで「ふるさと先人大賞」（二名）、「ふるさと先人特別賞」（二名）、「嚶鳴協議会賞」（一名）、「ふるさと先人賞」（五名）を授与しました。十四回以降は、エッセイの評価と朗読の評価を分けるため、「大賞」（一名）、「優秀賞」（二三名）、「佳作」（五名）は選考委員の選考で授与。朗読コンクールでは、会場投票での上位順に各部門三名に「嚶鳴協議会賞」を授与しました。



第10回表彰状授与式で  
講評をする童門冬二選考委員長

## 受賞者からのメッセージ

\* 学年は受賞当時。複数回受賞者の場合は第10回以降で最初に受賞した時の学年です。

### 教えてもらった「ありがとう」

岡山県総社市◎しょうけんたろう庄憲太郎（高3）  
第10回「母」ふるさと先人太賞

この度は二十周年おめでとうございます。私が賞をいただいたのは約十年前のことです。私の作品は悪さばかりしてきた自分が周りに支えられていた事実に気づき、たくさん感謝を伝えたいけれども、やっぱりシンプルに「ありがとう」と伝えたい！そんな作品でした。母親にも迷惑をたくさんかけました。そんな私が今では親になっています。「子に感謝される側になった」「いえ違います。もっともっと多くの「ありがとう」に気づきました。「産まれてきてくれてありがとう」「産んでくれてありがとう」「側にいてくれてありがとう」「笑顔見してくれてありがとう」「そんな寝顔見

たら疲れもなくなる、ありがとう」「いつてらっしゃいと見送られたらいくらでも頑張れる、ありがとう」「いつも、いつもありがとう」「数えきれないほどのありがとうが身近にあるのだと、この受賞が私に教えてくれました。そしてまたこうしてその想いを伝えられる機会を与えてくださり「ありがとう」ございます。この十年間たくさん良いことも悪いこともありましたが、今もたくさんの方が苦しい思いをしているかと思えます。私もそうです。しかし私は良いも悪いもすべての出来事を含め、今の私の人生にもありがとうです。どこまでいっても「ありがとう」、それが私の本当に伝えたい言葉。

### 素敵な町とコンクール

岐阜県高山市◎かわかみ川上まなみ（高2）  
第10回「母」ふるさと先人賞  
第11回「ふるさと」ふるさと先人賞

下田歌子賞二十周年、おめでとうございます。

私は、高校三年間、下田歌子賞のエッセイに挑戦しました。このコンクールを通して、周りの人の生き方に目を向け、様々な

ことを考えることができました。

初めてエッセイに挑戦したときは、私にエッセイを書くことを勧めてくれた高校の恩師について書きました。恩師のパワフルさに憧れ、「私も教師を目指したい」と書いたことがきっかけで、教員を目指し、今、恩師と同じように国語の教師をしています。エッセイを書くことで、自分の思いを整理し、夢を持つことができました。

下田歌子賞の授賞式の際、初めて恵那市に伺い、文化と歴史のある伝統的であたたかな町だと感じました。岐阜県に、こんな素敵な町があること、素敵なエッセイと短歌のコンクールがあること、嬉しく思います。今後も、下田歌子賞が、たくさんの方がエッセイや短歌の創作に挑戦できるきっかけになり、たくさんの方の素敵な作品が集まりますように。

### 母から子へ

千葉県船橋市◎ながやまゆう永山優（中1）  
第10回「母」ふるさと先人賞

このたびは、下田歌子賞二十周年を迎えられた事、心からお慶び申し上げます。

私は「私と母とブランコ」という作品で第十回下田歌子賞エッセイの部ふるさと先人賞を受賞しました。アメリカ、ニュージャージー州の片田舎の小さな落ち葉だらけの公園で、日本人の母子が二人きりでブランコに揺られていました。父は、母と幼い私のその姿を決して忘れることはないだろうと、私に優しく話してくれました。そのときの出来事をエッセイでは綴りました。

下田歌子先生は「揺かごを動かす手が世界を動かす」という言葉を残しました。この言葉の本当の意味はわかりません。しかし、自分の経験を通して母から子へと、強くて優しい愛情を注いでいくことで、思いやりのある人間性を育み、そのことが素晴らしい世界を作り上げる基礎になるということではないかと思っています。

将来、私も母になる日が来るかもしれません。その時は私が私の母から注がれた愛情を私の子供に伝えたいと思います。そしていつか、あの小さな公園で、母と私と私の子供の三人でブランコに乗れたらいいなと。

## 自分を見つめる機会を与えてくれた

神奈川県川崎市◎鈴木里歩（中2）  
第11回「ふるさと」ふるさと先人特別賞  
第15回「志」優秀賞

この度は「下田歌子賞」二十周年おめでとうございます。

歌子先生が創立された学校に通っていたことをきっかけに、応募をするようになりました。初めは自分について書くことに抵抗があり、筆が進まないのもしばしば。夢を語るには少し恥ずかしい、でも現実もよく分からない。そんな時、ゆっくりと自分を見つめる機会を与えてくれたのが「下田歌子賞」でした。初めて賞をいただいたのは私が中学二年生の時です。ありのままの自分を認めてもらえたようで誇らしかったのを覚えています。授賞式では恵那の皆さまとお話する機会もあり、あの温かさに触れて幸せでした。

現在私は大学院に通い、歌子先生にも深く関わりのある『源氏物語』を研究しています。例えば、文章に触れる楽しさを教えてくれたきっかけのひとつがこの賞でした。年に一度、少し先の、少し前の、そして「いま」の自分を、見つめる。そんな機

会を与えてくれる「下田歌子賞」。あらためて二十周年おめでとうございます。

## 思いはかわらず

岐阜県恵那市◎沼田結太郎（中2）  
第15回「志」最優秀賞

エッセイ発表時と変わらぬ思いの中学生、今も農業関連の仕事を目指しています。この受賞によってかなり自分の思い、志が強くなった事は今でも明白に覚えています。今の夢への大きな土台になりました。とても感謝しています。

## 夢は変わっても書き続けたい

愛知県東海市◎立川花帆（中3）  
第15回「志」優秀賞

受賞当時、中学生だった私は、エッセイストという夢を持っていました。自分が書いた文章を読んだ人が「明日も頑張ろう」と思えるような、人の支えになる文章を書きたいと心から思っていました。

受賞から五年が経ち、今年で二十歳を迎えた私の今の夢は、悩みを抱えている人の



力になれる活動をすることです。実を言えば、少し前まで「一度宣言した夢は貫きたい。夢を頻繁に変えると、意志が弱いように格好悪い」と無意識に思っていました。ですが、私が五年前に宣言し貫くつもりだった夢は、変わりました。

この五年間で、社会は、感染症の流行など予想もしなかった展開を迎えました。社会に必要とされるもの、求められるものも大きく変化したと思います。その一方で私は、予想していなかった人生の道を選び、予想もしなかった場所で、予想できなかった人たちとの出会いを繰り返しました。予想できない変化を繰り返す人生の中で、自分が目指したいものや夢が変化していくことは、ごく自然なことなのかもしれない。そう考えるようになりました。

夢は変わっても、「文章を書くことが好き」という思いや「誰かの力になりたい」という願いは変わりません。今後も、どのような形であれ、文章を書き続けることができましたら幸いです。

最後に、公募という形で、自身の夢について考え文章にする機会を設けてくださった皆様へ感謝申し上げます。

## 管理栄養士を目指して

神奈川県川崎市◎西岡茉優（中1）  
第15回「志」佳作

受賞した時のエッセイでは、その当時中学一年生だった私は、管理栄養士の夢について語りました。食えることが好きで、料理をすることが好きなので、学校の献立を考えたりするのが楽しそうだなと思い管理栄養士になりたいなあと中学一年生のころからの夢でした。

中学一年生の当時は管理栄養士をするためにどういう勉強をするのかわからずにいきました。学年を重ねるにつれて将来のことについて考える機会が多くなり、管理栄養士になるためには理系に進まなければならないことがわかりました。高校三年生の今、中学一年生の時と夢は変わらないうです。ここまで夢が変わらず、志を持ってやってこれたのは、中学一年生の時に受賞したことがとても大きいです。

管理栄養士に一步でも近づけるよう中学、高校と六年間過ごしてきました。大学では管理栄養士専攻で栄養のことについて学び、立派な管理栄養士になりたいです。

また、今年度の下田歌子賞の作文でも六年間変わらない夢である管理栄養士のことについて語っているののでぜひ拝読していただけたら嬉しいです。

## 綴った言葉を心のコンパスに

東京都世田谷区◎安藤言羽（中1）  
第16回「志」優秀賞  
第17回「志」優秀賞

下田歌子賞二十周年おめでとうございます。私は、第十六回・第十七回とエッセイの部で優秀賞をいただきました。このような賞を二度もいただけたことを嬉しく思います。

この賞を通して、自分の思いを文章に表す力だけでなく、さらに朗読で伝える力を磨くことができました。授賞式の朗読では、他の受賞者の方々から刺激と学びを受けたことが印象に残っています。

改めて、人に伝えるということについて、深く考える貴重な機会となりました。

私は現在、高校二年生。進路選択などの場面で必ず思い出すのは、下田歌子賞のエッセイに綴った「志」や「夢」です。その頃に抱いた「志」や「夢」は、今も変わ



ることはありません。

この先のさまざまな節目に下田歌子賞を思い出し、綴った言葉を心のコンパスにして歩んでいきたいと思います。

## 地元愛は地元伝えてこそ

茨城県つくば市◎額<sup>こうけつ</sup> ほか(中3)

第16回「志」優秀賞  
第19回「志」最優秀賞

下田歌子賞二十周年おめでとうございます。私は過去二度の受賞をさせていただきました。ありがとうございました。

一度目は、地元の伝統文化・地歌舞伎の魅力伝えるべく綴った『繋ぎゆく宝』。歌舞伎にすべてを注ぎ、私の歌舞伎熱が最高潮にあった中三の夏。そんな中での受賞により、言葉を紡ぎ想いを伝えることに楽しさを感じるとともに、地歌舞伎や地元への愛が一層増した。歌舞伎にかけける想いはあの時から変わりはしない。伝えることの重みを心にとめ、地歌舞伎に関わり続け貢献していきたい。

「地歌舞伎という宝を未来へ繋ぎゆくために」

二度目は高校三年生。映画『ふるさとが

えり』を踏まえた上で、ふるさと恵那を想った『心のふるさと』。この年は私にとってこのエッセイを書くのにぴったりであった。きっかけは、ふと思い出し『ふるさとがえり』を見ていたこと。さらに春から大学進学で地元を離れる。加えて『ふるさとがえり』のテーマとなっている消防団だが、この年は父が地元の分団長であり消防団ラストイヤー。ふるさとを想うのに、消防団や父の偉大さを思い知るのに、これ以上ない絶好の機会であったわけだ。もうすぐ離れるという立場からふるさと恵那を見つめなおしたことは私の今につながっている。『心のふるさと恵那』への誓い」は、恵那を離れた今も、私のふるさととは間違いなく恵那で、帰るべき場所も恵那であると示してくれている。

「ふるさと恵那の平和を私も守る！」

下田歌子賞で私は毎度、地元をテーマにしてエッセイを書いている。下田歌子先生にゆかりのある恵那を中心に開催されることから、やはり最も伝えたい地元の方々に伝わりやすい環境にある。地元愛は地元伝えてこそだと思う。私を育ててくれた地元に感謝し、下田歌子先生のように高い志

を持つて邁進<sup>まいしん</sup>していきたい  
下田歌子賞の益々の発展をお祈りします。

## 自分と向き合う機会

愛知県東海市◎井筒<sup>いづつ</sup> 千尋<sup>ちひろ</sup>(中2)

第17回「志」優秀賞

「未来の私」についての作文を応募させていただきました。下田歌子賞を通じて、将来のことしっかり考えられていなかった私に自分と向き合う機会をいただけたと思っています。あの作文に綴った自分の決意や想いを大人になっても大事に持ち続けたいです。下田歌子賞がまた誰かのきっかけになることを願っております。ありがとうございました。

## 二十二世紀を迎えるために

神奈川県横浜市◎鈴木<sup>すずき</sup> 舞<sup>まい</sup>(中1)

第17回「志」佳作  
第18回「志」佳作

「下田歌子賞二十周年記念誌」発行おめでとうございます。

中学一年生で思いがけず「下田歌子賞」

を頂いた時、多くの皆様の前でどのように朗読すれば自分のメッセージが伝わるのか？などと考えながら、何度も何度も朗読の練習をしたことが懐かしく思い出されます。

私は中学三年間、結果的に「心に痛みを持つ人を助ける」という同じテーマで投稿することになりました。今、三年間のエッセイを読み返して感じたのは、中学一年生のエッセイで、偶然にも「戦争の悲惨さと平和の大切さ」に触れていたことです。ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まってから半年が経過し、戦争終結への道筋が見えない今日、日本を取り巻く近時の軍事状況や国連（安保理）の機能不全を目の当たりにして、日本では、「日本の安全保障体制」や「日本の国際社会に対する貢献」など、戦争と平和について様々な議論がなされています。終戦後七十七年を迎え、唯一の被爆国として平和憲法を堅持してきた日本は、改めて核の廃絶に向けた活動を強く推し進めるべきではないかと強く思っています。

第二章・第三章のエッセイでは、新型コロナウイルスの感染拡大に伴って生じた問

題（医療従事者に対する誹謗中傷<sup>いばらちゅうじょう</sup>など）を取り上げました。当時指摘したような差別や偏見はさすがになくなっていますが、今でも社会の中では、いわれない誹謗中傷によって精神的に傷ついている人は多いのではないのでしょうか。自分の意見を自由に言えることは民主主義の根幹ですが、発言にあたって個人の尊厳を傷つけないように配慮することは、最低限守るべきルールだと思います。

さて、「人生百年時代」と言われる今、私達はこの長い人生をどう生きたら良いのでしょうか？ 二十二世紀という未来を迎えるためには、紛争の暴力的解決を阻止するだけではなく、地球温暖化に象徴される地球規模での環境破壊の問題などを解決し、全ての人が健康で元気に活躍できる職場や社会、つまり、「サステイナブルな暮らし」を送ることが求められています。

私達が歩む人生は決して平たんではありませんが、高校生になり進路を考える上で「志」を持つことの大切さを改めて認識し、今後「志」を活かせる仕事につくために大学で専門的に学びたいと思っています。

## 最優秀賞を受賞して

東京都国分寺市◎長沼 咲穂<sup>ながぬま さほ</sup>（高一）  
第18回「志」最優秀賞

応募するエッセイを書いた時のこと、そして受賞した時のことははっきり覚えていきます。わたしが書いた『今を生きる』というエッセイは、一刻も早く将来像を定めなければと焦る自らに向けてのものでもありませんでした。続々と進路を決める周囲に流されなくてもいい、自分のペースでいい、大切なのは小さな目標を持ち続け日々生活すること。こう自分に言い聞かせるように書いたものだったため、それが最優秀賞に選ばれたという形で認められたのは、自信につながりました。考えが間違っていないのだと思えてから、落ち着いて進路を検討できるようにもなりました。この経験はわたしにとって、着実な一歩を踏み出せるきっかけになったと言えます。

もう一つ、思い出深い出来事があります。授賞式でゲストの初風緑さんに朗読を褒めていただいたのです。声に出して伝えることで作品としてより完成すると仰っていました。褒められたことは勿論<sup>もちろん</sup>、自分の思いが

伝わったことにも大きな喜びを覚えました。

賞に応募する機会を与えてくださった先生や、評価をしていただいた審査員の皆様に、心より感謝いたします。

最後になりましたが、下田歌子賞二十周年、おめでとうございます。

## 人を助けられる人物に

岐阜県恵那市◎阪上<sup>さかみ</sup>天心<sup>てん</sup>奏<sup>か</sup>（中1）

第18回「志」佳作

この受賞を原点とし、人を助けられるような人物になれるように努力していきたいと思っています。

## 温かい親切心を忘れずに

岐阜県恵那市◎糟谷<sup>かすや</sup>暁<sup>こう</sup>（中3）

第19回「志」佳作

僕の作品を見たと、商工会の方々をはじめ、様々な人にたくさん声をかけていただきました。僕が産まれ育った山岡町は、困っている人にすぐ手を差し伸べてくれる親切な人がいるということをアピール出来たと思います。そしてそれを、自分のことのように

喜んでくれる商工会のみなさんや地域の方がいて、僕の活躍を応援してくれていることを改めて知ることが出来ました。僕はこれから色々な人と出会い、いろんな経験をし、まだまだ様々なことを吸収して大人になっていきます。その中で、この山岡で受けた温かい親切心を忘れず、今出来ることを頑張っていきたいです。

## 歌子先生のふるさとを訪問して

東京都渋谷区◎丸山<sup>まるやま</sup>奈那子<sup>ななこ</sup>（中1）

第19回「志」佳作

「下田歌子賞二十周年」おめでとうございます。まず。

第十九回で佳作を頂きありがとうございます。残念ながら新型コロナ感染症の影響で授賞式には伺えませんでした。その後の学校行事で恵那市に伺うことができ、下田歌子先生をより身近に感じる事ができました。

豊かな自然に囲まれて大きな心が育まれたのだと感じました。

これからも、下田歌子先生のように志を胸に一步一步進んでいきたいと思っています。

## コラム

### 初風緑さんのトークショー

平成二十九（二〇一七）年度の第十五回と翌年度の第十六回の下田歌子賞表彰式記念イベントでは、実践女子学園出身の元宝塚歌劇団員・初風緑さんを特別ゲストとしてお招きしトークショーを開催しました。初風さんは、実践女子学園の生徒たちと、下田歌子先生を題材とした朗読劇「ことほぎ」を作り平成二十九年に最初の上演をされていました。実践女子学園創立百二十年、恵那市市制十五周年を迎えた平成三十一（二〇一九）年度の第十七回の表彰式では、実践女子学園の生徒と岩邑中学校の生徒のコラボによる「ことほぎ」岩村バージョンを上演していただきました。



第16回記念イベント。トークショーの最後に、  
下田歌子先生作の実践女子学園校歌を斉唱

## 受賞者からのメッセージ

\*複数回受賞者の場合は第10回以降で最初に受賞した回を基準に掲載。

## 先生も書くの？

岐阜県恵那市◎田口修  
第10回「母」最優秀賞

二〇一二年七月、私は小学校に勤務し四年生の子どもの担任をしていました。

夏休み中に取り組むとよい課題の一つとして「第十回下田歌子賞作品集」のチラシを教室で配っていた時に、ある児童が発した言葉が「先生も書くの？」でした。

咄嗟のことでしたが「先生は書かないが、君たちは書け」というわけにもいかず、平然を装って「書くに決まっとる」と少々虚勢を張って言ってしまいました。

夏休みが終わって、作品や課題などの提出の場面で、「先生も書くの？」と私に尋ねた児童が、またしても「書いた？」と尋ねてきました。私は逆に「君は書いたか？」

と尋ねると「書くわけないに。やってもやらなくても（やらなくても）いいことなら、やるわけないに！」と得意げに返事をしました。

「オイオイ……」と内心呆れましたが、「書いた？」と聞かれて「書いてない」と言うのも癪で、大変大人げない対応でしたが「書くに決まっとるに！」とその場しのぎの返事をしてしまいました。

今だから言えますが、実は私も書いていませんでした。しかし、「書くに決まっとる！」と言った以上は本当に書かないとアカンと思い、応募チラシを見たら、応募期限は九月初旬でまだ間に合ったので、その日から数日間、その時のテーマであった「母」について、何度も書き直しては推敲を重ね、期限に間に合うようにエッセイを書き上げて応募しました。

提出する前に、「ちゃんと書いたぞ！」ということを証明するために、子どもたちの前でエッセイを読みました。

詳しいことは覚えていませんが、エッセイを読み終えて、最後に一言「やってもやらなくてもいいことの中にこそ、やるべきことがある」ということを言った記憶がある

ります。

分不相応な賞をいただき少々恥ずかしい気が今でもしますが、「やってもやらなくてもいいことの中にこそ、やるべきことがある」は、今でも私の人生訓になっています。

## はじめて応募したエッセイ

神奈川県横浜市◎白澤健志  
第10回「母」佳作

下田歌子賞二十周年おめでとうございませう。

私が賞をいただいたのが第十回ですから、あれからちょうど倍の時間が流れたということになります。その間にも、多くの言葉が紡がれ、歴史が積み重ねられてきたのです。設立から今日まで賞を続けて来られた関係者の皆様に、敬意と感謝の念を抱かざるを得ません。ありがとうございます。

十年前の下田歌子賞は、私にとって初めての、エッセイ公募への応募でした。そしてまた、私にとって初めて、賞をいただく機会となりました。佳作、ということですから決して高い評価ということではなかつ



たのですが、それでも大変嬉しい受賞でした。何よりも、自分に大きな自信を与えてくださった賞でした。表彰式にも出席させていただき、恵那の皆様からとても温かい、ありがたい歓待をいただいたことが、昨日のように思い出されます。

それからの一年間、私は各種の公募エッセイに、次々と応募いたしました。その中には、賞をいただいたものも、ただけなかったものもあります。いずれの場合も、エッセイを書くことは、当時の私にとって大きな意味を持つことでした。自分を見つめ、見つけたものを言葉にして、誰かに伝える。そのこと自体がただ愉しく、時に難しく、その作業に没頭する一年間でした。その極みが、第四回「日本語大賞」に応募したエッセイ「義父の一言」で、最高位である文部科学大臣賞をいただくことへとつながっていきました。

その後は、本業の傍ら、いくつかの企業や団体から執筆の依頼を頂戴するようになりしました。いま、インターネットで自分の名前を検索すると、この十年間に自分が書いて来た文章のいくつかを目にする事ができます。でも、そのすべての最初の契

機を創って下さったのは、恵那の皆様、下田歌子賞に関わられてきたすべての皆様です。皆様どうもありがとうございます。引き続き遠方から下田歌子賞と恵那のご発展を祈念しております。

## 母九十四歳、今も好奇心を持ち続け

岐阜県恵那市◎西尾一美  
第10回「母」佳作

私が母のことを綴って十年が過ぎました。当時八十四歳で変換ミスの女王と言われながらメールを何とか打っていた母。その後、世の中はガラケーからスマホへ移行しました。ひ孫の動画を家族間でやり取りするのに、自分だけ好きな時に観ることが出来ず、母は歯痒い思いだったのでしょうか。スマホに変え孫、孫嫁さんのお世話になって、LINEを使えるようになりました。九十四歳好奇心を持ち続けています。そのことが私にとって何よりありがたく、幸せなことです。

この十年私の人生において、大きな出来事が続きました。振り返れば充実期だったと思います。子どもたち三人が独立してそ

れぞれに家庭を持つことが出来ました。少子化時代に今年（二〇二〇年）末までにと二人孫が誕生します。合計八人の孫、社会貢献度は高いです。今秋六十五歳になる私は生涯現役を目標にケアマネジャー業継続中です。ここ三年コロナ禍で、マスク生活。マスクがなくて手作りにはいまり、三十数枚作って友だちにプレゼントしたことさえ一つの思い出になりました。こんな時代が来るなんて、十年前には思いもよりませんでした。

それでも人間は遅く生きています。恵那の自然に癒されながら、孫たちの成長が大きな楽しみです。

十年前に私は母への想いをどんな風に書いたのだろうと読み返しました。にっこりしたり、胸が熱くなったり、その時々思いを綴っておくことの大切さを再確認できました。

どんな時代になってもこうして書き残し、この先の十年どんな時代になっていくのか誰にも分かりません。バアバはこんなことを考えて生きていたんだと、孫たちが読み返してくれるかもしれません。コロナ禍で思うように行動できなくても、心の中を

整理するためにも日記にペンを走らせています。どうか下田歌子賞も次の三十回記念誌に向けて歩まれることを願っています。最後に私にこんな機会をいただけたことに感謝します。

## 不思議な出会い

福岡県福岡市◎森千恵子  
第11回「ふるさと」最優秀賞

下田歌子賞二十周年記念おめでとうござ  
います。

私が、恵那市を訪問させていただいたのは十年前でした。初めて訪れた地は、美しい自然と歴史、それを愛する人々の心豊かな暮らしに溢れていました。式典当日は、郷土を愛する方たちが力を合わせて歓迎してくださいました。今でも当時の作品集を読み返しながら、楽しく幸せだった父との日々を、懐かしく思い出しています。

実は恵那市では、とても嬉しいことがありました。岐阜市在住の幼馴染の親友が、表彰式に出席してくれ、五十年振りで旧交を温めることができました。地元婦人手作りのお弁当も、仲良く頂きました。彼女

は「女城主」というお酒のファンで、毎年買いに訪れるとのこと。あちこち案内してもらい、下田歌子賞のお陰で、楽しい思い出ができました。

さらに驚くことがあったのです。帰りの電車で同席した東洋大学名誉教授吉田公平氏とお話が弾みました。先生が以前お住まいだった福岡市の住所が、我が家のすぐ近くだったので、とても驚きました。また買い物に行かれていたのが、私の夫の叔父の店で、知り合いだったと聞いて、二度ビックリでした。

なんとも不思議なこの出会いが嬉しくて、和やかな時間を過ごすことができました。

このような催しは作品だけではなく、人と人との交流やご縁、さらには、生きていく上での大きな心の糧となるようです。

また学生さんたちの素直で素晴らしい作品に接していると、未来を担う若人の逞しさを感じ、心強く嬉しさが募ります。

これからも、ますますのご盛況と、恵那市の歴史や原風景が末永く生き続けてくれることを願い、二十周年を心からお祝い申し上げます。ありがとうございます。

## 下田歌子賞で得たもの

新潟県佐渡市◎逸見修  
第11回「ふるさと」優秀賞  
第12回「ふるさと」佳作  
第13回「家族」佳作  
第15回「志」優秀賞  
第16回「志」最優秀賞

下田歌子賞を知ったのは確か第九回の時のことだ。たまたま応募した短歌が佳作に入った。あの時の嬉しさは今も忘れることが出来ない。次回はエッセイに挑戦したい。書くことがあまり得意ではなかったが短歌の受賞を機にまた夢が広がった。以来、下田歌子賞に応募するのが年中行事となった。

私が毎年応募し続けたのは、人間下田歌子をもっと知りたいという思いと募集テーマに魅力を感じたからだ。彼女の魅力は強固な信念をもち、夢を追い求め自己の生き方を生涯貫いたところにある。また彼女が生きた時代背景を考えると幾多の困難を乗り越え女子教育の進展に寄与した取り組みや教えを忘れてはならない。

その彼女の取り組みを顕彰した「下田歌子賞」に第十回からエッセイを応募して五回受賞することが出来た。中でも第十六回

の最優秀賞の受賞はこの上ない喜びとなった。授賞式を終え、大勢の皆さんの前で朗読も私の貴重な経験であり大切な思い出である。

下田歌子賞の募集テーマは自分の生まれ育ったふるさとのことや母のこと、さらに夢や志について深く考える機会となった。同時にこれからの私の生き方を見直すよい機会になった。

多くの人に夢や希望、今までの生き方を見直す機会を与えてくれた下田歌子賞は今年二十周年の節目を迎える。継続して行うことの難しさや苦勞を知っているだけに関係各位の今までのご尽力に感謝したい。下田歌子賞がこれからも続くことを切に願っている。

## 下田歌子賞廿周年記念に寄せて

岐阜県多治見市◎横田<sup>よこた</sup>文孝<sup>ふみたか</sup>  
第11回「ふるさと」優秀賞

還暦と退職を翌年に控え、その頃行きつけだった茶寮のマスターの勧めもあり、五十代最後の思い出にと応募したのが二〇一三年「第十一回下田歌子賞エッセイ

の部」だった。早いものであれから九年、今は来年古希を迎える身であるが又拙文を披露できる機会を得た。

一番の思い出は、受賞式後ホール壇上での紹介の際、自身の名を呼びとばされたことであろうか……。何かしら妙な予感があった。で、実際に起こると『へーやっぱり』と自身の予知能力の高さに納得したのを覚えている。

その後、受賞のおかげもあり、更に多くの方々との新たな出会いがあった。今では三月から十月の毎月第四土曜日に<sup>おんさいと</sup>音齋<sup>おんさいと</sup>処<sup>ちよ</sup>名義でヴァイナル・レコードを聴く会を街裏の古民家で開催している。この<sup>はるはる</sup>音齋<sup>おんさいと</sup>処<sup>ちよ</sup>には地元のみならず遙々名古屋からJRと明鉄とを乗り継いで訪れるファンもあり、今年で定期開催八年目を迎えている。

二〇一八年上半年放送のNHK朝の連続ドラマ『半分、青い。』のロケ地となり、放映中の連休には、東京・原宿と見紛うほどの人出を経験した。同年八月にはブロードキャスターのピーター・バラカン氏を<sup>音齋</sup>音齋<sup>おんさいと</sup>処<sup>ちよ</sup>に迎えて念願の出前DJを開催することが出来た。

その後の『ふくろう祭り』にも参加して

はいるが、COVID-19の影響で人出が望めない状況が続いているのは周知のとおりである。

とまあこんな具合に、私の<sup>か</sup>ふるさとがよい<sup>か</sup>は酸いも甘いも噛みしめながら今も順調に続いている。

### 「追伸」

あやうく書き忘れるところであった…。私の<sup>か</sup>ふるさとがよい<sup>か</sup>の影響なのか否かは知らぬが、二歳違いの弟が退職を機に、飯羽間の大きな古民家を買取り、大阪から移住してきたことを報告しておく。

### 今も楽しんで書いている

兵庫県加西市◎齋藤<sup>さいとう</sup>恒義<sup>つねよし</sup>  
第12回「ふるさと」最優秀賞  
第16回「志」佳作

入賞の連絡は、すぐには信じられませんでした。下田歌子賞 最優秀賞と記載された紙を家族みんなに確認して貰<sup>もら</sup>っても夢の中を浮遊し続けていました。恵那に招待され、豊かな風土と地元の人もふれあい、そして表彰式と、感激の時間を頂き、いまでも感謝しています。当時文章を書くことを諦めかけていた時でしたが、賞が刺激にな

り、いまもエッセイなど、楽しんで書いています。すべて下田歌子賞と恵那の満喫の機会をいただいたおかげです。本当にありがとうございます。下田歌子賞の更なるご発展をお祈り申し上げます。それでは。

## 「故郷の力」に今も励まされて

茨城県龍ケ崎市◎伊佐地 敦子  
第12回「ふるさと」優秀賞

このエッセイは、義父の急逝で、茨城から故郷の恵那へ帰り、思いがけず義母としばらく暮らした日々から生まれました。

哀しみの中で、故郷の方々がかけて下さったお悔みの声がまろやかに響いて、深く心を慰められました。ずっと忘れられません。

その時、わたしを取り巻いていたのは、青いアルプスを遠望する美しい田園。義父が残したサヤエンドウの畑。生前、義父は願っていました。「退職したら、お母ちゃんと温泉に行つてな。お握りを毎日、一つ握ってもらつて、畑に行つて、ラジオを聴いて……」その夢はどんなに素朴な願いだったことでしょう。それも義母の突然の

脳梗塞でかなわず、看護に心をくだき、やっと回復した頃に散ってしまった、義父の儂い命……。未だに切ないです。

あれから義母は故郷の方々の力に支えられて、自立の道を選びました。義母は驚くほど果敢でした。三年頑張り、その後はまた果敢に茨城へ移住して同居となりました。我慢も多かったでしょうに「ありがと、ありがと」が口癖で、一度も喧嘩したことがないのです。わたしの小さな誇りです。

今は近所のホームでお世話になつていますが、「新しい家族ができたの」と親戚にも話す姿に、やはり果敢に前向きの人生を歩む人なのだと感じ入りました。元気に長生きしてもらいたいです。

エッセイを書いた後のコロナ禍。故郷への思慕は、より温かく湧いています。実家の老いた両親の笑顔と重なって……。人の生や死への想いも深まるばかりです。書く大切なものに気づけて、また書きたくなりました。

余談ですが、表彰式の日、雪がちらつく中で、小学校の恩師、伊藤保直先生に再会しました。このホチョコ先生こそ、わたしたち大井小四年生に、生活を詩に書くよ

うに勧め、わたしに文章を綴る喜びを教えて下さった方です。あれから半世紀、今でも「あちゃん」と呼んで下さる先生に、この本をお見せできるとは、これ程うれしいことはありません。

## 復興を願い

宮城県石巻市◎鈴木 のり子  
第12回「ふるさと」優秀賞

十一年前。むごい震災後の日々からの、復興を願い「ふるさと」に応募をさせて頂きました。受賞の知らせは、本当に心を熱く奮い立たせてくれ、主催をされた皆様への感謝でいっぱいになりました。年月もあり、「ふるさと」の石巻市は新しい橋や、新しい建物、そして震災で犠牲になられた方々の、慰霊の公園もできました。

昨今、豪雨の被害にあわれたり、コロナ禍の中にあり、苦しい日々を過ごされておられる皆様に、心からお見舞いを申し上げます。被災地に住む者として、応援していただいた皆様に、何か私でも、お手伝いが出来ることはないだろうか、と思う日々の中にいます。



皆様のご健康をお祈り申し上げています。

## 沖繩に住む母と二緒に

静岡県長泉町◎内藤 道代

第12回「ふるさと」優秀賞

第15回「志」佳作

受賞の手紙を頂いた時、一番に報告したのは沖繩に住む母でした。私を育てくれた沖繩の空と海とそこに住む家族や友人、結婚してできた新しい家族に感謝の想いでいっぱいになりました。授賞式には一度も訪れたことのない岐阜県に母を連れて行きたいと思いました。沖繩から姉と一緒にやって来た母と名古屋で合流し恵那市へと向かいました。久しぶりに会う母は歩くのが遅く老いを感じ、何とも言えない気持ちになったのを覚えています。

車窓から見える景色に感動していた母親が、私にもたれかかってきました。疲れたのかと思えば母を見ると、顔色が悪くぐったりして冷や汗をかき、意識がもうろうとしていました。初めての土地、電車の中であとのくらいで目的地に着くのかさえ分からずおろおろしていました。

その時、向かいの看護師さんが声をかけて下さいました。「ここからだ」と〇〇病院が近いです」「非常ボタンを押して下さい」と言っして下さいました。非常ボタンがどこにあるかさえわからない私と姉に代わり非常ボタンを押して下さいました。予期しない出来事で予定が狂ってしまったであろう方々も、電車を緊急停止させ申し訳ない気持ちで頭を下げた姉と私に、会釈や「お大事に」と優しい気持ちを返してくれました。

沖繩には「結まーる」という言葉があり、私はその言葉のあったかい響きと、その中に込められた人が人を思いやる優しさが好きです。思いがけずそこで「結まーる」を感じるものが出来ました。人は優しさや思いやりで繋がっていることを信じこれからも生きていきたいと思えますし、コロナ禍で人と人との距離が空いたとしても心の距離は空けずにいられたらと思う思います。

最後に、授賞式の際にお世話になった同じ電車に乗った皆さん、会場のスタッフの皆さん、私の作品を選んで頂き、恵那市を訪れたことで、「結まーる」が実感できたことへ感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

うございました。皆様のご健康とご発展をお祈りして、私の受賞の言葉とさせて頂きます。

## 綾錦はないけれど

愛知県武豊町◎臼木 巍

第12回「ふるさと」佳作

「下田歌子賞二十周年記念」で、何かメッセージを書くように、と実行委員会から連絡があった。

私が受賞したのは「第十二回」で、佳作だった。その作品集を高く積まれた本の山から一時間かけて、見つけ出した。もうあれから八年経過していることを知った。

その時の公募タイトルが「ふるさと」だった。私は終戦直前の満州生まれで、正確には日本に「ふるさと」はない。しかし、心の忘れがたい故郷があった。

北海道に「月形」という小さな町がある。町の端から叫べば全てに聞こえるような所だ。幼少時の三年余の生活は、心のふるさととなった。わが家に幸せの天使が団体で住んでいた。母に最高の笑顔があった頃だ。しかし、三年余で終わった。父の勤める

炭鉱の倒産があり、これが三度目の事。生涯全ての「幸せ量」を使い切ったような日々が続いた。今になれば、人生はこんなものかと達観できるが……。

六十年経過して「月形」の町を訪れた。少しも変わらぬ往時の面影があった。まるで変化のない時間の流れの不思議さにすっぽりと埋まり、物語の中にいる気がした。ふるさとに酔いしれた。母の胸にいるような安堵があった。広大な草原に寝転がった。ふと下田歌子の「綾錦着てかへらずば三国山——」の歌を思い出した。わが家は、私はこうした遠大な志でふるさとを後にしたことは一度もない。再びの訪れはないと、覚悟した。ふるさとも捨てたのだ。ふるさとはそれを捨て去った者には錦は飾りにくい。

下田歌子の志を、正直義ましく思った。人にはそれぞれの生き方、人生がある。ここまでの行路を夢中で歩んで来た事は、『綾錦』はなくても満足すべきと、あの幸せの天使は、そっと私に囁いてくれた。

ふるさとの暖かさを知った歓びは大きい。

## 「ふるさと」を守り続けたい

和歌山県紀の川市◎井戸崎真帆  
第12回「ふるさと」囀鳴協議会賞

この度、このような形で作品と向き合う機会を頂けたこと、誠に感謝申し上げます。以前の「ふるさと」をテーマに作品を書いた時、私は二十一歳でした。今回メッセージを送らせて頂くにあたり、あの頃書いた作品を再度読み返し、大変懐かしい思いと、現在の自分について考えさせられました。この八年間、とてもたくさん事が起きました。多くの経験をし、多くの学びがありました。悩むことも多く、苦しく悲しい日々もありました。私の周りも様々に変化していく中で、やはり「ふるさと」だけはいつも変わらずそこにあって、温かい人たちは変わらないということは確かだと改めて思います。以前の作品の中に書いた、駄菓子屋さんやコンビニすらも今はなくなっでしまいました。鳥のさえずりが聞こえ、川は静かに流れて、道で会えば挨拶が交わされる、そんな「ふるさと」が私は今でも大好きです。思い出の橋を今では車で通るし、かなくなりましたが、ふと学生時代の青春

を思い出しては、なんだか温かい気持ちになれます。

今、世の中は終わりの見えないウィルスに悩まされ、争いの続く国があり、人の人生を奪ったり、傷つけたり、様々な悲しいニュースが日々報道されています。そんな中で私は、今日があるということは当たり前のことではなく、時間を共にできる、話ができる、喧嘩ができる、笑い合える、それがとても大切なことであると改めて強く感じています。そして、まず、家族、友人、知人、私の大切な人たちや「ふるさと」のために、感謝を込めて恩返しをしたいと思うようになりました。

『人が、おもしろい！楽しい！と思える場をつくる』それが今の私の夢です。どんなことがあってもここに来れば心が少し楽になる、救われるというような居場所をつくりたいです。そして、どんなに月日が流れても変わらない「ふるさと」を守り続けられたらと思います。

## 思いがけず入賞して

岐阜県土岐市◎木下 宏明  
第13回「家族」優秀賞

下田歌子賞に応募したのはかなり前の話になりますが、思いがけず入賞の一報をいただいたときは本当にうれしかったのを覚えています。それまでも、時折、詩を書いたり日常の一コマを呟いたりといったことはやっていましたが、その受賞によって「書き続けてもいいんだよ」と背中を押していただいたような気がしています。おかげで今も細々とですが描き続けています。

また恵那市とは比較的近くに住んでいることもあって、授賞式にも参加させていただいたのですが、直接、審査員の方々のご講評をいただく機会に恵まれたのは何よりでした。それから、地域のこども達のちょっとした緊張感の伴った凛々しい顔やとても初々しい笑顔に触れることが出来たのもとても印象に残る嬉しい出来事でした。

これからも、地域に根差した文化を豊かに創り出していく取り組みを、引き続き押し進めていただけることを心から願っています。

このたびは本当におめでとうございました。

## 受賞作を子育ての核にして

北海道札幌市◎布目 欣生  
第13回「家族」佳作

「下田歌子賞」が二十周年を迎えられたこと、おめでとうございます。その素晴らしい趣旨の賞に参加できたことを、嬉しく思っています。

あれから六年が経ち、エッセイに出てきた長男も八歳になりました。今はちょうど夏休みで、汗だくになって公園を走り回ったり、自由研究に頭を悩ませたりしながら、毎日を楽しんでいます。あの時はいなかった次男も家族に加わり、ますます賑やかになっています。

子どもたちの成長は早いもので、ここから十数年の間に、進学や就職など人生の節目を次々に迎えることになります。その時に、自分が両親からしてもらったことを繋げたいという気持ちがあります。強くなくなりました。親父と自分がしたように、一緒に酒を飲みながら、人生を考えていく。そ

んな時間をもてたらと思います。

長男は、どんどん大きくなるけれど、まだ赤ちゃんのような時もあり、そのアンバランスさが微笑ましいです。早く成長してほしい気持ちと、まだ幼児でいてほしい気持ちの両方が相まっています。だからこそ今という時間を大切にしたいです。

あの時、賞に応募し、思いがけず佳作に選んでいただけたことを通して、親からもらった思いを子に繋げるというのが、自分の子育ての核になった気がします。世の中が落ち着かない現在においても、親が子思い、子が親を慕う気持ちに勝るものはないと思うからです。それに気付くきっかけをいただけたことを感謝いたします。

将来、子どもたちにも応募を勧めてみます。親子で同じテーマについて考えて書く。そんな素敵な時間を、いつかもてたらと思います。「下田歌子賞」が、今後ますます発展していくことを切に願っています。

## 人間三人、猫六匹

東京都渋谷区◎清水<sup>しみず</sup>文子<sup>ふみこ</sup>  
第13回「家族」 嚶鳴協議会賞

「大きな未来型家族で行こう」で「嚶鳴協議会賞」をいただいてから、早くも七年たちました。

友達同士で家族を作り、猫と一緒に楽しく住む――。モデルとなった娘たち三人も四十代後半の働き盛りになりました。このほど二度目のリフォームが完了し、三人の人間たちと六匹の猫たちが快適な空間でのびのびと暮らしています。

娘たちがこの暮らしを始めるにあたっては、親として応援するものの、「疑似家族で果たしてうまくいくのかな」とか、「お金の負担でケンカしないかしら」とか、外野の心配は絶えなかったのですが、今日まで、実にうまくやっています。

ただ、ローンを組むときは苦労しています。なぜなら、銀行は他人同士に貸し付けを行わないからです。ですからせつせと三人で積立貯金をし、目標額に達したところで、待望のリフォームとなりました。

日常生活では、誰かが仕事で忙しいと、

暇な人がすかさず食事を作ってフォローする……、見事な連携プレーでやっています。実の家族だと、甘えも出るので、かえっていいのかもしれないと、この頃では安心して見えています。

残念なのは、孫が抱けないという事ぐらいでしょうか。これも、近所に住むもう一人の娘の友人一家六人を見守ることで解決です。一家がコロナにかかった時には、せつせとご飯を作って玄関先まで運びました。この家族の「孫もどき」四人は、暮らしに夢を添えてくれます。どんな大人への道を歩んでいくのでしょうか。見守っていくのが、私たち夫婦の大きな楽しみです。

## 朗読の思い出

愛知県尾張旭市◎浅野<sup>あさの</sup>憲治<sup>けんじ</sup>  
第14回「家族」 最優秀賞  
第18回「志」 優秀賞

表彰式は岩村の公民館だったと記憶しています。当時、NHKの大河ドラマは「女城主」を題材にっていて、それは、てっきり岩村城主の事かと思っていたら、彦根の城主の事で、残念でした。その後、岩村の町を故郷にした朝のドラマが放送された

記憶しています。

表彰式では、自分の作品を読むことを求められました。私は、受賞作品を読むと、必ず涙ぐんでしまい、あの時も涙が出て、堪えることが出来なくて、本当に困ってしまったことも覚えています。そして、小中学生の受賞者が原稿を見ることなく、受賞作品を読み上げていることには、本当に驚かされました。

第十八回の表彰式はコロナ感染が怖くて、残念ながら欠席させていただきました。

## 両親と参加した特別な日

滋賀県野洲市◎田中<sup>たなか</sup>裕子<sup>ひろこ</sup>  
第14回「家族」 優秀賞

下田歌子賞二十周年、誠におめでとうございませう。

私は、十四回のテーマ「家族」のエッセイの部で優秀賞をいただきました。表彰式で自分にスポットライトが当たった時の高揚とした気持ちを今でもはつきりと覚えています。そして、この日は私の誕生日でもあります。本当に特別な日となりました。エッセイでは、筋ジストロフィーという病気を



抱えながら生きていく私をいつも支えてくれる両親への感謝の気持ちをいたためました。受賞の知らせをいただいたときは、とてもうれしかったです。

表彰式には、両親も参加してくれました。会場が大きく、とても立派な表彰式でびっくりしました。両親も喜んでくれました。現在、私の病気も進行し、できないことも増えました。両親も年をとり、一緒に過ごせる時間も少なくなってきました。あの時、下田歌子賞で優秀賞をいただき、両親を招待できたことは、とても良い思い出です。実行委員会の方々、とても親切で、私たちを温かくもてなしてくれました。ありがとうございました。この下田歌子賞がいつでも続くこと、心より祈念しております。

## パリンピックに出場した孫

埼玉県所沢市◎佐野 孝雄<sup>さの たかお</sup>  
第14回「家族」佳作

孫が失明の危機にあい、七転八倒の日々でしたが、その後、運良く東京パリンピックで視覚障害者の競技に出場することができました。今はパリに向けて精進して

います。

## 互いの夢を尊重し応援し合える社会に

大阪府大阪市◎稲毛 久美子<sup>いなげ くみこ</sup>  
第15回「志」最優秀賞

「下田歌子賞」二十周年、誠におめでとうございます。二十年と言う歴史を刻まれていること自体が素晴らしい、その歴史の一部に名を残すことができとても光栄に思います。

第十五回下田歌子賞で最優秀賞を受賞した時の心境は、「まさか!」という驚きとともに、純粹に嬉しいという気持ちでいっぱいになりました。第十五回のテーマは、「志」でした。エッセイを綴る中で、改めて自身の「志」は何なのかと自己を見つめ直すことができ、今いる自分の環境への感謝の気持ちとともに、ここからまた踏み張って頑張るぞ!との決意を持つことができました。

記念すべき第二十回下田歌子賞のテーマは、「夢」と聞くと、青臭さを感じる人もいるかもしれません。しかし、私は、夢を持ち、夢をどこまでも追いかけ、夢達

成に向けて努力する人こそ最高にかっこいいと思います。互いの夢を尊重し合い、応援し合える社会になっていけばいいな、そんな願いを持って、今回メッセージを寄せさせていただきました。

「下田歌子賞」が、これからもずっと続いていけるよう、陰ながら応援しております。二十周年、本当におめでとうございませす!

## 自分が変わるきっかけに

神奈川県大和市◎柏木 貴章<sup>かしわざ たかあき</sup>  
第15回「志」佳作

誰にも当てはまる訳ではないのは存じてはおりますが、人間とはかくも不思議な怠惰な生き物だと私は思っています。そのため、やりたい事もやらなければいけない事も、先送りになってしまう私のような怠惰な人間にとって、「志」というテーマを提供して下さった、下田歌子賞には感謝の言葉しかありません。今まで、漠然としか考えてこなかった、私の「志」を文章にすることで、自分の考えを可視化することができたからであります。事実、「あつ、私って

## 「夢は叶う<sup>かな</sup>」と信じて

岐阜県恵那市◎秋田<sup>あきた</sup>桃子<sup>ももこ</sup>  
第16回 玉志 優秀賞

こんなことを考えていたんだ」という発見がいくつもあり、自分自身の考えを振り返るいい機会となりました。ですから……もし何かしてみたいなと思っていながらも、何をどうすべきか分からないと思っている人は、誰もが一度は考えたことがあるであろう自分の「志」を、文章にしてみたいかがでしようか？ 自分が変わるいいきっかけになるかもしれませんよ。下田歌子賞の

「志」は、きっとそんなあなたの背中を押してくれると思います。下田歌子賞は誰でも参加可能な門戸が広く開かれた賞だと、私は思っています。これからも、一人でも多くの人たちの背中を優しくそっと押し続ける賞としてあり続けて欲しいと願っています。

今年二十年目を迎えた下田歌子賞の益々の発展を願い、私からのお祝いの言葉とさせて頂きます。

二十周年おめでとうございます。

コツコツと地道に続く活動のおかげで、こうした誌面での交流と自身の受賞作品を振り返る機会をいただき、ありがとうございます。

下田歌子先生の故郷、岩村城下町に移住して十年が経ち、益々と先人の知恵を活かしたまちづくりの素晴らしさを実感しています。

四年前の下田歌子賞エッセイの部で優秀賞をいただいた作品のタイトルは「心の故郷との出会い」志せば夢は叶う<sup>かな</sup>」でした。

当時から思えば、世間は突然の流行病により私たちの生活様式も変わらざるを得ませんでした。人生における大切な時期に行動を制限され、悔しい思いをした方が大勢みえたことでしょう。

最近、やっと少しずつ行動制限も緩やかになり、新しい日常を受け入れられるようになってきました。

「時間は戻らない」という思いから、先日

は思い切って、久々に海外の風を肌で感じてきたのですが、やはり、自分の目で見て、耳で聞き、感じ、考えることは大切です。そうすれば、誰のせいにもせず行動出来ることでしょう。

歌子先生のように、強い意志があれば「夢は叶う」と信じている私です。

この土地のご縁を活かし、「日本人が大切にしてきた教え」を未来と世界に伝える拠点としよう！と決意した四年前。それからは、東京から本社を移転された仲間のおかげもあって、国内外から沢山の人が岩村城下町を訪れご縁を繋いでくれました。

同じような心意気の仲間もできました。

新しい家族まで出来ました！

夢を叶える条件に、志とともに「仲間」も必要不可欠だということを改めて実感しています。

与えられた環境や能力を存分に生かすことで未来が創られるのだとしたら、今この一瞬に感謝し歩み続けたいと思います。

先人の教えが、どうぞこれからも多くの方に生かされますように。

## 誰かを笑顔にできるように

埼玉県所沢市◎小松崎<sup>こまつざき</sup>有美<sup>ゆみ</sup>  
第16回「志」優秀賞

この度は二十周年記念おめでとうござい  
ます。エッセイが賞に入ったと聞いた時は  
うれしくて、何も考えられなかったのを覚  
えています。コロナ禍となつて生活が一変  
してしまつた昨今。それでも皆様のエッセ  
イを読むと自然とチカラが湧いてきます。  
私もまたいい作品が書けるように、誰かを  
笑顔にできるように、日々前向きに過ごし  
ていきたいと思っています。

## 忘れない五平餅の味

愛知県名古屋<sup>なごり</sup>市◎森典子<sup>のりこ</sup>  
第16回「志」優秀賞

下田歌子賞二十周年おめでとうございま  
す。下田歌子賞のエッセイの部に応募しよ  
うと思つたきっかけは、「志」というテー  
マだったからです。

保育と言う仕事に長年携わつてきたもの  
の、自分がこの仕事にどんな志で臨んでい  
るのか、一度立ち止まつて書いてみよう

思つたからです。

その当時、定年まで数年となり、定年後  
の自分の夢についても考えるようになりま  
した。「いつか文章を書いて食べていき  
たい」そんな気持ちが芽生えたのもその時期  
でした。

賞に作品を出したことも忘れてしまつて  
いた頃、受賞の知らせをいただきました。  
以前より岩村には佐藤一齊のことで何度か  
訪れてはいたのですが、その地で下田歌子  
賞をいただくことになるとは夢にも思つて  
いませんでした。

授賞式当日は、地元的女性陣の方々の出  
して下さつた美味しい五平餅を食べたこと  
を覚えています。五平餅の美味しさもさる  
ことながら、岩村の人々の温かさに触れ、  
下田歌子はここで育つたからこそ、大きな  
志を持つて故郷を後にし、再び錦を飾るこ  
とができたように思えました。

そして、授賞式の舞台では、小中学校の  
部の作品が学生自身で読み上げられまし  
た。その姿はまるで岩村を出ていくときの  
下田歌子のように立派に見えました。

受賞をきっかけに下田歌子の生き方に興  
味を持ち、実践女子大学にもおとずれ、大

学内を案内してもらい明治と新しい時代の  
歴史についてもたくさん学びました。

今では女子も教育を受けることが当たり  
前の時代ですが、それは当時の先人たちの  
努力の結果であることを知ることになりま  
した。

そして、この賞で初めて第三者に自分の  
書いたものを認めていただき、自信を持つ  
ことができ、自分の夢を「書くこと」に決  
めました。これからも書くことを諦めず、  
錦を飾れるまで頑張つた下田歌子を見習  
い、努力していきたいと思っています。

## 「演劇」その後

岐阜県恵那市◎磯部彰<sup>いそべ あきひろ</sup>  
第16回「志」佳作

小学校二年で終戦を迎えた私のクラスに  
は父親のいない家庭が多かった。父は教員  
であつたために出兵が後になり、私は両親  
の元で少年時代を送ることが出来た。

父親のいない家庭では中卒で社会へ出る  
者も多かった。また殆ど<sup>ほとん</sup>どの子供が高卒で就  
職する中で、大学まで行けた私は幸運で  
あつた。

エッセイは「演劇大好き」で佳作をいただいた。大学まで行けたことが演劇人生を送ることが出来たことにもつながっている。

私が演劇を始めたのは、高校一年生。それから大学時代、教師となつてからはクラブ顧問として管理職になる前の年まで続けたので、合計三十五年、人生の半分は演劇をしていたことになる。

大学での演劇活動は、安保闘争の頃と重なり、左翼運動と見られ、平坦なものではなかった。そうではないという事を証明するために意地でやっていったようなところもある。

教師となつてからは、高校演劇がそういう目で見られないよう質の高いものを目ざした。

演劇とは生活のお手本であり、問題提起である。一人の人間がすべての生活分野を経験することは出来ない。難儀な問題にぶつかったとき参考にするのが本であり、演劇である。先人の書いた本や、上演された演劇の中に必ず解決策がある、というのが私の主張である。

五十九歳の時、ユーハイム主催の「ゲー

テ詩朗読コンテスト」で百五人中、三十人に残り、東京・千駄ヶ谷の津田塾大学ホールで朗読。七十五歳、「久留島武彦顕彰全国語りべ大会」（大分県玖珠町教育委員会主催）へ十八人中、七人に残り、玖珠町ホールで自作の童話「夢屋さん」を語ったことがある（自慢になつてしまいました）。入賞したのを喜んでくれたのは、私とかかわった元演劇部員、演劇関係者である。エッセイ採用、ありがとうございました。

## 校長の卒業式

千葉県袖ヶ浦市◎武藤光夫  
第16回「志」佳作

憧れの教師になつて数年が経ったある日のこと、母が私に向かってこう言いました。「お前が校長になる姿を、この目で見るまでは、私は絶対に死ねない!」と。

しかしそんな日が来ることを楽しみにしてきた母も、迫り来る病には勝てず、私が校長に就任することになる九ヶ月前に、天国へと召されて行つてしまいました。

ですから、無念のうちに天国へと召されてしまった母には、どうしても私が校長に

なつた姿を見て欲しくて、校長として初めて臨んだ入学式は勿論のこと、最後の卒業式でも、母の写真を傍らにそっと置いて、式に臨んだものでした。

最後の卒業式が終わつて数日後の修了式のことでした。校長として最後の仕事を終え、ホッとひと息ついた時、体育館後方の扉が静かに開くと、卒業していったはずの生徒たちが、静かに入場してきたのです。そして、ある女子生徒がステージ横のマイクの前までやって来ると、全校生徒に向かってこう言つたのです。

「今から、これまで私たちを一番愛してくださつた武藤校長先生の卒業式を始めます!」と。それは予想すらしていなかつたことでしたので、それを耳にした時、私は溢れる涙をどうすることも出来なくなつてしまいました。

生徒代表からのお礼の言葉や、全校生徒からの手紙をいただいた後は、生徒手づくりの思い出のDVDの放映、そして最後には卒業証書まで手渡されると、体育館の後方にはいつの間にかいらしたのか多くの保護者の皆様も加わつて、私の大好きだった合唱曲に送られながら、私は夢のような教職



生活の幕を閉じることが出来ました。

涙が止めどなく流れ続けたあの時、追いかけてきた母の背中に、ほんの少しだけ近づけたような気がしたものでした。

夢は変わったけれど……

大阪府大阪市◎ひろた やすゆき廣田 泰行

第17回「志」最優秀賞

下田歌子賞二十周年、誠におめでとうございます。同賞は、私の生涯で初めて何かを受賞させて頂いたという思い出深いものです。授賞式で多くの人の前で話をするという経験が出来たことは大変自信になりました。

この賞を頂いてから文字を書くという仕事を頂いたりもしました。コロナ禍もあり、その時描いた夢は消えましたが、今は新たな夢に向かい、その夢を育んでいっています。夢を持つということは、日々を明るく楽しく生き生きとさせてくれるものだと思います。私の今の夢は、宇宙の墨絵師ANN Y O・HIROTAとして、「宇宙盛福」をテーマに掲げ、世界中の人々、そして宇宙に住まう人々にまで愛を届けられるよう

なそんな存在になることです。

下田歌子賞は、夢を持って日々努力されている方にスポットライトを当てて頂ける稀有な存在です。これからも素晴らしい人財を発掘されていくと思います。次は、二十五周年、三十周年と進化されていく事を心より願っております。ありがとうございます。

賞状は父の遺影の横に

福岡県朝倉市◎かんろうじ みちこ感王寺 美智子

第17回「志」優秀賞

——「志」その言葉 その姿から 学んだあなたの 人生の財産を これからも大切に——

そう書かれた賞状。我が家の下田歌子先生は、本棚の上にいらつしやる。ピシッとした、そのお姿。私が、だらしくしている、手に持っている扇子が、ピシッと鳴りそうな気がし、時々、ひとりで「すいませーん」と謝ってしまう。その度に、その隣に置かれた、父の写真が「すいませんね、怠け者の娘で」と笑っているように感じる。父の写真の横に、賞状を飾ったのは、父

が、同じ教育者であったからだ。父は、へき地教育に尽力を注いだ。陸の孤島と言われたほど、雪深く、自殺者が多かった地域の子供たちに、大学へ行って学ぶことを、熱心に勧めた。

進学率が上がり、自殺者が減った……。

そんな父であったから、この受賞を、天国から落ちそうなほどに、飛び上がり、喜んでいるに違いない。ならば、賞状は、父の横に置こう。心ゆくまで、歌子先生と、教育論を語り合うために。

そう思ったのだ。

父さん、私、これを書きながら、今更ながら、気づきました。

この賞は、人の為なる志を持ち、強い信念で、それを実行し続けた、あなたへの賞でもあるということ。そして、その歩み行く背中を示し、その足跡で導いてくださる、実践ある教育を、娘の私にもしてくださいました。

下田歌子先生。

私から父へ、この賞状を、少しことばを変えて、読みあげさせて頂くことを、お許してください。

——父さん、あなたの「志」その言葉か

ら その姿から 学んだ財産を これからも大切にしてください――

下田歌子先生、あらためて、ありがとうございます。

この学びを、継ぎ行く為に、がんばっていきますので、これからも、どうぞよろしくお願いします。

## 人生を生きる自信と励み

岐阜県羽島市◎一柳博之

第17回「志」佳作

生まれつき障害のある娘に対する親としての思い、それを見守り支え続ける妻と息子、そんな家族全員の姿をエピソードをふまえ、飾ることなくありのままを表現した作品でした。私が特に伝えたかったのは、タイトルのとおり障害は厳しい現実ではあるけれど、一方ではそれによってもたらされる幸福もある、ということです。とりわけ優しい心を育んでくれた息子の成長がそれを教えてくれました。娘はその後成人し、今も近くの施設に通っています。当時大学生だった息子は卒業して社会人となりました。今も変わらず妹を支え続ける優し

い兄でいてくれます。この作品を書いたのは、娘の障害を通して得た体験を伝えることで、自分自身の今後の決意を新たにするとともに、同じ障害のある子供を持つ人たちへの励みになれば、という思いからでした。運よく入選させていただいたことは、私自身の今後の人生を生きる自信と励みになり、改めて感謝を申し上げたいと思います。

## 志を持つことの大切さ

愛知県東海市◎加藤久子

第17回「志」佳作

「志」とは長く持ち続けることで、いかなる困難にも打ち勝って夢は必ず叶えられると信じ努力を重ね続けることが大切です。志という文字から頂く力強さに励まされた感がありました。人生には様々なことがありますでしたが十五歳の時に決めたいつかきと学びの日が来ることを志として生き、五十七歳の時に定時制夜学生になった日の喜びは格別のことで今も昨日のこのように思い出されます。

志を持ち続けたお陰で今も充実した日々

を楽しく送れていると思います。人は生きている限り勉強であるとその頃実感しています。今は五十五歳の頃に始めた俳句に力を注いでいるところです。句会には若い人たちも大勢出席されます。句の道も奥が深く大変です。

句作りは瞬発力とひらめきが必要とされます。若い方々の感性豊かな作品に出会う時、大いに刺激を受け大いに学んでいる日が続いている今日この頃です。人の世の大半は苦しいことが多いと思われませんが私は一つの良いことに努力を惜しまず、八十路の真つ只中(ただなか)にいます。夜学生の頃注いだ学びの心をいつまでも持ち続けたいと思います。

以前は吟行句会にも各地へ出向き作品を競い合ったものです、しかし今は新型コロナウイルスの蔓延で開催されることもなく、とても残念ですが再開される日が必ず来ます。安心して出かけられる日に備えて心の準備と健康な身体作りに努めます。趣味を持つことで多くの友人と知り会えることが出来ました。歳時記と句帳、鉛筆、老眼鏡、おにぎり持参で気軽に出かけられる日が来るとかたく信じて待ち続けます。

好きなことをしていると自然に笑顔がこ

ばれます。元氣も湧き出して来ます。人生百年時代、時間は十分あります。かけがえない一度きりの人生、健康に留意し学びの時間を大切に老後を満喫したい気持ちです。

## 学問を通して若い世代に

千葉県千葉市◎東島日出夫  
第18回「志」優秀賞

下田歌子賞二十周年記念、おめでとうございませう。

私は、第十八回エッセイの部におきまして、この栄えある賞に入賞させていただきました。忘れもしません。二〇二〇年十一月五日、当時ご担当であつた鈴木様から入賞の連絡をいただいた時は、嬉しかったです。感激しました。

私は、以前からの夢であつた大学の教員に、還暦を過ぎてからやっと就くことができたことの経緯を、これまでの人生を踏まえ綴らせていただきました。大学教員への思いが強かったことから、その感情を伝えるべく、手書きの原稿にて応募させていただきました。

折角入賞させていただいたのですから、

表彰式には出席させていただきたいと思つておりました。このような栄誉なことは、一生に一度あるかないかのことです。この喜びを妻と分かち合いたいと思ひ、妻も一緒に出席させていただきました。

表彰式で、私の名前と作品名が読み上げられた時は、感無量でした。そして何より、恵那観光大使の初風緑様とリモートを通してお話しさせていただけたことは、よい思い出となりました。初風様からは、手書きでの作品であつたことや会話を通しての印象として、教員になるべくしてなつた人であるなどの温かいお言葉を頂戴し、とても感激したことを今も心の中に大切にしまつております。

今も教員を続けておりますが、受賞を通して、この思いを公表させていただいたことが、自信とやりがい、拍車を掛けております。受賞させていただいたことを心の糧として、作品にも書きましたように、「学問を通して若い世代を育て、もつて社会のために尽くす」という志を忘れることなく、精進していきたいと思つております。

自分の思いを発表させて頂ける、このような機会を設けていただいたことに、心か

ら感謝いたしております。本当にありがとうございます。

貴賞の益々のご隆盛を祈念いたしております。

## 教師として、地域のおばちゃんとして

岐阜県恵那市◎遠山直美  
第18回「志」優秀賞

新型コロナウイルスの影響がこれ程長く続くとは、あの頃には思つてもみなかった。歌子賞のエッセイの中に書いた二〇二〇年三月に卒業した中学三年生の生徒は、今年高校三年生となり、この夏新たな進路選択に向けて懸命に努力を重ねている。

コロナ禍ですごした学校は、「コロナだからできない」とは、決して言わなかった。その時々、コロナの流行具合によってアクセルとブレーキのバランスをとりながら、できる方法を考え、児童・生徒のためにできることを行つた。今までの当たり前を問い直す必要が出てきたことは、前年度踏襲の傾向が強い学校の体質にとっては良い面もあった。本当にこの活動は必要なのかを問い直し思い切つた変更を行つたことで、

児童にとっても先生方にとっても負担を減らし良い効果をもたらしたものもある。IGAスクール構想の前倒しにより、学校のICT活用は加速度を増した。今やタブレットが手元にある授業が当たり前の日常になってきた。児童・生徒も教師もコロナ感染症の影響を大きく受けたが、変わらないこともある。その一つが、児童生徒の地域を大切に思う心。

コロナ共存社会の中で、現在の私は、恵那市の隣にある中津川市の学校に勤務している。「人とのつながりを大切にして、恵那を愛する子どもを育てる教師となりたい」とエッセイを結んだ私であったが、転勤があるのは当然のこと。教師としては、どの地域にいても、目の前の子どもたちが自分の地域の良さを実感し、「自分のふるさとには、こんな素敵なところがあるよ。自慢だよ」と語れる子どもたちに育つよう、学校がある地域の方々とつながり、教育活動を進めている。

しかし、恵那を離れても、恵那を愛する子どもたちを育てるためには……。地域のおばちゃんとして何かできるのではないかと、今の私にできることを考えた。

今年（二〇二二年）は、佐藤一斎生誕二百五十年の節目の年。恵那市で、嚶鳴（おうめい）フォーラムが開催される。私はいわむら一斎塾の一員として、これらの行事にかかわる機会をいただいた。

佐藤一斎生誕二百五十年の記念行事にかかわる実行委員会が立ち上げられ会議を重ねていく中で「そうだ、地元岩村の中学生と一斎先生に関する商品を作り出せないか」と考えた。チラシを作り、岩邑（いわむら）中学校の校長室を訪ね、趣旨を説明したのは、昨年九月。校長先生のご快諾により、商品開発のアイデア募集が進んでいった。生徒が出してくれたアイデアの中から実現可能な菓子、陶器、ボールペンに絞り、具体的にアイデアを絞り込んでいった。岩邑中学校の先生方のご協力により、総合的な学習の時間を使い、生徒があれこれ相談しながら商品が形になっていくまで、もうあと一歩という所までできている。

生徒たちは、この活動を経験したことで、地域に対する思いや自分たちの活動の値打ちを再確認し発信するようになってきた。今年の少年の主張大会で岩邑中学校代表の生徒は、商品開発の活動を通して、「故郷

に貢献できる人になりたい。」という思いを発表した。また、七月に市議会で行われた中学生と恵那市の未来を語る会で、岩邑中学校代表生徒は、恵那市の魅力をたくさんの人へ伝えることとして、恵那市の魅力が伝わる商品を開発し地域の活性化を行うために地域の住民が一人となって協力する社会をつくることを提言している。

地域のおばちゃんとしてかわってきたくこの活動から生まれた生徒の思いをうれしく受け止めながら、このような思いにまで高めていただいた岩邑中学校の先生方の指導に感謝するばかりです。

さらに生徒の自発的な活動が生まれている。嚶鳴フォーラムに間に合うように「一斎もなか」の栗味とりんご味の打ち合わせを岩邑のかめや菓子舗さんを行う「もなか会議」を生徒が計画。さあ、どんな意見が出てくるのか楽しみに、恵那を愛する子どもを育てる、地域のおばちゃんの活動も続く、続く。

末尾となりましたが、二十回続いてきた下田歌子賞が、今後も多くの皆様が志や夢を語る場として、さらに続いていくことを心からお祈り申し上げます。



## 第二の青春

愛知県稲沢市◎菱川町子  
ひしかわ まちこ

第18回「志」佳作

モンゴルで日本語を教えてはや十三年が過ぎた。異文化の嵐に翻弄され戸惑う毎日だったが、草原の若者の日本語を学びたいという真つすぐな想いが、還暦過ぎの枯れてしまった心にエネルギーを吹き込んでくれた。あの大学生たちは既に大学を卒業し、それぞれの道を歩んでいる。ある時、モンゴルのスーパーで

「先生！ お久しぶりです」

子供の手をひいた女性に声をかけられた。初々しかった入学当時の面影はなく、すっかりママの顔になっていたのに驚くやら、嬉しいやら。またスピーチコンテストで優勝したことで自信を持ち、次の年には文部省の留学生試験に見事合格した者もある。彼女は念願の日本留学の夢を叶え、卒業後は日本大使館で働いている。夏休みに私が日本に一時帰国した時、留学で日本にいた彼女らと一緒にデイズニールランドやユニバーサルスタジオに行ったことも楽しい思い出になった。小さい頃からの夢だった

日本語の教師になった者もある。教え子と肩を並べ日本語を教えるとは、教師冥利に尽きるではないか。

モンゴルでの十三年間は、挑戦と失敗の繰り返しで、まさに第二の青春だった。若者にエールを送ったつもりだったが、実は私の方が送られていたのではないかと近頃思う。

### 「日本一の版画のあるまち」に

岐阜県恵那市◎市川彰  
いちかわ あきひろ

第18回「志」佳作

第十八回下田歌子賞に「日本一の『版画のあるまち』へ」というタイトルで応募し、賞を頂き、このことが自身の版画活動に加え、まちづくり版画活動への大きな力となりました。

以来、まちなか市、えなえーるでのワークショップ、年賀状講座などを開催してきました。今年度は、恵那文化センター展示室で「恵奈ゆかりの版画展」を開催しました。この展覧会は、加藤公雄、堂本隆男、仁科恵実、長谷川忠廣、吉村茂夫、度会嘉三の郷土（恵那・中津川）の版画家の作品

を紹介しました。また、「年賀状制作」の市民講座などから版画を趣味とする人たちが八人集まり「恵那版画の会」を立ち上げ、会員八人の作品も紹介させていただきました。恵那ゆかりの音楽家による「恵奈人による恵那の音楽祭」と同時開催をして三日間で四百六十六人の方に版画の作品を見ていただきました。

恵那・中津川は昭和二十年代から学校教育で版画を取り入れ、「日々の暮らしをきちつと見て描く」ことをこども達に教えてきました。「こども版画コンクール」は、十九回目を迎え、こども達の活動的で素晴らしい作品が毎年三千点弱できます。創立二十周年を迎えた中山道広重美術館には、保存状態が世界一と言われる広重・英泉の「木曾街道六十九次」があります。浮世絵も版画です。こども達がこの良さを理解し、美術館に足を運んでくれることを願います。

『版画のあるまち』構想は地味ながら着実に進んでいます。「こんなことできるかな。できないからやめよう」ではなく、「できないかもしれないが、やってみよう」という心構えが必要であると思います。夢は大

きく持つこと、目標は高く掲げること、「日本一の版画のあるまち」にするべく志を持つことがいかに大事かがわかりました。

この下田歌子賞の益々の充実・発展をお祈りいたします。

## その後の私

京都府宇治市◎小野利子  
第18回「志」佳作

私は、まさに今、人生おまけの時間を過ごしている。思い出の世界を彷徨い美しく、懐かしいものを見つけてはエッセイにしている。「コロラドの月」もその一つである。

戦争から還ってきた叔父は、以前の職場に復帰できず、祖父が始めたわずかばかりの百姓をしながら、山仕事についた。戦争で多くの若者を失った村の山は荒れ放題だ。叔父の仕事は、下草を刈り雑木を間引きして赤松の根元に風と日光を当てる事であった。雑木は束にして燃料にするが、葉や枝先はその場に積み上げて堆肥にする。休みになると、叔父はいつも姉と私を山に連れていき、山中で作った薪を荷車の通

る道まで運ばせた。薪を背負って山の中腹から下まで十往復する。十四歳の姉が二束、十歳の私が一束背負っての遅々たる作業も、道までおろせば大きな嵩に見えた。真冬とあって、時には横殴りに粉雪が吹雪く。滑る足元を気遣いながら山を下り、荷を下ろしてすぐ、また登る。

途中で足を止め顔を上げると雑木を切り払った山肌に、赤松の木がたおやかに伸び、枝を広げていた。その間を粉雪が舞う。「きれいやなあ。座敷からみる庭先みたいや」

私たちは、五回目を運び終えると中腹に有る大きな岩の影で昼食をとる。凍り付いたようなご飯の上にかつおが乗り、たくあんが添えられただけのお弁当がおいしかった。

耐えがたいほどの寒さの中でも、やはり休憩はうれしい。二人はいつものように「コロラドの月」を歌う。二回も歌うと、もう、じっとしてはおられない。歯をカチカチと言わせながら、また、登りはじめた。

夕方にはもうクタクタである。電灯の下に家族が集まり、揃って摂る夕餉はほのぼののとしていて温かい。叔父も私たちも昼の

疲れを忘れていくような時空であった。

## 心がまあるくなり

山口県下関市◎河田豊子  
第18回「志」佳作

私の前回の作品が受賞の栄誉をいただいたことは本当にすばらしいことでした。自分自身を顧みる大きな材料にもなりしました。自分自身を誇れることだとも思いました。ありがとうございます。

人生山あり谷あり。前回の作品の背景にはその人生の山の頂上に向かってあえぎながらずっと重い荷物を背負って上を見ながら坂道を登っていた私がいたような気がします。

昨夏、我が家では夫の心臓手術という大きな禍がありました。やはり、人生は絶えず動いているようです。一時は家族が娘と二人だけになる景色も覚悟しましたがおかげさまで夫は順調に回復しました。私はもう引退してゆっくり養生して欲しいと思っていたのに夫は術後二ヶ月で仕事に復帰してしまいました。今は夫が生還できたことを感謝し夫婦で良いこと、楽しむことばかり

を考え日々生活しております。それだけ歳をとったということでしょうか。心がまあるくなり、余裕ができたようです。少々のことでは動じなくなってきたということもあるようです。で、若い人にはいつも言っています。簡単にその時の気分で離婚したりしないようにと。踏ん張り時が大切、そして何でも解決できるものだ、と。

## 思いを伝える難しさ

京都府京都市◎竹本義昭  
第18回「志」佳作

第十八回の受賞の知らせを受けたときは、とても驚き、嬉しかったことを覚えています。私は、三十代のころから、文章を書くことが好きで、歴史雑誌などへ投稿して掲載していただいたりしておりましたが、七、八年くらい前から御賞を含む他の二千字程度のエッセイ賞などに夏季休暇などを利用して原稿を作成して応募することをはじめました。さすがに応募作品となると受賞は難しかったのですが、テーマに沿って文章を書くことは真剣にテーマと向かい

合って自分の考えを文章化することの楽しさを感じつつ、読み手に自分の思いを伝える難しさも感じながら、応募させていたできました。第十八回の受賞を糧にして、今後も自分自身と向き合いながら、文章を書いていきたいと思っています。

## 全国区の賞になることを願って

愛知県豊橋市◎仲川浩  
第19回「志」優秀賞

下田歌子賞二十周年記念誌発行おめでとうございます。

私が妻に文芸や論文において様々な募集があることを教えてもらい、小説や随筆を書き始めてから早や三年ほどが過ぎ去ろうとしています。その頃から世間では新型コロナウイルスという未知の病気が流行り、御多分に漏れず私の仕事も暇になり、このままでは店をたたまなければならぬ状態になりました。そんな暇になった時間を利用して小説や随筆を書き始めました。そして下田歌子賞で初めて優秀賞（入賞）を頂きました。とても嬉しくて舞い上がってしまいました。

僭越ながら下田歌子賞についてひと言語らせていただきます。郷土の偉人下田歌子先生に因んで文学賞を創設する恵那市は、何と文化的な市であろうかと感心しています。それも短歌部門だけではなくエッセイ部門もあり、審査をする先生方も著名人が揃っていて、審査をされる側としても冥利に尽きる賞だと思っています。それもすでに二十年も続いていてとても素晴らしいことだと思っています。これからも百年、二百年とこの賞が続き、全国区の賞になることを願ってやみません。

## 誰かに読んでほしくなって

大阪府堺市◎相野 正  
第19回「志」佳作

第十九回において佳作の栄誉を頂戴いたしまして感激しています。

六十五歳から書き始めたエッセイ。

本を読むことと作文が大好きだった少年時代からこの歳まで、書くことで「賞」というものなどに、ほとんど無縁の人生でした。しかし、自分の人生で経験したこと、考えたことを文章にして誰かに読んでほしく

なって応募いたしました。

最も応援してくれていた妻は四年前に他界いたしました。病床で「遠い空の上からお父さんの作品を読みたい」と言っていました。

これからも、その妻の期待に応えられるよう、また自分で書いた作品に込めた思いに恥じないように書き続け、残された人生をひたすら歩んでまいりたいです。

## 生活に潤いを与える賞に

福岡県福岡市◎山本 築  
やまもと すすく

第18回「志」佳作

「志（こころざし）——今、伝えたいこと——」というテーマのもと、三十代になった自分の身のまわりのことやこれからの目標について書かせていただきました。

自分の志を言葉にすることによって、あらためて目標を見定め、生き方を見つめる機会となりました。これからもこの下田歌子を冠した賞が、人々に夢を語らせ、日々の生活に潤いをあたえるものとなることを、心から願っております。

## コラム

### コロナ禍での表彰式

世界的に新型コロナウイルスの感染が拡大した令和2（2020）年度の第18回表彰式と記念イベントは、インターネットによるオンライン環境の整備が完了した恵那文化センター大ホールを会場に、感染症対策を十分に施して開催。会場に参加できない受賞者・関係者とはオンラインで結びとともに、YouTubeでの同時配信も行ないました。新しい表彰式のあり方を示唆する表彰式となりましたが、翌年の第19回表彰式は急激な「第6波」の襲来により開催直前に中止。選考委員と受賞者（希望者）による、オンラインでの集いを開催しました。



#### 第18回 表彰式・記念イベント

上左：VTRによる童門冬二氏の講評 上中：オンライン参加の受賞者・関係者の紹介  
上右：VTRによる初風緑さんの歌の披露 中左：表彰式会場 中右：実践女子大学渋谷校舎からオンラインで受賞者に語りかける初風緑さん（記念トークショー）  
下左：短歌の部小学生の部の代表者への賞状授与  
下中：最優秀賞受賞者のみなさん 下右：モニターで会場の様子を見ながら、カメラを通して受賞者に語りかける初風緑さん



# Ⅲ 下田歌子賞について





# 二十周年を迎えて

実践女子学園理事長 **山本章正**  
やまもと あきまさ

実践女子学園の創立者である下田歌子先生は、安政元（一八五四）年八月九日に岩村藩士平尾録藏<sup>ひら おじゅうぞう</sup>の長女として、今日の岐阜県恵那市岩村町に生まれました。下田先生は、明治四（一八七一）年、十六歳のとき、立派に成功してその功績を持って故郷に帰るという固い決意と大志をもって岩村を離れ、東京に旅立ちました。そして、明治三十二（一八九九）年に東京市麹町区元園町（現在の千代田区麹町）に実践女学校と女子工芸学校を設立し、それが今日の実践女子学園のもととなっています。

わが国近代女子教育の先駆者である下田先生を生んだ岐阜県恵那市と本学園との連携事業「下田歌子賞」は、下田先生の生誕百五十周年を記念し、平成十五（二〇〇三）年度から開催しており、今年度をもって第二十回を迎えました。

「下田歌子賞」は、下田先生の業績を顕彰しつつ、現代人の生き方や考え方、教育のあり方等を共に考え学ぶ、という趣旨のもと設けられた公募賞です。これまでの作品募集テーマを見返してみますと、「心に残る父、母、祖父母の教え」「ふるさとの先人に学ぶ」「ふるさと」「家族」等があります。近年では、第十五回（二〇一七年度）から第十九回（二〇二一年度）は「志（こころざし）」、第二十回（今年度）は「夢」というテーマで募集をしております。

このように本事業が、第二十回（二十周年）を迎えることができたのは、ひとえに本事業に関わる数多くの方々のご尽力とご支援の賜物であり、深く謝意を表する次第です。

改めて各回の、全国（北海道・沖縄県）の大勢の方々から寄せられた作品を拝読しますと、心に響く素晴らしい作品ばかりで、感謝と感動の気持ちが込み上げてきます。そして、皆様と一緒に創り上げてきた「下田歌子賞」を今後も継続させ、さらなる発展を目指したいと気持ちを新たにいたしました。

皆様には、これまでと変わらぬ温かいご支援、ご参画を心よりお願い申し上げます。

最後になりましたが、主催者・共催者として、共に事業を運営する恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会、岐阜県恵那市、恵那市教育委員会及び株式会社P H P 研究所の皆様改めて感謝申し上げますとともに、ご後援、ご協力くださった皆様に厚く御礼申し上げます。



# 下田歌子賞・二十年の歩み

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会副会長・元岩村町教育長

鈴木 隆一  
すずき りゅういち

「下田歌子賞」が二十回を迎えました。

第一回から関わっている一人として、月並みですがよくぞここまでと、感慨に浸っています。

私が住む恵那市岩村町は鎌倉時代から連綿と続く歴史のある町です。なかでも、江戸時代の中頃には全国でも十指に入る早い時期に藩校が設立され、文教藩の一つとして名を馳せたことは有名です。

そのような教育環境のなかで、幕末維新に岩村藩士の家に生まれ育ったのが平尾鉦（おきね）であり、のちの下田歌子先生です。

平成十六（二〇〇四）年に歌子先生生誕百五十年を迎えるのを前に、先生のふるさと旧恵那郡岩村町では、篤志家の寄付による銅像建立の気運が高まっていたところに「岐阜県郷土に輝く先人顕彰推進事業」の助成を受けることが決まりました。

岐阜県では、平成三（一九九一）年に、県政百二十年記念事業の一つとして近代日本の黎明期に活躍した郷土に輝く先人二十一名を選び顕彰事業を展開していました。現在の恵那市からは、女子教育の先駆者として下田歌子（岩村町）、自然保護に尽力した植物学者として三好学（岩村町）、明治洋画壇の先駆者として山本

芳翠（明智町）の三人が選ばれています。これら二十一人の先人のうち近代日本の文豪・坪内逍遙の出身地・美濃加茂市では全国演劇に関する活動・著作を対象にした坪内逍遙大賞を、日本画の巨匠・前田青邨の出身地中津川市では前田青邨記念大賞という日本画の賞を設けていましたが、二十一人の中でただ一人の女性である歌子先生の顕彰について当時の梶原拓岐卓県知事が強く推して下さり、県の先人顕彰推進事業の助成を受けることになったようです。そして、作家の童門冬二氏や月刊誌「歴史街道」編集部（PHP研究所）の助言もいただきつつ平成十四（二〇〇二）年度に約一年かけて準備を行ない、平成十五（二〇〇三）年度から、「岐阜県郷土に輝く先人顕彰推進事業・下田歌子先生生誕百五十年記念 下田歌子賞」と銘打って三年間のエッセイ公募事業を行なうことになりました。

本事業は、エッセイ公募を通して、

- ・ 下田歌子先生を顕彰しつつ、
- ・ 下田歌子先生の生き方・考え方を現代的視点で見直し、広く世の中に情報発信し、



・これからの時代の生き方、考え方を共に考え、共に学ぶ。

ことを目的とし、小学生の部、中学生の部、一般の部の三部門に分けて募集することになりました。

また、実践女子学園にもお声をかけをし、歌子先生のふるさと岩村町と、先生を学祖とする実践女子学園、そして当初から企画に携わって下さっているPHP研究所の三者主催で事業を展開することになりました。

#### 第1回 平成十五(二〇〇三)年度

### スタートは「男らしさ、女らしさ」

第一回は、「男らしさ、女らしさ」を総テーマとしつつ、小学生の部は「お父さん、お母さんのことが好き」、中学生の部は「男らしさ、女らしさ」について思うこと、一般の部は「私の考える『男らしさ、女らしさ』」をサブテーマに募集しました。

明治時代に、日本古来の精神を基盤としつつ時代に即した実学を身につける「実践女学校」を設立した歌子先生。その歌子先生が、近代日本の夜明けとともに、自立した女性としての新しい生き方と女性の社会的地位の向上を目指してから百五十年後、「男女共同参画」や「ジェンダーフリー」が叫ばれる中で、「男らしさ、女らしさ」をキーワードに、改めてこれからの生き方を考えてみようという主旨でした。

四月一日から七月三十一日までの四か月間の募集期間に、全国から五百作品近い秀作が集まり、岩村町での事前選考、PHP研

究所「歴史街道」編集部での二次選考の後、作家の童門冬二氏に最終選考をしていただき、各部門、最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作五作品を選び、十一月三日に岩村公民館(現在の岩村コミュニティセンター)で表彰式と記念講演会を開催。表彰状授与式につづいて、童門冬二氏が「男らしさと女らしさについて」応募作品を通して、実践女子大学出身の作家・中島道子氏が「下田歌子の生涯」と題して講演されました。また、当日の午前中には、関係者が集まり、下田歌子勉学所跡で下田歌子先生の銅像の序幕式が行なわれました。朝から小雨が降る寒い日でしたが、除幕式の時は雨が上がりほっとしたことを覚えています。

なお、月刊誌「歴史街道」平成十五(二〇〇三)年十二月で大賞受賞作品と審査講評、受賞者を発表しました。

#### 第2回 平成十六(二〇〇四)年度

### 募集は岩村町、表彰式は新制恵那市が主催

平成十六年度の第二回のテーマは「出会い」でした。歌子先生は十六歳のとき、東京で待つ父親の許へ二人の同伴と共にふるさと岩村をあとにしました。東京では父親、祖父に会い、宮中でも多くの女官や政府の高官に出会い、イギリスを始めとする欧米諸国では女子教育に携わる多くの人たちと出会いました。そのような出会いのなかで女子教育への「志」をさらに深めていったことにちなんでのテーマ設定でした。第一回と同様、小学生の部は「あの人に出会ってよかったと思うこと」、中学生の部は「あの人に出会って教えられたこと」、一般の部は「私を変えた、あの人と

の出会い」をサブテーマに募集しました。この年十月に旧恵那市と恵南五か町村（岩村町、山岡町、明智町、串原村、矢作町）が合併したため、募集は岩村町、表彰式は恵那市主催となりました。募集期間については、学校関係者等から夏休みを入れてはどうかという提案をいただいたため、第二回以降は六月から九月までの三か月間を募集期間としました。

平成十七年二月十一日に開催した表彰式では、表彰式に続いて記念フォーラムを開催。童門冬二氏、実践女子大学学長の飯塚幸子氏、そして旧岩村町の教育長を務めていた私の三人で『出会い、今、家庭教育で一番大事なこと』をテーマに鼎談を行いました。

また、下田歌子先生生誕百五十周年を記念して、表彰式の前日には、歌子先生が実践女学校で源氏物語を講義されたことにちなんで、実践女子大学文学部教授・横井孝氏による講演会『源氏物語の旅』を開催。岩村歴史資料館では二月八日から二十日まで『源氏物語展』を開催しました。

表彰式の主催者挨拶の中で、新制恵那市の可知義明市長さんが、「歌子賞」を高く評価され、今後も継続するという嬉しいお言葉をいただきました。下田歌子賞は三年間の「岐阜県郷土に輝く先人顕彰推進事業」として始まったことに加えて、合併によりこのような事業が廃止になることを危惧していたのでほっとしたのと思います。あとで伺ったことですが、可知市長の挨拶を聞かれた作家の童門冬二氏も、思いがけない市長の発言に驚き、感動されたそうです。

### 第3回 平成十七（二〇〇五）年度

## 恵那市合併記念事業として

「岐阜県郷土に輝く先人顕彰推進事業」としての最終年度の第三回は、新恵那市の初めての募集となりました。そこで、旧岩村町だけでなく広く恵那市全域の市民の皆さんに事業に関心を持っていただくために、募集開始に合わせて審査委員長の童門冬二氏の講演会を恵那文化センターで開催しました。また、恵那市民の関心を喚起するために、公募対象を恵那市民もしくは恵那市にかかわりのある全国の人々とし、下田歌子先生が「家庭は最大の学校である」と家庭での学びをなによりも大事にされたことにちなんで、「家族みんなで考えよう！ わが家の約束ごと」をテーマにした標語の部と、「私の誇る恵那市のよさ／その美しい心と伝統」をテーマとしたエッセイの部の二部門で募集。今回から、童門冬二氏を審査委員長に、実践女子大学学長の飯塚幸子氏、PHP研究所社長の江口克彦氏、可知義明恵那市長の四名が審査委員として審査にあたることになりました。

十一月二十六日の表彰式では記念フォーラムも開催。童門冬二氏のコーディネートにより実践女子大学学長の飯塚幸子氏、三浦忠信恵那市教育長が鼎談。第一回から第三回までの募集テーマにちなみつつ、『ともに学び、教え合う生き方／今、家庭教育を考える』をテーマに、第一回から第三回までの三年間の事業での学びを総括しました。



下田歌子先生銅像除幕式（上）と第1回下田歌子賞表彰式（中：童門冬二氏の記念講演、下：小学生の部受賞者の表彰）



第1回下田歌子賞のポスター、チラシ表面

コラム

## 第1回受賞者からのメッセージ

今後も続いていくことを願って

恵那市岩村町 酒井 優

小学生の部優秀賞受賞

「お父さんの仕事場のおまつり」

(岩邑小学校五生)

第一回は学校の授業の中で、みんな一斉に書いたことを覚えていきます。そして、それがあんなに立派な賞を受賞するとは思っておらず、頂いた時はとても驚きました。あれからもう二十年もたつのだと頂いたお手紙で知り、時がたつのはこんなにも早いのかと驚きました。

小学校では、様々な作文を書きますが、その中でも特に記憶に残っています。学校ではない別のところでの授賞式、頂いた賞品など、普段これといって得意なことが無かった私には初めての経験で、嬉しかったことを今でも思い出します。そして、それを、二十年後、またご連絡を頂いて、思い出す機会を頂けたことも嬉しく思います。

二十年、過ぎ去るのはあっという間ですが、継続することは難しい年月だと思います。二十年、続けてくださった委員会の方々、ありがとうございました。そして、二十年おめでとーございます。

今後も続いていくことを願っています。

## 実践女子大学の香雪記念館で表彰式を開催

第四回のエッセイの部は、「心に残る父・母・祖父母の教え」をテーマに、小学生の部は「お父さん、お母さん、おじいさん、おばあさんに教えてもらったこと」、中高生の部は「父、母、祖父母から教えられたこと」、一般の部は「父、母、祖父母から学んだ一番大事なこと」で募集。

表彰式は実践女子大学日野校舎の香雪記念館で十一月二十六日に行なわれ、恵那市からは市長、教育長、受賞者・関係者をはじめ一般市民が大型観光バス二台で参加しました。受賞作品の発表と表彰式につづいて、実践女子学園出身の俳優で岩村城女城主も務めていただいている渡辺美佐子氏による記念講演『私が父、母、祖父母から学んだこと』と、『父親、母親の役割——ここが問題』をテーマに童門冬二氏、渡辺美佐子氏、実践女子大学学長の飯塚幸子氏によるパネルディスカッション（コーディネーター…山口幹生氏）が行なわれました。

また、第四回から第六回までは、恵那市合併記念事業の一環として、エッセイ募集とともに、「ふるさと再発見！ あなたが選ぶ恵那市の新名所一〇〇選」と題した写真募集も行ないました。

## 講師・六代目宝井馬琴氏「下田歌子を語る」

五周年にあたる第五回は、エッセイの部は「父、母、祖父母、兄弟、子どもたち……忘れられないあの一言」をテーマに、小学生の部「ほめられたこと、しかられたこと」、中高生の部「私を力づけてくれた、あの一言」、一般の部「忘れられない家族の言葉」で募集。二年目となる写真の部では、写真家の堤勝雄氏とグラフィックデザイナーの神長文夫氏に審査委員に就任していただきました。また、五周年を記念して、素晴らしい家族づくり、家庭づくりを実践している書籍を「下田歌子賞推薦図書」として表彰することになり、伊吹菜穂子氏の『心豊かな子を育てる 39のヒント』が選ばれました。

十一月二十四日に開催された表彰式の記念イベントでは、講師の六代目宝井馬琴氏を招いて「下田歌子を語る」と題してマンガ講談をご披露いただくとともに、推薦図書を受賞された伊吹菜穂子氏が参加するコーラスグループ「パセリジュース」の皆さんにより子どもたちや家族への応援歌を披露いただいた後、童門冬二氏と宝井馬琴氏、実践女子大学・短期大学学長の湯浅茂雄氏が家庭教育における言葉やコミュニケーションの役割について話し合うといった盛沢山の内容で五周年にふさわしいイベントが行なわれました。



第6回 平成二十(二〇〇八)年度

## 源氏物語 一千年紀を記念して

第六回は「源氏物語」が一千年を迎えたことにタイアップして、源氏物語千年紀委員会の後援をいただきました。また、この回から恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会を組織して、事業の主催・運営に携わることになりました。エッセイのテーマは「家族への思い」でした。

十一月三十日に開催された表彰式記念イベントでは、源氏物語一千年紀を記念して、舞踊家の松本亜梨氏に「『源氏物語』語り舞」を披露いただいた後、『下田歌子が語りかけるもの』をテーマに、PHP研究所の寺田昭一氏をコーディネーターに、童門冬二氏、実践女子大学・短期大学学長の湯浅茂雄氏、実践女子学教授の大塚啓子氏、恵那市教育委員長を務めていた私によるパネルディスカッションを開催しました。

第7回 平成二十(二〇〇九)年度

## 嚶鳴フォーラムを契機として

平成十九(二〇〇七)年、童門冬二氏と愛知県東海市の呼びかけにより、ふるさとの先人を地域づくりに活かす全国の自治体による嚶鳴フォーラムが開催され、翌年嚶鳴協議会が設立されました。恵那市も当初から参加していましたが、平成二十一年度は、佐藤一斎没後百五十年を記念して恵那で嚶鳴フォーラムを開催し

## コ ラ ム

### 嚶鳴協議会と嚶鳴協議会賞

嚶鳴協議会は、ふるさとの先人をまちづくり、人づくり、心そだてに活かす自治体が、情報交換や交流、連携を通してよりよき地域づくりを探索するための協議会です。「嚶鳴」とは、中国最古の詩集『詩経』に出てくる言葉で、鳥が仲間を求めて鳴き交うという意味。転じて、仲間が集まり切磋琢磨しながら学び合い教え合うことを意味します。名君・上杉鷹山の師として名高い愛知県東海市出身の儒学者・細井平洲が江戸に開いた私塾を「嚶鳴館」と名づけたことでも有名です。

加盟自治体が持ち回りで開催する「嚶鳴フォーラム」を中心に、市町長会議、教育長会議、行政職員や市民の交流など活発な活動を行なっています。恵那市では平成二十一(二〇〇九)年と令和四(二〇二二)年に嚶鳴フォーラムを開催しました。また、嚶鳴協議会参加自治体が行なう公募事業等の中で協議会の趣旨に添った事業に対して「嚶鳴協議会賞」も授与しています。

【加盟自治体(令和四年度現在)】恵那市 大野町  
沖縄市 小田原市 釜石市 木曽町 高鍋町 多久  
市 日田市 東海市 長野市 養父市 米沢市

ました。そこで、第七回を迎えた下田歌子賞も嚶鳴協議会の後援をいただくとともに、嚶鳴フォーラムでご縁をいただいた中国思想史の大家で東洋大学教授の吉田公平氏に審査委員に加わっていただくことになりました。

エッセイ募集も、嚶鳴フォーラムの開催と下田歌子先生が最期までふるさとを愛し、ふるさとのためにも尽力されたことになんで、第九回まで三年間「ふるさとの先人に学ぶ」をテーマに、小学生の部は「ぼくの、わたしのまちの『郷土の偉人』」、中学生の部は「ふるさとの先人、学校の先人に学んだこと」、一般の部は「先人から学んだこと」（第九回は、「心に残った先人の生き方」「私が出会った先人の言葉」「先人から教えられたこと」など）をサブテーマとして募集することになりました。

これにより、下田歌子賞が全国の嚶鳴協議会加盟自治体に周知されるとともに、応募を通して、全国各地の先人が紹介されるなど、「下田歌子賞」の広がりを知ることができました。

また、この回より、表彰式記念イベントとして、表彰式に参加した小学生の部、中学生の部の受賞者が、自分の作品を朗読して会場参加者の投票で審査を行なう朗読コンクールを実施することになりました。

なお、恵那市市制五周年と実践女子学園創立百十周年を記念して『学祖下田歌子展』が岩村歴史資料館で開催されました。

## 第8回 平成二十二年（二〇一〇）年度

### 実践女子学園と恵那市連携協定

第八回のテーマも「ふるさとの先人に学ぶ」でした。十一月二十七日の表彰式当日、「実践女子学園と恵那市連携協定」が締結されました。

以前から実践女子学園幹部の学祖法要（香雪忌）と墓参、実践女子学園中学校二年生の岩村への学祖墓参を兼ねた移動教室（岩邑中学校三年生が案内）、実践女子学園夏季セミナー「学長と行く学祖故郷の旅」、岩邑中学校三年生の東京への研修旅行での学祖訪問、マンガ『下田歌子』の発行（岐阜県・いわむらまちづくり）、特別公開講座（いわむら一斎塾主催）の開講、菓子（「綾錦」「歌子の里」）の製造販売などが行なわれていましたが、以後、恵那市実践女子学園連携講座の開講や職員の派遣研修などが行なわれるなど、「歌子賞」「連携協定」などにより恵那市と実践女子学園とはますます強い絆で結ばれるようになりました。

また、この回から、当初から懸案となっていた、短歌募集について、恵那市民による公開投票によって入選作を選ぶ形で短歌募集をすることになり、「家族・思いやりの歌」をテーマに短歌募集を行ないました。

第9回 平成二十三(二〇一一)年度

## 東日本大震災の中で

平成二十三(二〇一一)年三月十一日、東日本大震災が起こり、東日本を中心に広い範囲で津波・地震被害が起こりました。第九回を迎える下田歌子賞では、エッセイの部は「ふるさとの先人に学ぶ」の三年目を迎え、短歌の部は、震災後まもなく開催した実行委員会で、「絆」をテーマにすることになりました。「絆」はその後、全国的なキーワードになっていきましたが、テーマを決めた段階ではまだ、この言葉は広く使われてはいませんでした。

二年前の第七回で、はじめて「ふるさとの先人に学ぶ」をテーマにエッセイ募集と朗読コンクールを行なった時、小学生の部の大賞を受賞したのが釜石市の小学生でした。恵那市でも、釜石市支援の一環として『小学生のための「言志四録」』を釜石市の小中学校に配布に行きましたが、受賞者の学校を訪問した際、受賞者本人に出会えてうれしく思いました。

表彰式と記念イベント(朗読コンクール)は、十二月十日に開催。第十二回く十六回も十二月中旬の土曜日に開催しました。

第10回く第16回 平成二十四く三十(二〇二二く一八)年度

## 「ふるさと」「家族」「志・夢、願い」

下田歌子賞十周年の節目となった第十回のテーマは、エッセイの部、短歌の部ともに、「母」でした(以降、エッセイと短歌は

同じテーマで募集することになりました)。

平成二十五(二〇一三)年一月十九日の表彰式では、朗読コンクールと、童門冬二氏の『下田歌子と近代日本』、実践女子大学教授の大関啓子氏の『日本の母として——下田歌子と社会福祉——』の記念講演を行いました。

また、十周年を記念して、過去九回に入選した方たちから頂いたメッセージをまとめた記念誌『受賞の思い出く下田歌子賞十周年を記念して』を発行しました。

以後、「ふるさと」(第十一回、十二回)、「家族」(第十三回、十四回)、「志・夢、願い」(第十五回、第十六回)をテーマに、エッセイと短歌を募集。表彰式では、記念イベントとして小学生の部、中高生の部のエッセイ受賞者による朗読コンクールを開催しました。

なお、エッセイの部の小学生の部・中高生の部の各賞ですが、朗読コンクールが始まった第七回から十三回までは、審査委員による最終審査で入選作九作品を選び、全員に「ふるさと先人賞」を授与した後、朗読コンクールによる会場投票の上位順に、「ふるさと先人大賞」一名、「ふるさと先人優秀賞」二名、「嚶鳴協議会賞」一名(但し、第七回目は、嚶鳴協議会賞はなし)を選んでいました。

しかし、エッセイの評価と朗読の評価は分けた方が良いという意見もあり、第十四回以降は、審査委員による最終審査でエッセイ評価を行ない、最優秀賞一作品、優秀賞三作品、佳作五作品を小学生の部、中高生の部それぞれに授与。その後の朗読コンクールでは、会場投票上位三名に朗読賞としての嚶鳴協議会賞を授与

することになりました。

また、一般の部では、第八回より第十三回まで、最優秀賞一名、優秀賞三名、佳作五名の他に、嚶鳴協議会賞を一名に授与しました。

回を重ねるごとに、下田歌子賞に取り組む学校が増えていきましたが、学校での取り組みをより応援・促進するために、平成三十（二〇一八）年度の第十六回より、学校で取り組み、応募数が顕著に多かった学校に学校賞を授与することになりました。

また、第十五回と十六回の表彰式には、実践女子学園出身で宝塚歌劇団の男役スターとして活躍された初風緑さんを特別ゲストとして招き、記念イベントでトークショーを開催し、歌も披露していただきました。

#### 第17回 令和元（二〇一九）年度

### 実践女子学園創立百二十年、恵那市市制十五周年を記念して

平成から令和へと年号が変わり、また、実践女子学園創立百二十周年、恵那市市制十五周年と歴史に残る年となった令和元（二〇一九）年度の第十七回は、あらためて下田歌子先生がふるさとを離れる時に詠んだ「綾錦の歌」に込められた「志」を一人ひとりが考えようという思いも込めて、前年までの「夢、願い」というサブテーマをはずして、「志」だけをテーマにすることになりました。

そして、年が明けて令和二（二〇二〇）年一月二十一日に、「実

践女子学園創立百二十年周年記念 恵那市市制十五周年記念」と銘打って開催した「表彰式・記念イベント」では、初風緑さん脚本・構成・演出の「実践女子学園創立百二十年周年記念朗読劇『ことほぎ』」が上演されました。地元の岩邑中学校の生徒も参加し会場を埋めた多くの方に大きな感動を与えました。

#### 第18回、第19回 令和二（二〇二〇）～二（二〇二二）年度

### コロナ禍の中で

しかし、第十七回の表彰式・イベントが終わると間もなく、新型コロナウイルスの感染が急激に拡大し、四月には緊急事態宣言が発せられ、多くの社会活動が停止しました。

その中で、第十八回を迎えた下田歌子賞は、前年に引き続き「志」をテーマに、自宅待機や学校の休校―いわゆる「おこもり状況」―が続く中で、書くことを通してご自身の来し方行く末を振り返っていただく一助になればと考え、募集期間を一か月早めてゴールデンウィークには告知を開始するとともに、ホームページやSNSを利用して告知を行いました。

その結果、前年まで以上の応募作品を頂きました。

十二月十二日に開催された表彰式は、新型コロナウイルス感染拡大の隙間を縫って、インターネット環境の整った恵那文化センター大ホールで開催。十分な感染対策を施した上で、会場には地元の受賞者、関係者だけの限られた人数が参加。リモートにより会場と東京の実践女子大学や各地域の受賞者とオンラインで結ぶ異例の表彰式になりました。手探りの中で行なった表彰式でした



が、全国的に多くの行事が中止される中で、リアルとオンラインの両方を駆使して開催することにより、整備したばかりの恵那市自慢の大きなスクリーンに映し出される受賞者や審査員の方々との交流も深まり、これからのイベントのあり方の試金石ともなる行事となりました。

そして、翌令和三（二〇二二）年度の第十九回は、新型コロナウイルス感染拡大の一日も早い収束とアフターコロナ時代の到来を願いつつ、五年目を迎えた「志」の最終年度として、「志」今、伝えたいこと「自分自身に伝えたいこと、人さまに伝えたいこと、世の中に伝えたいこと」をテーマに募集しました。

令和四（二〇二二）年一月二十一日に予定されていた表彰式は、新型コロナウイルス第六波による急激な感染拡大により、開催直前になって中止を余技なくされました。しかし十二月に、希望者による「選考委員と受賞者の集い」をオンラインで開催。選考委員と受賞者が同じ立場で時間を共有し、親しく語り合える時を持つことができ、これもこれからの時代の展開への一つのヒントになりました。

## 下田歌子先生を今に活かす視点で

下田歌子賞は、第一回以来、テーマは歌子先生に縁のある「家族」「ふるさと」「志」「夢」などでしたが、いずれも小学生の部、中高生の部、一般の部の各部門とも全国から多くの作品が寄せられました。私も、第一回から事前審査に携わっていますが、審査では年々多くなる応募作品に嬉しい悲鳴をあげながら、百人百様

の人生・考え方を知ることができ、私自身は他の人たちでは経験できない贅沢な一時を独占させていただいています。

今回二十回目を迎えた「下田歌子賞」ですが、ここまで来るのに山あり谷あり。

直接関係していただいた人たちのご尽力のお陰で二十年を迎えました。多くの恵那市民の方にもこの賞の意義を知ってもらい今後への学びに活かして欲しいと願い、当初から表彰式は市民参加型にして来しました。講演会、鼎談、源氏物語の語り舞い、下田歌子のマンガ講談、抽選会など、その年その年で工夫をして来しました。そして今、コロナ禍の中で、次の時代に向けて、様々な模索を続けています。

全国的にこのようなエッセイ募集で二十回を数える所がどれだけあるかはわかりませんが、この「下田歌子賞」が恵那市に根を下ろし恵那の文化レベルの評価を上げる一助になっていることは確かだと自負しています。

また、最近では大学と地域との連携が増えてきていますが、下田歌子先生を通して当初から実践女子学園と恵那市が連携して「下田歌子賞」を実施しており、年々、両者の協力関係が強まっていることも、下田歌子賞の特徴の一つです。

終わりに、「下田歌子賞」である限り、歌子先生を顕彰し、今に活かすことができる実績や評価、教えなどがもう少し取り入れられたエッセイ、短歌の作品（直接文章として描かれていなくても、行間にそれが漂ってくる作品）が増えることを願っています。

二十周年雑感

## 歌子先生、どこにおられるの？

選考委員長・作家  
童門 冬二 どうもん ふゆじ

「下田歌子賞」を設けてから今回で二十周年になります。もうそんなになるのか、と月日の経つスピードの速さにおどろきます。ふりかえてみて、企画の段階から参加させていただいた立場から多少感ずることがありますので、正直にその思いを書かせていただきます。

そのひとつは、「下田歌子賞」と名づけながら、下田歌子先生が存在が次第に消え、最初のころは、応募者自身にあった歌子先生への関心と研究が、回を重ねるに従って薄くなってきたことです。率直に言えば、二十回（二十年）続けたことで、下田先生の存在が賞とほとんどかわりがなく、名目だけになっている、ということなのです。

このことは岩村が生んだもう一人の人物・佐藤一斎先生への関心と研究の深さくらべるとかなり温度差があり、ぼくにとってはなはだ残念なことです。

「なぜだろうか？」——いろいろ考えてみました。

理由として下田歌子先生にはある俗説があります。それは歌子先生が女性であることをひとつの武器として、政府の頭官たちに接触したという説です。

ぼく自身、はじめはこの説が頭の隅にありました。しかし恵那市の努力や関係者の新しい研究によって、それらがすべて意図的に唱えられた説だ、ということを現在のぼくは信じています。

有体ありていに言えば、ひょっとして応募者の中にもそういう人（俗説を信じる人）がいれば、それを否定し、正しい歌子像を描いて下さることも賞の側面的な目的にしたいなあ、ということがぼくの正直な希いねがであります。

できれば、第二十回のテーマである「夢」の実現にも、「歌子先生は、こういう努力で自身の夢を実現した（短歌の制作や女性教育の敷衍ふえんなど）」というようなことを、もっともっと発信していったらありがたいなあということです。これがぼくの夢ゆめです。（それも切実な）

二十周年雑感

## 視野を広げ、深く思索する機会

選考委員・東洋大学名誉教授

吉田 公平  
よしだ こうへい

下田歌子賞が始まった当初は、下田歌子をたたえる文章が多かった。賞を設けた趣旨がうまく伝わらなかったからであろう。例えば文学賞の一つに芥川賞がある。文学として優れているものが受賞することになる。芥川龍之介をたたえる作品が受賞するなどということはない。

下田歌子賞でも、近年は、そのことが理解されてきたのであろう。そのような文章がなくなった。喜ばしいことである。自らの生き方・考え方を改めて考える機会を促したことが浸透していったのであろう。

今の日本社会は民主主義を国是（根本原理）としている。

国民一人ひとりが自分の人生の主人公であることが「民主」（国民一人ひとりが主人公）である。外から押しつけられる筋合いはない。

それだけになおのこと、自分の生き方・考え方を「大きく、高く、深い」ものにすることが肝要である。

秘伝秘密の時代ではない。情報化社会の恩恵を受けながらも、そのもたらす落とし穴は大きいものがある。

伝えられる情報を活かすも殺すも、私たち一人ひとりの智慧如何による。そのためには情報を単に承け流すのではなくして、それを適宜に選択して活用することである。

情報の奴隷になってはいけない。

民主主義とは三権分立の政治制度をいうのではない。一人ひとりが自分の人生の主人公であることをわきまえて、その役割を果たすことこそが民主主義の根本なのである。自分の視野を広げ、深く思索する機会を設けたことは、下田歌子賞のとても大きな貢献であった。

二十周年雑感

## ひつまぶしと徳増省允さん

月刊誌「歴史街道」特別編集委員

寺田 昭一 てらだ しょういち

下田歌子賞への企画協力のお話をいただいたのは、平成十四（二〇〇三）年の秋も深まった十一月下旬だったと思います。岩村に着いたのがお昼だったため、ひつまぶしを食べながら、岩村町の教育長をされておられた鈴木隆一先生と、徳増省允さんという在野の佐藤一斎研究家にお話しを伺いました。歴史街道編集部では、地域の歴史や文化——とりわけ歴史人物を活かした文化事業（地域づくりやまちづくり）のお手伝いもしており、作家の童門冬二先生と一緒に、上杉鷹山の師・細井平洲没後二百年記念事業として六年間にわたり愛知県東海市が実施した平洲サミットや平洲賞というエッセイ公募賞、茨城県取手市のふるさとの先人・本多作左衛門を顕彰したエッセイ公募・頑固者賞などをタイアップ事業として手がけていました。その平洲サミットに鈴木先生や徳増さんも参加しておられたご縁でのお話しでした。

お話を伺ってみると、すでに平成十五年度事業としてスケジュールが決まっており、四月から募集を始めなければならぬが、テーマも応募要項も選考方法もまだ決まっていないとのこと。年明け早々には募集要項を決めないと、ポスターやチラシ、歴史街道記事などの告知媒体が間に合わないという日程です。徳増さんの強力な後押しを受けながら、鈴木先生はじめ、岩村町の皆さんと年の瀬・正月返上で協議し、準備したことを懐かしく思い出します。「歴史街道」誌の平成十五年四月号（三月六日発売）で、「ふるさとを訪ねて」というグラビアページで下田歌子先生と岩村町を紹介するとともに、募集告知を掲載しましたが、誌面を飾ったのは雪景色の岩村の町。お正月が明けてからの撮影になったためでした。

下田歌子賞も今年で二十年。下田歌子賞が始まった時、七十五歳だった童門冬二先生は九十五歳、四十五歳だった私は六十五歳……二十年も変わらずお手伝いさせていただいていることに不思議さがありがたさを感じるとともに、充分にお役にたてたかどうか<sup>じくじ</sup>忸怍たる思いもあります。そして二十年を経て、今、思うことは、エッセイ募集を通して応募者の皆さんも運営に携わる方々も、それぞれがそれぞれの立場で、もっとも「下田歌子先生と心の対話」ができる環境——それは書籍やマンガかも知れないし、映画や演劇、歌や音楽、絵画や資料の展示かも知れないし、講演会・勉強会・ワークショップなど学びや交流の場かも知れないし、バーチャル空間かも知れませんが——ができていったらいいなあということです。



# 下田歌子先生のこと

童門 冬二 どうもん ふゆじ



下田歌子先生は安政元（一八五四）年八

月九日に、現岐阜県恵那市岩村町に生まれました。生家は藩（松平家）の儒者でした。父は平尾録蔵、母は房、そして歌子先生は鉦といいました。明治三（一八七〇）年に父録蔵が、明治新政府の神祇官宣教師に任ぜられて上京し、翌春、後を追って鉦が上京。引き続き一家をあげて東京に出ました。宮内省の御用掛・八田知紀に和歌の教えを受けていた歌子先生は、明治五（一八七二）年十月、推挙されて宮中に出仕し、女官として皇后陛下（後の昭憲皇太后）に仕えます。下田先生の和歌の才能を愛められた皇后陛下が、「これからは

歌子となるように」と仰せられ、鉦の名を改めました。才女の名が高く、明治の紫式部などと呼ぶ人もいました。その後下田猛雄と結婚し、明治十二（一八七九）年十一月には宮中を辞しましたが、周囲から望まれて自宅に「桃天学校」を開設し、政府高官や華族の子女の教育に当たりました。

夫の死後、再び宮内省に入り、華族女学校（学習院）が開校されると教授になりました。この間に、欧米の女子教育を視察するためにヨーロッパに渡っています。

明治三十一（一八九八）年に「帝國婦人協会」を結成、その付属として、翌年「実践女学校」（実践女子大学の淵源）を開設しました。そして清国（このころの中国の国名）からの女子留学生を、積極的に受けいれました。

桃天学校時代には、明治四（一八七二）年に日本からアメリカに留学した五人の女子留学生のうち最年少（当時八歳）の津田

梅子が明治十五（一八八二）年に帰国してきたので、英語の教授陣に加えています。歌子先生は、梅子に英語の指導を頼むかわりに、梅子に国語と習字を教えました。少女時代をアメリカですごした梅子は、英語は得意でしたが日本語が十分ではなかったのです。穴をワナ、柳をウナギといったそうです。とくに手紙の中で使う「候」という字の意味と用字法がわからなくて、何度も歌子先生にしっかりと質問したそうです。歌子先生の説明を英語でノートをとったといわれています。

歌子先生のめざしたことは、日本における女性の地位向上です。そのための女性の教養の高まりです。しかもそのことを「日本女性のよさを失わずに実行する」という、しとかさとやさしさ、温かさを大切にすることを、というものでした。その志はいまも香を失わずに、実践女子学園やふるさと恵那市だけでなく、さまざまなところで引きつがれています。

## 下田歌子賞の選考方法と歴代選考委員（敬称略）

エッセイの部は、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会および PHP 研究所による事前選考の後、作家の童門冬二氏を選考委員長として選考委員のメンバーによる最終選考により、入選作を決めています。

短歌の部は、第8回以降、第19回までは、恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会による事前選考を通過した「小学生の部」「中高生の部」「一般の部」の作品について、恵那市民を中心とする一般市民の方々に、投票でそれぞれ一作品を選んでいただき、得票上位順に入選作を決めていました。第20回以降は、エッセイの部と同じように、選考委員による最終選考に変更しました。

なお、選考・選考委員の呼称は、第19回までは、審査・審査委員としていましたが、第20回以降は選考・選考委員とすることになりました。

**【選考委員長】** 童門冬二（作家）

**【選考委員】**（選考委員長以外。肩書は在任当時のもの）

○第1回、第2回

選考委員なし

○第3回、第4回

飯塚幸子（実践女子大学学長）、江口克彦（PHP 研究所社長）、可知義明（恵那市長）

○第5回、第6回

湯浅茂雄（実践女子大学・同短期大学学長）、江口克彦（PHP 総合研究所社長）、可知義明（恵那市長）

○第7回

吉田公平（東洋大学教授）、湯浅茂雄（実践女子大学・同短期大学学長）、江口克彦（PHP 総合研究所社長）、可知義明（恵那市長）

○第8回、第9回、第10回

吉田公平（東洋大学教授）、湯浅茂雄（実践女子大学・同短期大学学長）、寺田昭一（PHP 研究所・元月刊誌「歴史街道」編集長）、可知義明（恵那市長）

○第11回

吉田公平（東洋大学名誉教授）、田島眞（実践女子大学・同短期大学学長）、寺田昭一（PHP 研究所・元月刊誌「歴史街道」編集長）、可知義明（恵那市長）

○第12回、第13回

吉田公平（東洋大学名誉教授）、山内純子（元全日空客室担当役員）、田島眞（実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長）、寺田昭一（PHP 研究所・元月刊誌「歴史街道」編集長）、可知義明（恵那市長）

○第14回

吉田公平（東洋大学名誉教授）、田島眞（実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長）、寺田昭一（PHP 研究所・元月刊誌「歴史街道」編集長）、小坂喬峰（恵那市長）

○第15回、第16回、第17回

吉田公平（東洋大学名誉教授）、城島栄一郎（実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長）、寺田昭一（PHP 研究所・元月刊誌「歴史街道」編集長）、小坂喬峰（恵那市長）

○第18回

吉田公平（東洋大学名誉教授）、城島栄一郎（実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長）、寺田昭一（PHP 研究所・月刊誌「歴史街道」特別編集委員）、小坂喬峰（恵那市長）

○第19回

吉田公平（東洋大学名誉教授）、初風緑（元宝塚歌劇団・恵那観光大使）、難波雅紀（実践女子大学・実践女子大学短期大学部学長）、寺田昭一（PHP 研究所・月刊誌「歴史街道」特別編集委員）、小坂喬峰（恵那市長）

## 下田歌子賞 各回のテーマと応募数一覧

### ◆エッセイの部

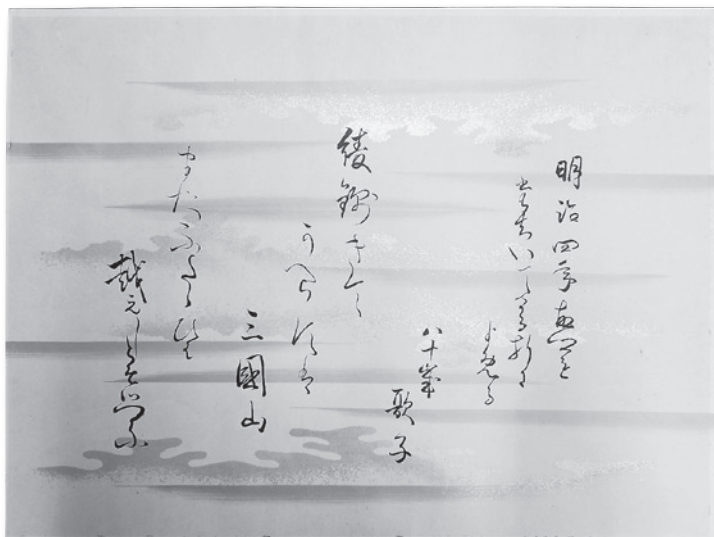
| 回    | 年度   |      | テーマ                           | 応募数 |       |     |
|------|------|------|-------------------------------|-----|-------|-----|
|      | 年号   | 西暦   |                               | 小学生 | 中学生   | 一般  |
| 第1回  | 平成15 | 2003 | 「男らしさ、女らしさ」                   | 245 | 48    | 185 |
| 第2回  | 16   | 2004 | 「出会い」                         | 40  | 102   | 201 |
| 第3回  | 17   | 2005 | 「私の誇る恵那市のよさ～その美しい心と伝統」        | ※32 |       |     |
| 第4回  | 18   | 2006 | 「心に残る父・母・祖父母の教え」              | 34  | 384   | 358 |
| 第5回  | 19   | 2007 | 「父・母・祖父母・兄弟・子どもたち～忘れられないあの一言」 | 95  | 219   | 285 |
| 第6回  | 20   | 2008 | 「家族への思い」                      | 97  | 886   | 311 |
| 第7回  | 21   | 2009 | 「先人に学ぶ」                       | 103 | 181   | 71  |
| 第8回  | 22   | 2010 | 「先人に学ぶ」                       | 46  | 190   | 72  |
| 第9回  | 23   | 2011 | 「先人に学ぶ」                       | 92  | 586   | 100 |
| 第10回 | 24   | 2012 | 「母」                           | 57  | 608   | 189 |
| 第11回 | 25   | 2013 | 「ふるさと」                        | 63  | 565   | 128 |
| 第12回 | 26   | 2014 | 「ふるさと」                        | 57  | 535   | 81  |
| 第13回 | 27   | 2015 | 「家族」                          | 87  | 1,283 | 166 |
| 第14回 | 28   | 2016 | 「家族」                          | 184 | 1,050 | 197 |
| 第15回 | 29   | 2017 | 「志（夢・願い）」                     | 187 | 1,092 | 94  |
| 第16回 | 30   | 2018 | 「志（夢・願い）」                     | 242 | 1,036 | 128 |
| 第17回 | 令和元  | 2019 | 「志」                           | 180 | 1,052 | 175 |
| 第18回 | 2    | 2020 | 「志」                           | 115 | 1,188 | 222 |
| 第19回 | 3    | 2021 | 「志～今、伝えたいこと」                  | 109 | 1,032 | 224 |
| 第20回 | 4    | 2022 | 「夢」                           | 194 | 1,157 | 284 |

※第3回は、恵那市の合併を記念して恵那市民と恵那市にゆかりのある人を対象に部門別に分けて募集（全体の応募数を記載）。

### ◆短歌の部

| 回    | 年度   |      | テーマ                        | 応募数   |       |     |
|------|------|------|----------------------------|-------|-------|-----|
|      | 年号   | 西暦   |                            | 小学生   | 中学生   | 一般  |
| 第1回  | 平成15 | 2003 | ……                         | ……    | ……    | ……  |
| 第2回  | 16   | 2004 | ……                         | ……    | ……    | ……  |
| 第3回  | 17   | 2005 | 【標語募集】「家族みんなで考えよう～我が家の約束事」 |       |       |     |
| 第4回  | 18   | 2006 | ……                         | ……    | ……    | ……  |
| 第5回  | 19   | 2007 | ……                         | ……    | ……    | ……  |
| 第6回  | 20   | 2008 | ……                         | ……    | ……    | ……  |
| 第7回  | 21   | 2009 | ……                         | ……    | ……    | ……  |
| 第8回  | 22   | 2010 | 「家族・思いやりの歌」                | 373   | 860   | 78  |
| 第9回  | 23   | 2011 | 「絆」                        | 437   | 628   | 121 |
| 第10回 | 24   | 2012 | 「母」                        | 257   | 1,000 | 174 |
| 第11回 | 25   | 2013 | 「ふるさと」                     | 468   | 852   | 132 |
| 第12回 | 26   | 2014 | 「ふるさと」                     | 687   | 1,150 | 59  |
| 第13回 | 27   | 2015 | 「家族」                       | 1,830 | 2,404 | 146 |
| 第14回 | 28   | 2016 | 「家族」                       | 1,491 | 1,507 | 183 |
| 第15回 | 29   | 2017 | 「志（夢・願い）」                  | 1,473 | 716   | 91  |
| 第16回 | 30   | 2018 | 「志（夢・願い）」                  | 751   | 1,606 | 210 |
| 第17回 | 令和元  | 2019 | 「志」                        | 947   | 679   | 306 |
| 第18回 | 2    | 2020 | 「志」                        | 999   | 844   | 326 |
| 第19回 | 3    | 2021 | 「志～今、伝えたいこと」               | 1,273 | 1,449 | 293 |
| 第20回 | 4    | 2022 | 「夢」                        | 1,284 | 914   | 420 |

※第4回、第5回、第6回は、恵那市合併を記念して、「【写真の部】ふるさと再発見！あなたが選ぶ恵那市の新名所100選」も募集。



16歳でふるさとを出た時に詠んだ「綾錦 <sup>あやにしき</sup> 着てかへらずば <sup>みく</sup> 三国山 <sup>くにやま</sup> またふたたびは 越えじとぞ思ふ」の歌。  
80歳の下田歌子先生が当時をしのびつつ書いたもの。(実践女子学園図書館蔵)

下田歌子賞20周年記念  
下田歌子賞受賞作品集

夢

令和5(2023)年1月21日 発行

---

恵那市先人顕彰事業「下田歌子賞」実行委員会

(恵那市教育委員会生涯学習課内)

〒509-7292 岐阜県恵那市長島町正家1-1-1

TEL 0573-26-2111 (代表)

---

学校法人実践女子学園 経営企画部

〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1

TEL 042-585-8804

---

(株)PHP 研究所 文化事業部

〒136-8137 東京都江東区豊洲5-6-52

TEL 03-3520-9611 (代表)

---

【表紙肖像写真】明治35(1902)年頃の下田歌子先生(実践女子学園図書館蔵)

【表紙「夢」の書】神谷慎軒

【表紙デザイン】ウエル・プランニング

【本文デザイン・印刷・製本】丸理印刷株式会社

【編集協力】オフィス・昭77